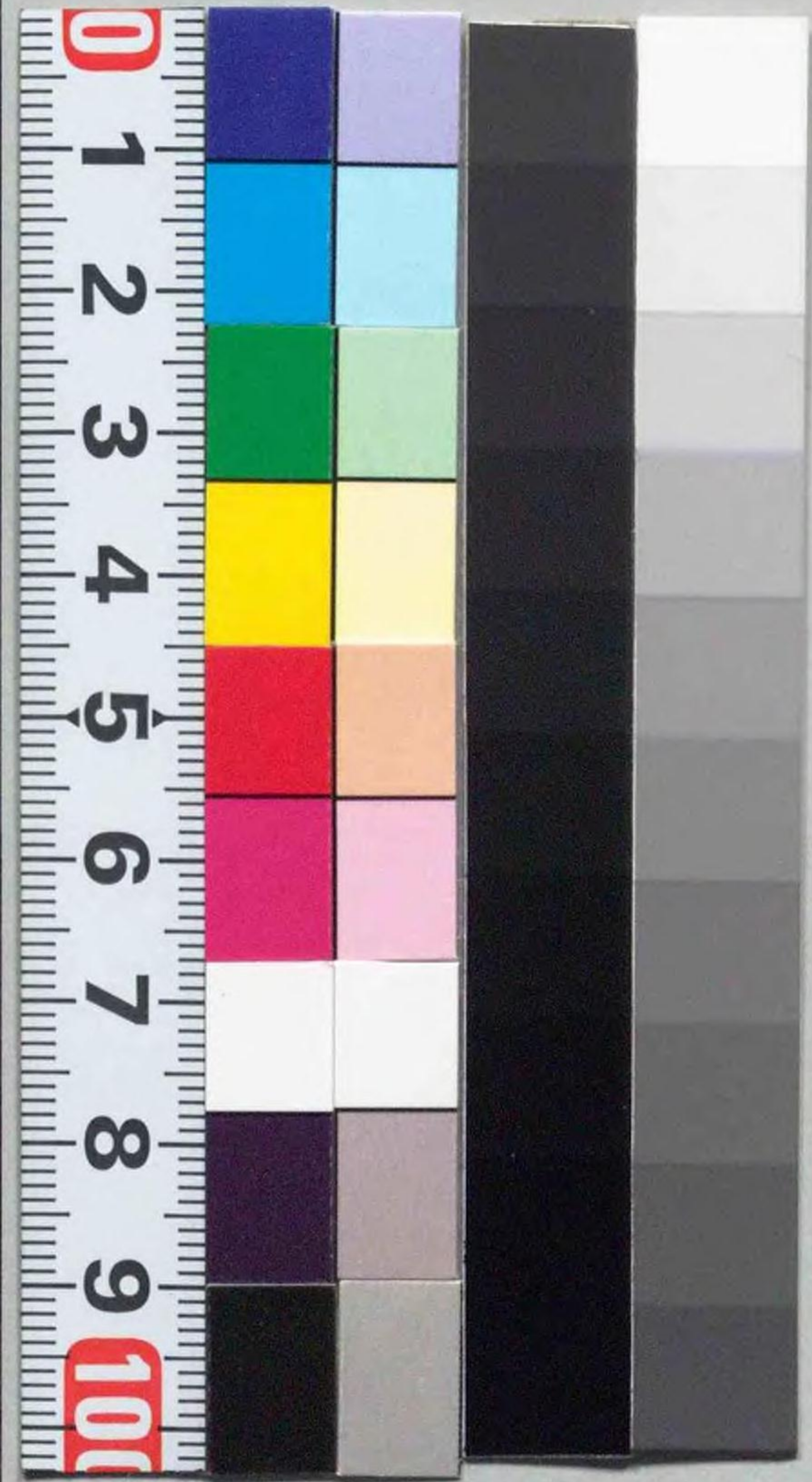
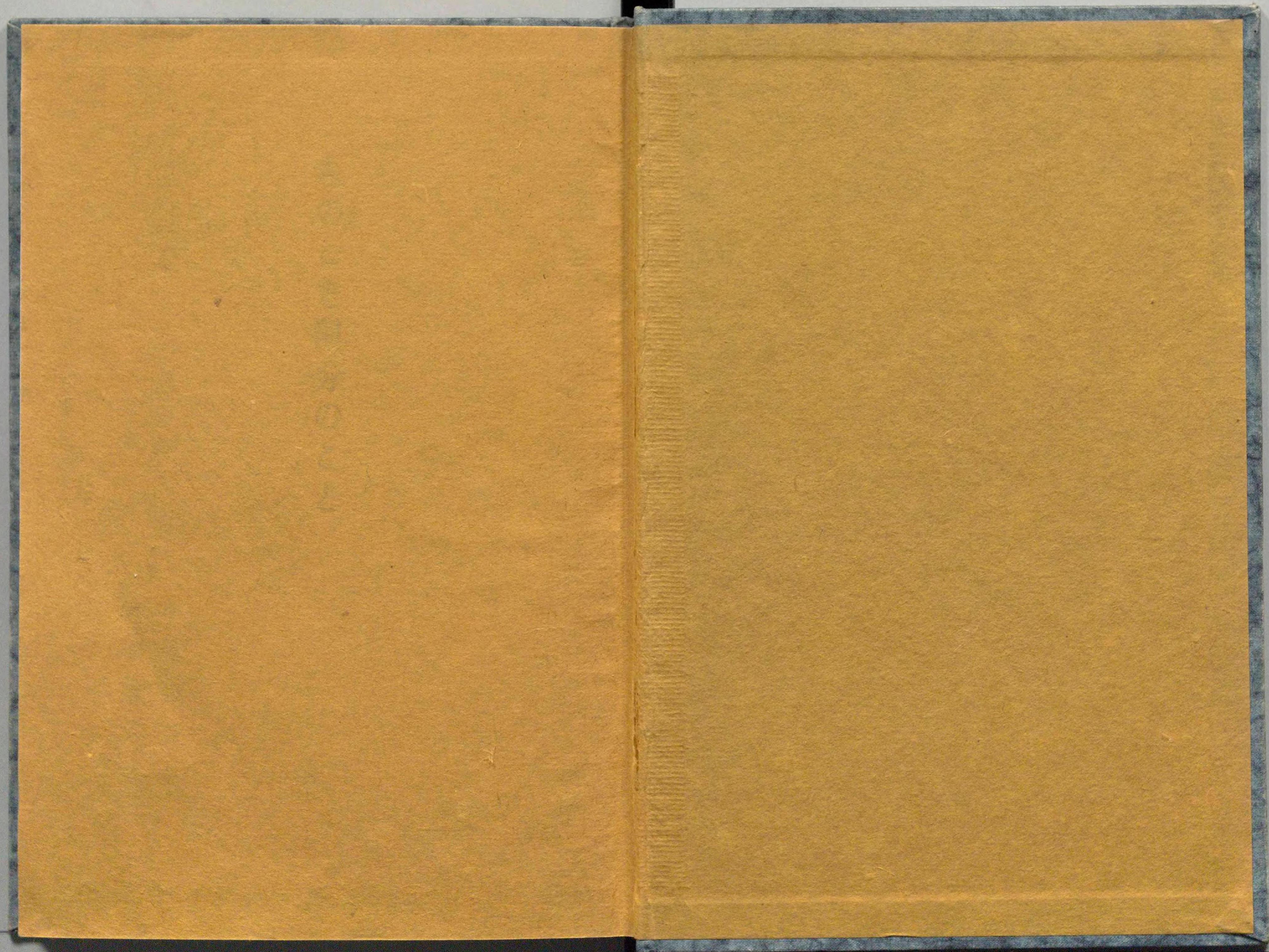


914.6  
Ko567h



00366728

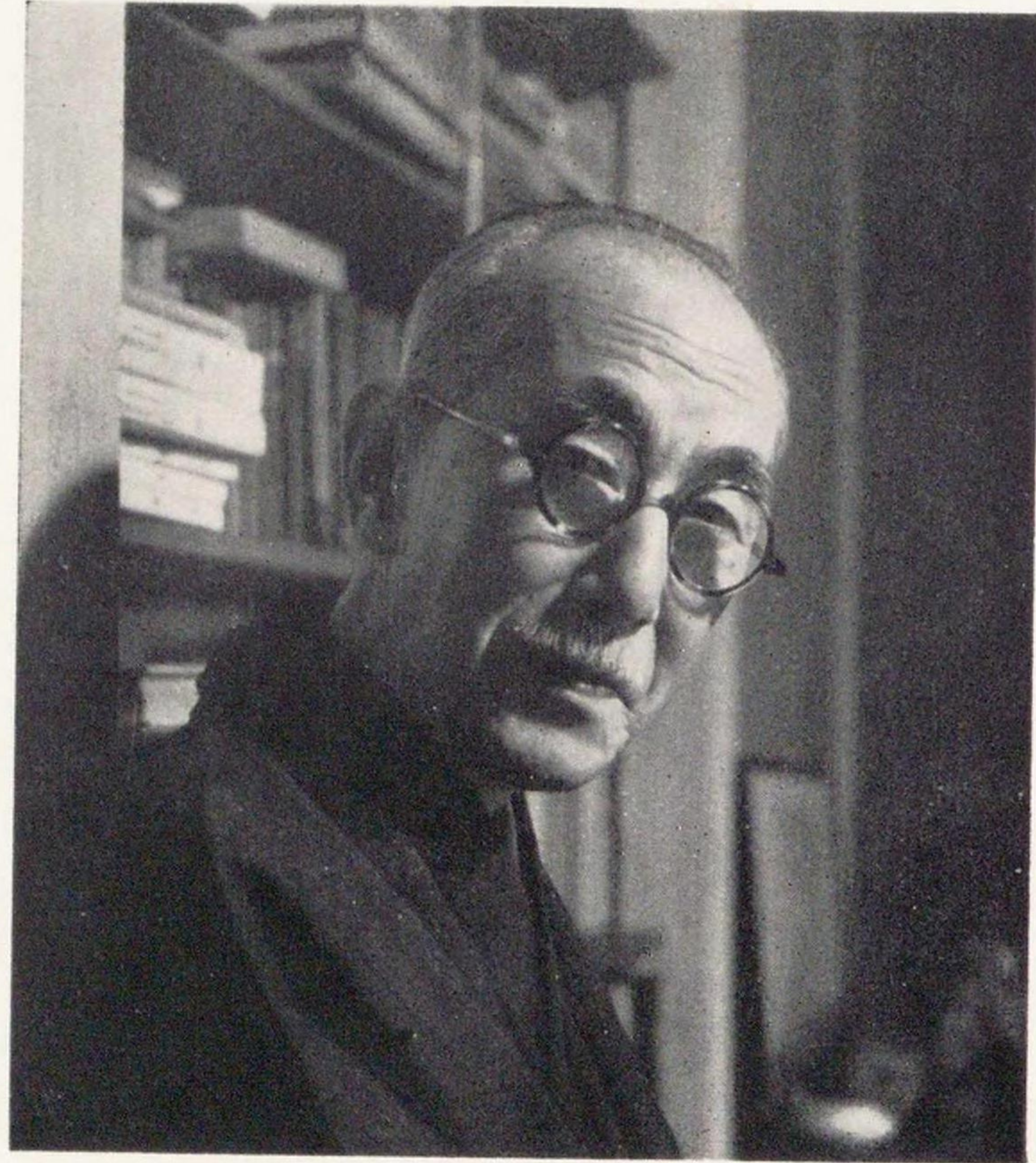




人のことと自分のこと

小宮豊隆著  
角川書店刊

914.6 K0567h



書齋にて著者近影



366728

「漱石發狂」の報告者  
 漱石文庫  
 誤植  
 漱石半身像  
 漱石のうちの猫  
 漱石と寅彦  
 寅彦と死相  
 寅彦と俳諧  
 寅彦と羽子板  
 「御髭」

目次

松根東洋城のこと 六四  
 青春記 七二  
 寫眞 七五  
 死顔 七七  
 森田草平 八二  
 『實説草平記』 八三  
 誤傳の経路 八六  
 うらなひ 八九  
 チョッキのまぼろし 九三  
 野上の死 九六  
 野上のこと 九九  
 兒島のこと 一〇一  
 安倍のこと 一〇四  
 日本人の顔 一〇九

眼鏡 一一二  
 アンシウリアム 一一五  
 モデルとなつて 一二八  
 安井の畫室 一三三  
 顔と聲と 一三〇  
 本多さんの思ひ出 一三三  
 陶然とした茂吉 一三六  
 「一生に一度」 一三九  
 幸田露伴先生 一四二  
 幸田先生の思ひ出 一四四  
 幸田先生から聞いたこと 一五五  
 吉右衛門事件 一五七  
 新しい『紙治』 一六四  
 『忠臣藏』の臺詞 一七三

アメリカと日本 一八一  
ふところ手 一八四  
ドイツ人 一八七  
軍樂隊 一九〇  
『バッハの思ひ出』 一九三  
焰の瀧 二〇〇  
奈良の記憶 二〇三  
郡山の記憶 二二二  
五代目菊五郎 二二五  
雉子 二二八  
中學時代 三三二  
撞球 三三一  
競馬 三三四  
蚊 三三七

一八一  
一八四  
一八七  
一九〇  
一九三  
二〇〇  
二〇三  
二二二  
二二五  
二二八  
三三二  
三三一  
三三四  
三三七

掏摸 二四〇  
白髮 二四三  
颯風 二四六  
貨物列車 二四九  
防空壕 二五三  
魚粉 二五九  
病室から 二六二  
私の讀書法 二六四  
私の信條 二六七  
後記 二七五

二四〇  
二四三  
二四六  
二四九  
二五三  
二五九  
二六二  
二六四  
二六七  
二七五

人のことと自分のこと



### 「漱石發狂」の報告者

漱石がロンドンに留學中發狂したといふ噂が立ち、それが文部省に聞こえ、文部省からドイツ留學中の藤代禎輔のところへ、夏目精神に異狀あり保護して歸朝せらるべしといふ命令が飛んだといふことは、既に私の『夏目漱石』の中にも書いてあつて、多くの人に知られてゐることだらうと思ふ。しかしさういふことを文部省に知らせたのは誰だといふ問題にはいろんな解答があつて、あるひは土井晩翠であるとも言ひ、あるひは岡倉由三郎であるとも言ひ、どつちがどうだとも、當時の私には確定し兼ねた。ただ野間眞綱によると、それを知らせたのは岡倉由三郎で、野間はそれを漱石自身の口から聞いたのだといふことだつたので、私はその通りであることを『夏目漱石』の中に書いておくより仕方がなかつた。しかるに當時岡倉由三郎が藤代禎輔に宛てた手紙が今日まで残つてゐて、それが福原麟太郎君から私のところへ贈られたものを見ると、必しもさうきめてしまつていいものかどうか、私にははつきり判断がつかなくなつた。それについてここで

少し書いてみようと思ふ。

まづその手紙にはかうある。――

「拜啓。その後は心ならぬ御無音に打過候處益々御多祥にていよく御歸朝の期と相なり候由承り御羨ましく奉存候。いづれ不日當市へ御出の事と樂みをり候が、こゝに一つ急に貴意を得たき事相生じ候まゝ一寸とりあへず一書を呈し候。實は、昨日正午頃文部省より當公使館を経て野生へ電信到着いたし中に、日本文、ローマ字にて（四時三十三分東京發）

日本公使館にて岡倉由三郎。

夏目精神に異狀あり。藤代へ保護歸朝すべき旨傳達すべし 文部省

とあり。これによりて觀候へば、過般夏目氏の精神に異狀ある旨當市に在る人々 土井文學士其他より傳聞いたし候事有之その事と相見え申候。友人茨木清二郎（文學士）も其後見舞はれ候へ共別に變りたるふしを談話中に見いださず只しきりに『世間が己の敵にてあるが如き感ありこれに對して二三の解答を思ひあたれり』など問はずがたりを夏目氏より同氏にしかけたりし邊などやゝ常に違へる所と思はれしのみと茨木氏は野生に語られ申候。且茨木氏は夏目の散歩にいでゝ不在なりしを幸に宿の女主人に就き色々聞き<sup>た</sup>詰したるに、主人の言に夏目氏は過般一日急に常な

らぬ態度（沈黙其他）を會食のをりに示し其翌日より二日間は部屋にのみありて終日食事にも來らず訝かしきまゝ懇意の醫師をそれとなく招き主人の友人として夏目氏に紹介し診察を行はしめしに精神やゝ異なる由を言ひ、後同醫師はそれとなく夏目氏を散歩に誘ひだし種々談話に氣をまぎらす様せしに、夏目氏の様子追々よろしく本日にては見らるゝ通りまでに至れりと語り候由。土井氏の一週間程看護に夏目氏方に居られしと云ふは其間（茨木氏訪問前まで）の事と思はれ申候。野生は早速見舞たく存じをり候ひしかどもをりしも學校參觀と轉住のさわぎに取まぎれをり候事として今日まで未だ之をはたさず。其中に他より夏目氏も近々歸朝せらるゝ筈にてその前スコットランドへ旅行の旨傳聞、精神のくるひの事ははたしてどこまでが事實なりやを疑はしめをり候次第に候。野生の轉居は去る（前の）火曜に濟み候まゝ轉居のしらせをする際、野生より夏目氏に向ひ野生も近々あまりさむさのつらぬ前一度北の旅行いたしたくなど書き添へ置候に夏目氏よりスコットランドの Danarach, Pitlochry と云ふ宿所? の名にて文通あり末に、

『目下病氣をかこつけに致し過去の事杯一切忘れ氣樂にのんきに致居候小生は十一月七日の船にて歸國の筈故、宿の主人は二三週間とまれと親切に申し吳候へども左様にも參ら<sup>ま</sup>兼候當もなきにべんくのらくらして居るは甚だ愚の至なれば先よい加減に切りあげて歸るべくと存候いづれ歸倫の上は一寸御目にかゝり可申と存候云々』

とあり。しかれば夏目氏は來月七日發にて（印度洋より）歸朝の事に決しをるものと存候。偕、文部省の打電の所置については、目下在京の三上氏とも御相談申上候（二字不認 貴君には如何にも御迷惑に候へども、何分命令の事として之に重きをおき候より外無之候間、御地の御しらべを御切りあげ被下、近き内當地へ御渡り被下ては如何。（幸にして夏目氏の其後の様子常に復しをり候はんには上なき事ながら）、少くとも本月中位に御出願はれまじくや。野生は實は北の方へ旅行の豫備と、のひ來る廿八日には必ず出發一週以内にて歸り候様既にそれ〴〵準備ををへり候へ共御考次第にては之を見あはせ候より外無之かと存候。或は此野生の旅行を利用し、夏目氏とスコットランドにてあひ、一緒に歸倫候も一案と存せられ候が夏目がいつまで同地のいつこにをられ候かは、本日夏目氏の留守をたづね宿の主人より其後の様子、スコットランドに滞在の様などきゝあはせたる上にて決したくと存候。たゞし野生の旅行は、許可なき私のしのびたび故、おもてむきには出來可申候へ共、來春早々大陸へ渡り候都合故、相なるべくば萬障を排してこの際行ひ度と存をり候。夏目氏の留守宅の様子は知れ次第、次便に申上べく候。偕又文部省が同氏の病氣の事を聞きこの度の擧にいで候までの手續は一向知れがたう候へ共或は姉崎（土井氏）氏より大學の井上（哲）氏を經それより文部へ知れ候にては無之かなどゝも存せられ候。先は右の様子、前後ぶそろに候へ共、とりまじめ急に申上候御返事直にたまはり度奉願候 草

草頓首

藤代學兄御前

野生の所は 36, Waltham Rd, London, W.

夏目氏のロンドンの住居は 31, The Chase, Clapham Common.

この手紙は只今 80, Gower Street の三上氏の御宿にて認め申候。同氏よりは別に手紙を差上られず候へ共よろしく野生より申上くれよと御事に候。かしこ」

——これには日附がない。且つ中味だけで封筒がないから消印も見られない。しかし中に「十一月七日」のことを「來月七日」と書いてある。これが十月に書かれたものであることはたしかである。のみならず「去る火曜」に轉居したと書いて、その「去る」の横に「前の」と注がついてあるところから想像すると、この手紙が書かれたのは、火曜以後幾日か立つてゐる曜日だつたはずで、「去る」と一度は書いたものの、それだけではその週の火曜と間違ふおそれがあるので、轉居した火曜は先週の火曜であることをはつきりさせる爲に、横に「前の」と書き加へたものに相違ない。とするとこの手紙は、十月十日前後に書かれたものではなかつたかと思はれる。かりにこれを十月十日とすると、その週の火曜は十月七日、その前の週の火曜は九月三十日にあたる。

岡倉由三郎

日本でも西洋でも下宿を變つたりするのは、月半ばもしくは月末といふのが普通である。その上岡倉が九月三十日に轉宿して一兩日たつて漱石のロンドンの下宿に手紙をかき、それがスコットランドのピトロクリに轉送されて、漱石の返事が岡倉のところへ十月十日の幾日か前に届き、それに出發にはまだ間もあることだから、二三週間とまつて行けと、宿の主人が勧めてくれると書いてあつたとしても、決して勘定が合はないといふことはない。それで私は一往この岡倉の手紙が十月十日前後に書かれたものと想定しておかうと思ふ。

この手紙で見ると、岡倉は「漱石發狂」の噂は、當時土井晩翠と同じ下宿にゐた姉崎正治から大學の井上哲次郎に報告され、井上から文部省の耳に入つたものではないかと想像してゐる。土井晩翠はしばらく漱石と同じ下宿にゐたこともあり、この手紙によると「一週間程看護」の爲に漱石の下宿に行つてゐさへもしたといふのだから、漱石が神經衰弱に罹つてゐたことを、土井が承知してゐたことは争はるべくもない。土井がそれを大袈裟に漱石が發狂したと感じたといふことは可能である。その土井が同宿の姉崎に尾緒をつけて報告したといふことも、考へられないことではない。しかも姉崎は井上哲次郎の姪か何かの婿だつた。別に悪意はなくてもニュウスの一つとして姉崎がこのことを井上に知らせることもありうることであるし、おしやべり好きの井上それが文部省に行つて話すといふことも、また十分ありうることである。岡倉の想像は決して

當つてゐないとは言へない。

ただをかしいのは、文部省の電報がなぜ岡倉宛に來たかといふことである。もしその報告の出所が姉崎だつたとすれば、電報は當然姉崎に來さうな氣がする。土井は英文學專攻だが、しかし土井はたしか私費で留學したはずだから、文部省からそんな電報は來ないだらう。同じ専門の留學生で文部省から來た者は岡倉一人だといふので、電報は岡倉に來たのだとすべきであるか。しかし茨木清次郎も英文學の出身で、文部省から留學させられてゐたはずである。のみならず藤代は獨文學でドイツに留學してゐたから、專攻も留學地も違ふが、しかし漱石とは同じ船で留學の旅に上ぼつてゐる。留學期限も恐らく同じで、歸りの船も恐らく同じだといふことは、文部省にわかつてゐたはずである。それだからこそ文部省も藤代に宛てて、漱石を保護して歸朝しろと言つてよこしてゐるのである。文部省はその藤代になぜ直接打電しないで、岡倉に取次ぎをさせたのか。

のみならず岡倉は、自分自身こそ直接に漱石に會つてはゐなかつたが、しかし友人の茨木清次郎から漱石の様子を聽いて、漱石が多少普通と變つたところを示してはゐるが、發狂といふやうな大袈裟な病狀ではないといふことを承知でゐたはずである。岡倉のところへピトロクリから來た漱石の手紙を讀んで見ても、これが精神に異狀のある人間の書いた手紙だらうとは、岡倉のみ

ならず誰にも想像できなかつたに違ひない。にもかかはらず岡倉は「何分命令の事とて之に重きをおき候より外無之」と言つて、藤代に一日も早くロンドンへ来て漱石を日本へ連れて歸れと勧めるのみならず、のちに藤代がロンドンへ来た時（十一月五日ごろ）にも、漱石の訪ねて来る前に藤代に會ひ、「是非一所に連れて歸れ、荷物の始末は跡でどうにでも付ける。ああいふ電報のあつた以上若しもの事があつたら君は申譯はあるまい」などと熱心に藤代に勧告してゐるのである。岡倉が戦戦兢兢と上司の命令に服従することを惟れ努める人間だつたのならとにかく、漱石を發狂者として連れて歸ることを一所懸命に勧める岡倉の心理も、私にはよくわからない。

藤代が漱石に會つて話をし、一緒にナショナル・ギャラレイを見物した上、その晩は漱石の下宿に泊り、翌日ケンシントン・ミュージアムだのブリチッシ・ミュージアムだのを見物し、ブリチッシ・ミュージアムのグリルで焼肉の皿でエールを飲み「もう船までは送つて行かないよ」といふ漱石の言葉を最後に、漱石を置いて一人で立つて行つたのは、きはめてリーズナブルな計らひだつたと言つていい。漱石が十一月七日の船で出發するはずだつたのを、スコットランドの旅をして豫定よりも長逗留をしたので荷物を造ることができず、已むを得ず船室の豫約をキャンセルしたのを、郵船會社の事務員はさも不平らしく藤代に訴へたといふが、これなぞも漱石發狂の噂に輪をかけた一つの材料になつたのかも知れない。しかし藤代は漱石の下宿へ行つて見て、

「留學生としてよくもこんなに買集めたと思ふ程書籍が多い」のに驚き、これを放りつばなしにして他人に後始末を任かせるなどといふことは、自分でもたうていできさうもない。漱石が出發を延ばすといふのも尤もだと感じたといふから、漱石のキャンセルはちやんと筋の通つたキャンセルだつたわけである。

勿論こんなことを色色と言ふのは、文部省に報告した者が岡倉であると、私が内内疑つてゐるといふことを意味するのではない。ただ野間眞綱の言ふことを聽いて、報告者は岡倉であると信じてゐたのが、岡倉の手紙が出て来て段段分からなくなつて来たといふまでである。當事者のほとんど全部は死んでしまつてゐるので、會つて真相を根掘り葉掘り究明するわけにもゆかない。ただ藤代の書いたものを讀んで見ても、無論藤代は露骨にそんなことは何も書いてゐないが、知らせた者は岡倉だと直覺してゐたのではないかと想像させるふしがなくもないのである。

## 漱石文庫

漱石が亡くなつて間もない時のことだつた。大塚保治さんが漱石の書齋の書棚を一わたり見廻してから、やつぱり夏目君は讀む本を集める方針だつたんですね、と私に言つた。私にはその意味がはつきりしなかつたので、即座の返事にまごついたが、しかしすぐ漱石は道樂に骨董的に本を集めるといふのではなく、自分が讀みたいと思ふ本だけを集める方針だつたといふ意味なのだなと氣がついたので、ええさうですと、少し間を置いて私は答へた。

まつたく漱石には、これは珍本だから買ふの、稀覯本だから所蔵するのといふ、骨董趣味はなかつた。勿論漱石のところには珍本もあり稀覯本もあるにはあつた。しかしそれは珍らしいから買つたのではなく、讀みたいから買つたものだつた。その意味で漱石の藏書の性格ははつきりしてゐた。漱石の藏書は多くの學者の藏書に比べて、あるひは少ないと言へるかも知れないが、しかしそれはすべて漱石の讀んだ本、もしくはこれから讀まうと思つてゐた本である。

漱石の藏書で特に目に立つことは、その藏書にいろんな書き入れがあるといふことである。漱

石はロンドン留學中に文學論の著述を思ひ立ち、衣食の費用をきりつめられるだけきりつめて本を買ひ込み、下宿に立て籠もつて一切の時間を擧げてその研究に没頭したのだから、留學中の書き入れは特別な書き入れであるといふこともできる。しかし漱石の本には、漱石が小説を書き出してからのものにも随分書き入れがあり、例へばモーパッサンの小説だのイブセンの戯曲だのベルグソンの哲學だの、部分部分に對する批評もあれば全體に對する批評もあつて、それを一一検討してみると、漱石の本の讀み方もわかるし、漱石の感じ方、考へ方もわかつて、非常に面白い。「コンナ事がアルカ馬鹿ヲ云へ」といふのがあるかと思へば、「何故貴様ノ國ノ事ヲカ、ナイ」といふのがあり、さうかと思へばまた「美シキ奇想ナリ、キーツノレミヤニ似タリ、幽遠ノ趣アリテ然モ主意明晰ナリ 平凡ナル者ハ美ナラザル事アリ、故に奇ヲ求ム、奇ヲ求メテ已マザレバ怪ニ陥ル、怪ニ陥レバ美ヲ失ス、詩人ハ此呼吸ヲ知ル、鏡花ハ此呼吸ヲ知ラズ。詩人ノ想ハ詩想デアル、鏡花ノ如キハ狂想デアル」といふものもある。

かういふ書き入れは一往整理して『漱石全集』の別冊に收められてゐる。これを材料として深く研究しきへすれば、漱石の藝術の内部機構がいろいろ精細にわかつて來るはずである。私も一度これに手をつけてみたいと思つてゐるが、何分にもいろんなことに手を出してゐるので、未だにその志を果さない。誰か若い篤志家でさういふことをしてみようと考へる人はゐないものかと

思ふ。

それに東北の人達に都合のいいことは、漱石の蔵書が現在仙臺に、東北大學に全部保存されてゐることである。蔵書ばかりではない。漱石の日記、ノート、學生時代の試験の答案、漱石自身が謄寫版に刷つた試験問題までもある。

漱石の蔵書がほんの僅かの篤志家だけに利用されるのでは勿體ない。なるべく多くの漱石研究家の役に立てるには、どうするのが一番いいかといふのが、曾て我我の問題だつた。そのためには漱石の書齋、書齋の調度、本棚、蔵書などを遺族の住居から截り放し、漱石博物館とでもいふやうなものを作るのが一番いいといふことになつたが、しかし時勢が時勢だつたので、それに必要な費用の調達しやうがなく、たうとうそれは斷念して、蔵書だけでもどつかに寄附するといふことに方針を變更しなければならなかつた。寄附するとすれば、本郷の大學は漱石とも深い縁故があるし、第一東京なら恐らく利用率が一番高い。それで東京大學にその話をして見たが、しかし本郷の圖書館では、どの本もばらばらにほごしてそれぞれの部門に列べる方針なのださうで、漱石の蔵書でも例へば漱石文庫なら漱石文庫として一纏めに別置するわけには行かないといふのである。せつかく纏まつたものをばらばらにするのでは、意味がない。自然東京大學へ寄附することは斷念しなければならなくなつた。

いろいろ考へた末、丁度私が仙臺の大學の圖書館長をしてゐた關係上、漱石の蔵書を思ひ切つて仙臺へ寄贈してもらふことにした。仙臺の大學ではヴント文庫だのシュマルソウ文庫だの、その他いろいろの文庫がそれぞれ一纏めにして別置してある。のみならず狩野亨吉の蔵書やケーベルの蔵書のほとんど全部も、大學の圖書館に來てゐる。狩野亨吉は漱石の親友であり、ケーベルは漱石の敬愛してゐた先生である。漱石の蔵書を仙臺に置くことは、利用の面から言つてあまり適切であるとは言へないが、しかし狩野文庫とケーベル文庫とがある中に、漱石文庫があることは、きはめて自然なことであるといふことができる。漱石文庫にもし靈があるとすれば、その靈はむしろ仙臺に來ることを喜ぶに違ひない。それで私は部屋の都合を無理につけて、ケーベル文庫と漱石文庫とを一室に別置し、その部屋にケーベルの寫眞と漱石の寫眞とを掲げることにした。これは今日でもそのままにしてあることと思ふ。

漱石の蔵書と漱石の日記その他は、昭和十八年の暮に、岩波茂雄の盡力で仙臺に送られて來た。翌翌年、昭和二十年の三月十日に、漱石の早稻田南町の家は戦災をうけて全部灰燼に歸してしまつた。もう少しくづぐづしてゐたら、漱石の蔵書も日記も何もかも一緒にすつかり焼けてしまつてゐたはずである。仙臺に引き取つたお蔭でそれが全部助かつたのは、何より有難いことだつた。ただ私は終戦後東京に移つて來た。東京に來て漱石文庫から離れてみると、やつぱり淋しい。

のみならず私の手で整理しなければならぬものも、まだ少し残つてゐる。仙臺に後ろ髪をひかれる思ひである。

(二六・一〇・二〇)

## 誤植

漱石の歿後『漱石全集』を出版することになつて、森田草平と内田百閒と私とがその校正をひき受けた。私は一つも誤植のない全集を世の中に送る覺悟で、校正に従事しようとした。それはたしか大正七年(一九一八)のことだつた。

私の受持は、私が編輯した、まだこれまで出版されたことのない、例へば漱石の書簡・日記・ノート・初期の文章・俳句・漢詩、その他の部分だつた。私は二人の助手を使つて、毎日のやうに築地活版所に通つて、校正刷に眼を通した。

23 誤植  
校正は三校を原則としてゐた。助手二人が眼をそれぞれ通したものを、更に私が眼を通すのが一校である。それを築地活版所の校正係が見て、私達の見落しがあれば、それを訂正した上で、我我のところへ再校刷となつて届けられるのである。我我は一所懸命だつた。にもかかはらず、見落しはいくらでもあつた。再校・三校が来てみると、我我の見落しを監督するはずの築地の校正係の見落しさへ方向にあつた。



私は懸賞して見落しを發見することに努めた。一字五錢だか十錢だか忘れたが、我我の方と築地活版所の方と、先づ二つにわかれて、見落し發見に賞を懸ける。ついで私と助手二人との間でも賞を懸ける。のみならず我我の間では、みんなが一度眼を通した校正刷を、更に私が受け持つて、助手の一人に本文を特別な、意味の通じない読み方で讀んでもらひながら見て行き誤植を發見しようとする、新しい方法を案出した。例へば「僕が二十三四にかきかけた小説が十五六枚残つて居た。よんで見ると馬鹿氣てまづいものだ。あまり耻かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた」といふ本文の終りの方を「よんでケンるとウマ・シカ・キてまづいものだ。あまりチかしいからマヅ・タツてツマにイノチじてハンコにしてシブつた」といふやうに讀んでもらふのである。

築地活版所の校正係で『漱石全集』にかかりきりだつたのは、たしか三人だつた。私の方も三人だから、合計六人である。それが三度、つづ見るのだから十八度、それに右の特別な読み方の校合を入れるとすれば、我我は合計十九度眼を通した勘定になる。これなら安心だと思つてゐたが、しかし『全集』が出て見ると、誤植はやつぱりあるのである。自分でも發見するし、讀者からも指摘して來た。

私は情ない氣がした。私は發見したり、指摘されたりする度毎に、初校・再校・三校の校正刷

を點檢して、一體この誤植は何校目から始まつてゐて、どこの誰の責任であるかをつきとめて見ようとした。しかし驚ろいたことは、さういふ誤植の大部分が既に初校の校正刷にあり、それが再校から三校まで、ずつと誰からも發見されずにゐて、そのまま印刷されたものだといふことだつた。今まで見事隠れおほせてゐた罪人が忽然我我の眼の前に現はれて、覆面をとつてしまひでもしたやうに、私は氣味が悪いやうな氣さへした。

しかしこれは、考へてみると、人間の注意の緊張と弛緩とのリズムは、人人によつてそれぞれ違つてゐるとしても、その最大公約數のやうなものがあつて、そこでは人人の緊張と弛緩とは必ず一つのものになり、丁度その弛緩の谷の底にあたる部分にその誤植があつたのだとすれば、眼を通した數は十九度でも、つひに發見されずにすんだのだと言へないこともないかも知れない。これは實驗してみなければわからないことであるが、しかし私は何かそんなことでも想像しなければこの現象を説明して、自分を納得させることができない氣がした。

今から考へて見ると、あの時も少し私が學問的な立場に立ち得てゐたら、あの校正刷の誤植の據つて來たるところをつきとめて、人間の注意に關する具體的な有益な論文に纏めることができたのではないかといふ氣もしないではない。なにぶんにもその時の私の態度は、責任の追及といふことだけに向けられてゐたので、せつかくの好い資料も目前の問題に利用されたきりで、無

意味に層籠にほうり込まれてしまったのである。

(二七・七・一七)

### 漱石半身像

最近、ある彫刻家からブロンズで漱石の胸像を作ることになったにつき、原型ができあがったから見に来てくれないかと頼まれた。

この彫刻家は生前の漱石の顔を見たことがなかった。それで漱石の寫眞を數種集め、それを手がかりに漱石像をまとめあげることにした。しかし寫眞だけで彫刻を造ることは、平面だけのものを立體化することである。わからない點が多く、骨が折れ、いまだに肚の中に落つかないものがあつて困るといふことだった。

私は原型を前に置いて、思ひつくままをあだのかうだのと言つた。——漱石は軀幹からだに比例して顔が大きかつた。この顔は小さすぎる。のみならず漱石の頭はもつと大きく、且つ奥行があつた。額ももつと廣かつた。鼻ももつと大きく高かつた。眼はもつとぎろりとしてゐた。眉毛はこなにくるりと三日月形になつてゐず、太くて途中で切れてゐる感じである。漱石の唇には特徴があつて、愛嬌といふか色氣といふか、何か人を牽きつけるものがあつた。この耳は漱石の耳と

は違ふ。

勝手なことを無遠慮に列べ立てる私の言葉を、彫刻家はおとなしく聴いてみてくれたのみならず、ある時は指先で土をとつてのけ、ある時は指先で土を追加しながら、かうですか、この程度でよろしいのですかなどと、片端から原型に應急の粗い訂正を加へていった。それをみてゐるうちに私は、自分のいつてゐることが段段あやふやになつて來ることを感じ出した。應急の心覺えのための訂正だから、さうであるのは當然のことといつていいが、しかし訂正しても漱石の顔は、ちつとも前よりはよくはならないのである。一體どういふ風にいひ現せば私は、この原型に即して、私の中に持つてゐる漱石像を相手にそのまま傳へることができるか。その見當がつかなくなつてしまつた。

無論私の中にははつきりした漱石像があるはずである。しかし私は彫刻家でも畫家でもなかつたから、漱石の額が廣かつたとか鼻が大きく高かつたとかは覺えてゐても、例へばその額がおよそどのくらゐの面積でどのやうなカーヴを描いてゐたものやら、またその鼻の鼻梁がどのやうに張つてゐて線が鼻翼にどう流れていつてゐたものやら、具體的には何一ついふことはできないのである。しかも彫刻家の方からいへば、さういふ助言が一番必要な助言だつたのだらう。さう思つて私は私の漱石像を、できるだけ彫刻的もしくは繪畫的に定著しようと試みたが、しかし私の

中の漱石像は絶えず動揺して、さういふ意味でつひに一點に凝集することがなかつた。

彫刻家は大變参考になつたといつて感謝してくれた。しかし私は助言者としてはまるで無力だつたことを感じて、そのアトリエを去らないわけにはゆかなかつた。結局私の漱石像は感じの上だけにしか立つてゐないのである。

## 漱石のうちの猫

『吾輩は猫である』で有名になつた漱石のうちの猫は、漱石が千駄木から西片町へ、西片町から早稲田南町へと、越して行く先先に連れて行かれた猫である。西片町へ越して行く時には、鈴木三重吉が長目の煤竹の紙屑籠に入れて徒歩で運んだが、途中で猫があばれ出し小便をし、三重吉の絹の著物をすっかり汚してしまつたので、三重吉からひどく怨まれた。恐らくそれで懲り懲りしたのだらう、すぐそのあと早稲田南町へ越して行く時には、三重吉は以前のやうに、猫はおれが運んで行くとは言はなかつた。その代理を誰が勤めたかは、おぼえてゐない。あるひは荷車の上に積まれるか、それとも誰かに抱かれて人力に乗つて行つたのかも知れない。それは明治四十年（一九〇七）九月二十九日のことだつた。

猫はその翌年、明治四十一年九月十三日、丁度漱石が『三四郎』を執筆してゐるうちに、裏の物置のへつついの上で死んでゐた。漱石夫人はその屍骸を北側の裏庭に埋めさせ、白木の角材を買つて來させて、漱石に何か書いてやつてくれと頼んだ。漱石はそれに「猫の墓」と書き、裏に

「此の下に稻妻起る宵あらん」と書いた。これについては漱石の『永日小品』の中の『猫の墓』に詳しいことが出てゐる。

「此の下に稻妻起る宵あらん」といふ句の意味の、はつきりしたところは私にはわからない。しかし『猫の墓』の中に、猫が段段に衰へてゆくところを描いた、「猫は吐氣がなくなりさへすれば、依然として、大人しく寝てゐる。此の頃では、じつと身を竦める様にして、自分の身を支へる縁側丈が便であるといふ風に、如何にも切り詰めた蹲踞まり方をする。眼附も少し變つて來た。始めは近い視線に、遠くのもの映る如く、悄然たるうちに、どこか落付が有つたが、それが次第に怪しく動いて來た。けれども眼の色は段段沈んで行く。日が落ちて微かな稻妻があらはれる様な氣がした。けれども放つて置いた」といふ一節がある。この「稻妻」と句の「稻妻」とを突き合せてみると、漱石がこの句で表現しようとしたものは、およそ把へられさうな氣がする。これは恐らく意味の句であるよりも感じの句である。

漱石夫人はこの猫を愛した。といふよりも、いはばこの猫を信仰した。漱石が『吾輩は猫である』を書き出して有名になつたのは、この猫のお蔭である。とまでは考へなかつたとしても、ともかくこの猫が夏目家に幸運をもたらしたものだといふ風に考へて、少くとも猫の死後は、猫の靈を大事にした。月月の猫の命日には、鮭の切身が一片、鰹節をふりかけた飯が一皿、必ず墓前に

供へられた。もつともこれは後には簞笥の上に供へられることになつたが、しかし信仰はずつと後まで變らなかつた。

無論漱石が猫にそのやうな信仰を捧げるはずもない。のみかその猫に特別な愛情を注ぐといふやうな様子もなかつた。勿論『吾輩は猫である』には、方に猫の動作に關するさまざま描寫が出て来る。これは『吾輩は猫である』に一種の現實性を與へる必要上、やむを得ず注意し觀察しなければならなかつたのだとも言へなくはないが、しかし漱石に猫に對する興味がなければ、たうていあれだけのもの書けるはずはない。その意味では漱石は、猫を愛してゐたと言つても、少しも差支ないのである。殊に『猫の墓』に出て来る猫の描寫に至つては、無論積極的な愛情とは言へないまでも、廣い意味での漱石の愛が脈脈として動いてゐることは、明らかである。

しかし愛情といふ點から言へば、漱石は犬の方をもつと積極的に愛した。それは『硝子戸の中』のヘクトー（漱石の飼犬の名）の記述を見れば、すぐわかる。第一、ヘクトーが死んだ時には、漱石は自分で言ひ出して、猫の時と同じ白木の角材を買つて來させ、自分でそれに「秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ」といふ句を書き、それをヘクトーを埋めた土の上に、墓標として立てさせてゐるのである。勿論明治四十一年（一九〇八）の漱石と大正三年（一九一四）の漱石との間には六年の隔りがある。それだけ前の漱石と後の漱石との物の考へ方・感じ方に著しい相違が出て來

てゐることは言ふまでもないが、しかしその相違を勘定に入れるとしても、また公平を愛する漱石のものの處理の仕方を勘定に入れるとしても、漱石のヘクトーに對する態度もしくは愛は、相當濃厚で、相手をほとんど人間として扱つてゐるやうなところが、猫の場合とは随分違ふやうである。「秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ」の句でも、「此の下に稻妻起る宵あらん」の、美しいけれどもどつかによそよそしいものがあるのに比べて、はるかに暖かに、相手をいたはる心持が滲み出てゐる。

漱石は人に決して求めることはしなかつたが、しかし非常な淋しがりやだつた。それだけに相手が純粹に人なつつかい態度で漱石に働らきかけて來ると、漱石もまた純粹な人なつつかさをもつてそれに對した。ヘクトーの場合は、まさにそれである。ヘクトーがデイステンパーに雇つて入院した時、漱石が見舞に行つてやると、ヘクトーは「さも嬉しさうに尾を振つて、懐かしい眼を」漱石に向けたので、漱石はしやがんで自分の顔をそばに持つて行き、右の手でその頭を撫でてやつた。するとヘクトーは漱石の顔を「所嫌はず舐めようとして已まなかつた」のださうである。のみならずヘクトーは漱石の「見てゐる前で、始めて醫者の勧める少量の牛乳を呑んだ」などといふことを、漱石はいかにも嬉しさうに書いてゐる。

猫の心持に立ち入つて見なければ、猫が漱石に對してどんな氣持を抱いてゐたかは分からない。

しかし少くとも外見上猫は、そんなに人なつこく振舞ふことはできないやうに生れついてゐる。かりに人なつこく振舞ふことがあるとしても、猫には何か底意がある氣がして、人はその懐かしさを、純粹なものとして受とることができない。うつかりしてゐると、横合から水でもぶつかけられさうな、ちよつと物騒な感じである。もつともその點から言へば、漱石が、『吾輩は猫である』といふ題名でああいふものを書く方がむしろ自然で、かりにこれが『吾輩は犬である』といふ題名だつたとしたら、漱石はたうていあいふものを書く氣にはならなかつたに違ひない。さう考へると猫は、漱石夫人の信じてゐるやうに、あるひは漱石の守護神だつたと言つていいのかも知れないのである。

(二八・五・一〇)

## 漱石と寅彦

漱石と寅彦との肖像が文化切手になつてゐる。漱石は私の最も敬愛する先生であり、寅彦は私の最も敬愛する友人である。二人の關係を中心にして、二人のことを少し書いてみようと思ふ。

漱石が五高の教師になつて松山から熊本へ赴任したのは明治二十九年（一八九六）四月のことだつた。寅彦が五高に入學したのは、その年の九月である。寅彦はのちに物理に變つたが、當時は工科志望だつた。そのせるもあつて漱石と寅彦との關係は、初めのうちは、教場で英語を教へ教はるといふだけの關係にすぎなかつた。二人が個人的に接觸するやうになつたのは、寅彦が二年の學年試験が終つた時のことで、友人のために漱石のところへ點數をもらひに行つた時から始まるといふのだから、明治三十一年（二八九八）の七月ごろのことである。この年漱石は三十一歳、寅彦は二十歳だつた。

この時分漱石は『ホトトギス』派の俳人として有名だつた。五高の學生は漱石を中心として句會をつくつたりなどしてゐた。それに刺激されたものかどうかはわからないが、寅彦は漱石のう

ちへ初めて行つた序に、俳句とはどういふものかと質問した。漱石は「俳句はレトリックの煎じ詰めたものである」。「扇のかなめのやうな集注點を指摘し描寫して、それから放散する聯想の世界を暗示するものである」と答へ、最後に「いくらやつても俳句の出来ない性質の人があるし、始めからうまい人もある」と附け加へた。これで寅彦は急に俳句が作りたくなつたのださうである。さうして寅彦は「始めからうまい人」の部類に屬する人だつた。寅彦の俳句は漱石から書き抜かれて子規の許に送られ、子規はそれを當時の『日本』俳壇に採録した。

寅彦は英語も大變よくできたのださうである。寅彦は當時ある友人に、さすがの夏目先生でも、僕の質問にはすぐ答へられないのがあると言つたといふが、漱石は一體できる學生は非常に可愛がり、できない學生には随分冷淡なところがあつた。

五高で寅彦と同級だつた内丸最一郎によると、英語の試験の答案を出す場合、内丸が答案を持つて行くと、漱石はフンと云つたやうな態度で至極愛想が悪い、ところが寅彦が答案を持つて行くと、ニコニコとして手づからその答案を受け取る。あんな不愉快なことはなかつたといふ。

寅彦の漱石への傾倒も大變なものだつた。寅彦が五高を卒業したのは明治三十二年（一八九九）七月のことだから、これは寅彦が漱石を訪ねた明治三十一年七月からその明治三十二年七月までの一年間のことに相違ないが、寅彦は漱石のところへ書生に置いてくれと頼みに行つたことがあ

つた。當時漱石は内坪井のうちに住んでゐた。内坪井のうちといふのは、狩野亨吉の借りてゐたうちで、狩野が轉居したあとを漱石が借りたうちである。

漱石は若い者の世話をすることが好きで、五高の學生を自分のうちに書生に置いて、學校に通はせてゐたのが、二人も三人もあつた。もとの神宮皇學館の教授をしてゐた湯淺廉孫などもその一人である。『猫』の中に出て来る多々羅三平のモデルに擬せられてゐた股野義郎もその一人である。書生のみならず、漱石は自分の同僚をさへ自分のうちに、一人ならず同居させて世話をしてゐたことがある。さういふことを見知り聞知りしてゐたせみかどうかはわからないが、ともかく寅彦は漱石のところへ書生に置いてくれと頼みに行つたのである。

これは、この物置より外に君を置いてやる所はないと言つて漱石から斷られて斷念しなければならなかつたが、しかし寅彦のうちは裕福なうちだから學資に困るといふ理由からではないことは勿論、身を落して人に物を頼むことの嫌ひな、また内氣で何等かの意味で人に迷惑のかかるやうなことを極度に慎んでゐた寅彦にとつて、よほどの思ひで言ひ出したことだつたに違ひない。

漱石は明治三十三年（一九〇〇）九月に官命によつてロンドンに留學、明治三十六年（一九〇三）一月末に歸國し、熊本へは行かず、東京に止まつて、大學と一高とに教鞭をとることになつた。寅彦は病氣で一年休學した爲に、この年の七月に大學を卒業、直ちに大學院に入學して、實驗物

理學を専攻することになった。漱石が一方では『猫』を書き、一方では『倫敦塔』などを書き出したのは、明治三十八年（一九〇五）一月からのことである。ロンドンから歸つて一二年の漱石はまだそれほど世間的に有名ではなく、従つて門下生も後年ほど多く群がり集まつて來ることもなく、訪ねて來る者と言つては、高濱虚子・阪本四方太などの『ホトトギス』の同人か、英語や俳句を教はつたことのある五高の卒業生位のものでつた。

この時分寅彦が頻繁に漱石を訪ねたことは言ふまでもない。寅彦の日記を見るとそのことが詳しく記されてゐる。寅彦が最も多く漱石によつて慰められ、漱石がまた寅彦によつて最も多く慰められたのは、あるひはこの時分だつたと言つていいかも知れない。——僕から言ふと先生が小説などを書き出して有名になるよりも、なんにも書かずにあつてくれた方が、どんなに先生らしくてよかつたか知れないと、いつか寅彦が私に述べたことがあつた。それほど寅彦は漱石を愛してゐたのである。愛する結果漱石を天下のいろんな人たちと分けて所有するに堪へないで、自分で獨占したかつたのである。眞に人を愛した経験のある人なら、寅彦のこの心持は十分了解することができると思ふ。

しかし漱石が小説を書き出したことは、實は寅彦の生活にとつて非常に意義のあることだつた。といふのは、寅彦が熊本で漱石から俳句をつくることを教へられたやうに、寅彦は東京で漱石か

ら小説をつくること、ものを書くことを教へられたからである。寅彦は漱石の刺激で『團栗』だの『龍舌蘭』だの、その他いろんな作品を發表した。その『團栗』だの『龍舌蘭』だのは漱石の激賞を得ると共に、鈴木三重吉、野上彌生子その他の『ホトトギス』派の作家を刺激して、ものを書かせ出した。

寅彦には實驗物理學者としての本職があり、その本職としての仕事が世界的に認められるやうになればなるほど、寅彦は小説の方面に餘力を割くことができなくなり、次第にこの方面から遠ざからなければならなくなつた。しかしこの経験はいつまでも寅彦の腦裏に残り、のちに寅彦が漱石と同じ胃潰瘍に罹り、永い間大學を休んで休養しなければならなくなつた時に、新しく活動を始めて、寅彦に、寅彦が晩年までそれを唯一の慰安とした隨筆を書かせるやうになるのである。もし漱石の刺激がなかつたら、のちの寅彦の隨筆が生れ得たかどうかはわからない。

初期の小説を見てもわかるやうに、寅彦は小説をこしらへることを好まなかつた。寅彦が實驗物理學者としてどこまでも事實を尊重したと同じやうに、寅彦は作家としても事實を重んじ、かゝりて藝術の衣をきせる必要がある場合でも、無闇に人間をこしらへたりすることがなく、むしろ自分が實際に體驗しないことは、決して書くまいと心がけた。勿論漱石の作品の場合でも、漱石は自分の體驗しなかつたことは決して書いてゐない。ただ漱石は自分の想像力を働かして、自



分でない、いろんな人間になつて見ることに興味を持ち、ああいふ人間のああいふ心持が書いて見たいとか、かういふ人間のかういふ心持が書いて見たいとか——ともかく自分の體驗をいくつかに分けて、一つの體驗を一人の人間に、他の體驗を他の人間に體驗させて小説を書いてゆくといふ風な書き方をしてゐる。これが一般の作家の書き方である。しかし寅彦はほとんどさういふ書き方をしなかつた。事實をそのまま書いた。従つて寅彦の小説は寅彦の隨筆とそのまま繋がると言つていいので、もしその間に相違があるとすれば、隨筆の方がより多く批評的であり、もしくはより多く科學的であるといふ點である。

明治四十年（一九〇七）の夏のことだつたと思ふが、漱石の『文學論』が出版された。しかるに校正者の不馴れと印刷者の不都合との爲に、それには誤植が目ざましく多く、否定が肯定になつてゐたり、肯定が否定になつてゐたり、意味がまるで通じないところさへ到る所にあつた。それで私が正誤表を作ることを引き受けたが、作つて見ると、それは六號活字で三段か四段かに組んで十八頁に餘る、夥しい分量になつた。漱石はそれを見て烈火の如く憤慨し、おれに金があつたら『文學論』をすつかり買ひ上げて、庭に積んで焼いてしまひたいんだがなあとさへ言つた。私達はその氣持に同情してなんにも言へなかつた。そこへ丁度寅彦が來てことの<sup>いちぢ</sup>一仕始終を聞いた。聞き終ると、寅彦は、文學の方はどうなつてゐるのか知らないが、しかし科學の方では、論文な

どにつける正誤表が精密であればあるほど、その著者が良心的であるといふ點で反つて評判がいい、十八頁の正誤表はむしろ誇つていいぢやありませんかと、漱石に向かつて言つた。それで漱石の機嫌がなほつた。聽いてゐて私は、寅彦が思ひも寄らない角度から物を見る態度にびつくりした。

寅彦にも漱石の憤慨する氣持は、十分に了解できてゐたのである。しかし誤植の多い本は既に行きあがつてしまつてゐる。今更どうすることもできない。もしどうかする餘地があるとすれば、それは精密な正誤表をつけることである。その正誤表はすでにでき上がつて、一一『文學論』に添へて配ることになつてゐる。現在必要なことは、憤慨することよりも、正誤表を廣く頒布することである。——寅彦には漱石と同じく、炎のやうな情熱があつたが、しかしそれとともに寅彦は、ひらりと身をかはしてその中から跳り出し、高いところからその情熱を押へて無闇に荒れ狂はせない、特殊な能力を持つてゐた。勿論漱石にもその能力はあつた。またさうする努力を一生の間続け通したが、しかしその點では漱石はいくらか寅彦に劣る——寅彦のやうには素早く氣持を轉換することのできないところがあつた。これは寅彦の専門が科學であり、科學が寅彦の身についてゐたせるかも知れない。またその點で漱石は寅彦を尊敬してゐたやうである。

## 寅彦と死相

寅彦は昭和十年十二月三十一日午後零時二十八分に死んだ。

當時私は仙臺に住んでゐたので、岩波から電報をもらつて前日の夕方東京に著いたが、その日は會はず、その翌日、死の當日の朝になつて會つた。寅彦はもう口が利けなかつた。胸の上に置いた左手に軽く觸つて、小宮です、わかりますかと、顔をそばに寄せたが、寅彦はなんにも言はなかつた。しかしどつか遠い所を見てゐるやうな眼に、ふうつと涙が浮び上がつて來る氣がした。これはあるひは私の錯覺だつたのかも知れない。しかし私は、私の十歳の時に死んだ、父の臨終の表情にも同じものがあつたやうに記憶してゐる。その時私は慟哭したが、今度は慟哭はしなかつた。

その前私は、十一月八日に寅彦に會つた。無論寅彦は病床に横たはつてゐたが、病室にはひつて寅彦の眼と私の眼とが合つた瞬間、私はぎよつとした。これは取り返しつかないことになつたと感じた。——寅彦は、病苦の爲に憔悴しきつて、皮膚はたるみ、光澤は失せ、色は土氣色に

蒼ざめ、髯はもちやもちやに伸び、眼光は鈍り、不斷の寅彦の、人を高める表情は、どこにも現はれてはゐなかつた。しかし私をぎよつとさせたものは、それだけのことから來たのではないらしかつた。どこがどうだとはつきり指摘することはできないが、しかしさういふのはまつたく別なもの、丁度末期の水を捧げた時の漱石先生の顔に現はれてゐたもの、透明ではあるが不斷の相好をまるで變へてしまふ面おもてのやうなものが、すぼりと寅彦の顔の上にかぶさつてゐるのである。私はこれが昔の人の言ふ死相といふものではないかと考へた。

しかし話をしてゐるうちに、寅彦の表情は、次第に不斷の表情に復つて來た。少くとも私がとつさに感じた死相はいつのまにか消えて、いつもの通りの寅彦の顔が、いつもの通りに話をしてゐることを感じ出した、のみならず寅彦の話によると、寅彦はゆうべよく眠れなかつたといふことである。私は次第に落ついて來て、實は、ここにはひつて來てあなたの顔を見た時には、あんまり憔悴してゐるのでぎよつとしたが、しかしかうして話をしてゐると、それが下らない幻覺に過ぎなかつたことがわかつて安心したといふやうなことまで、寅彦に打ち明けた。しかし死相といふ言葉は、さすがに使へなかつた。寅彦は黙然と聞いてゐた。

あとで考へて見ると、私が最初にぎよつとした方が、どうも正しかつたやうである。これはまさしく死相だつたのに違ひないのである。

實は前に私は、芥川龍之介にそれを感じたことがあつた。その時私は別に神経を使ふことはなく、むしろ芥川をからかふやうな氣持で、君の顔には死相が出てゐる、氣をつけないといけないと言つた。すると芥川は實に厭な顔をした。芥川には何かさういふ豫感のやうなものがあつたのかも知れない。私は餘計なことを言はなかりやよかつたと後悔した。

その後、これは寅彦が死んでから九年くらゐ後のことになるが太田正雄が死ぬ前年の夏、仙臺に遊びに来たことがある。當時は戦争のせいで、みんな碌な物が喰へず、誰でも憔悴しきつてゐた。私は太田が憔悴してゐたのには別に驚きもしなかつたが、しかし太田の顔には憔悴以上のものが漂つてゐた。私は三たびぎよつとした。しかし芥川の経験もあり、第一憔悴しきつてゐる者に、死相が出てゐるなどといふやうな、残酷なことは言ふべきではないと囁くものもあつたので、私は黙つてゐた。しかしこれも一緒に晝をかいり酒を飲んだり飯を喰つたりしてゐるうちに、忘れるともなく忘れて、いつものやうに平氣で別れてしまつた。

寅彦に對しても、私は平氣になつてゐた。私はその後なほ二三日は東京に滞在してゐたが、寅彦の病氣のことは大して氣にもとめず、電話で容態を聞いて見る程度で、仙臺に歸つてしまつた。寅彦は淋しかつたのではないかと思ふ。

寅彦は醫者を輕蔑してゐた。醫者一般を輕蔑してゐたわけでもあるまいが、しかし醫者は病氣

のことは何一つ知らない。こんなに人が苦しんでゐるのに、その病根がどこにあるかを發見することもできない。醫者は體のいい病氣の番人に過ぎないと、寅彦は言つた。押し詰めてゆけば、結局はさういふことになるのかも知れない。しかし醫者にも藪醫者もあれば名醫もある。さう一概に言ふわけにも行かないだらう。のみならず病氣にも恐らく個性があるに違ひない。いくら名醫でもその病氣の個性に馴れるまでは、それを適切に處理することは困難であるに違ひない。寺田寅彦のやうなオリヂナルな人間の病氣は、あるひは非常にオリヂナルで、普通の醫者には手のつけやうがないものででもありうる。もつと好い醫者に度々診てもらつて、病氣のオリヂナルな點を捉まへてもらはなくてはいけないと、私は言つた。なるほどさうかも知れない、醫者はすべて一般的なことしか知らないんだからだと、寅彦は答へた。しかしそれでは、誰に診てもらはうかなどとは別に言はなかつた。あとで島蘭博士の診察を受けてわかつたことであるが、寅彦の病氣は轉移性骨腫瘍とかいふ、珍らしい恐ろしい病氣で、それとわかつた時には、もう手のつけやうがない位に、病勢が進んでゐたのださうである。

あなたのやうな用心深い人が、どうしてこんなになるまで無理をして來たのですと、私が言つたら、寅彦は、こんなになるとは知らなかつた。知らなかつたんだから仕方がないと、吐き出すやうに返事をした。専門の學問のみならず、生活の上でも、あらゆる可能の場合を考へた上で一

切を處理することに馴れ、且つそれを考へることが得意でもあれば好きでもあつた寅彦が、この病氣に限つて、あらゆる可能の場合を考へることを怠つてゐたのである。これは無論、寅彦に醫學上の知識がなかつたせゐるのだつたのに違ひないが、しかし一面から言へば、さうなるのが寅彦の運命だつたのだらう。私もまた病氣の個性だの獨創性だのと口にはしたものの、寅彦の病氣がそんな腫瘍のために骨が崩れていくといふやうな、恐ろしい病氣だらうなどは、夢にも想はず、ただ言ふだけのことは言ふが、それが實行されなければ致し方がないくらゐのことで、深刻な問題にはしなかつたのである。

神祕主義の信奉者から言へば、私が寅彦の顔に死相を觀たといふ事實は、超自然の力が私に寅彦の死を警告したといふことに外ならなかつたのかも知れない。しかしさういふものの信奉者でない私は、それを別に重大なことと考へることができず、のほほんと仙臺に歸つて行つたのだつた。

さういへば、かういふこともあつた。

寅彦の死んだ年の一月十七日に、仙臺から出て來てゐた私は、寅彦と一緒に數寄屋橋のニュー・グラントで一緒に晝飯を喰つたあと、外に出て、前の電車を吳服橋の方へあるいて行つた。

數寄屋橋の交叉點を過ぎて間もなく、丁度銀座教會の前あたりで、今まで黙々とあるいてゐた

寅彦が、あるきながら不意に「僕は自分の専門の方で、これぞと言つて自慢になるやうな事を何一つしてはゐないが」と言ひ出した。私もあるきながら、次の言葉待つた。「しかしたつた一つ安んじて言へることは、僕がかうだと見當をつけたことは、これまで決してはづれたことがなかつたといふことだ。——君、僕が死んだら、このことを書いてくれ玉へ」

私はぎよつとして、思はず立ちどまり、寅彦の顔を覗き込んだ。寅彦の顔には、いつもの寒さうな表情の外には、別に變つた表情も浮かんではゐなかつた。寅彦は、眞つ直に向いて、さつさと、いつものやうに、せつかちにあるいてゐる。

當時寅彦が、自分で死ぬよりもつらい事件に出會つてゐたことを、私は知つてゐた。現に寅彦はニュー・グラントの二階で、その一仕始終を私に話して聞かせ、それに附け加へて「こんな思ひをするほどなら、自分が死んだ方がよつぽどいい」とまでも言つたのである。それだから私は、寅彦の顔に特別な表情の浮かんではないことを見届けた上で、寅彦のこの言葉を遺言としては受けとらずに、現在の自分の苦しい心持に風を入れる爲の、俳諧として受けとつた。私は飄輕に、粗野に、「ええええ、書きますとも」と答へた。寅彦は、それをどう取つたかはわからないが、それきりその問題には觸れなかつた。私たちは吳服橋の手前で別れた。

あとになつて考へてみると、これも私が最初にぎよつとした方が、どうも正しかつたやうなの

である。寅彦は恐らく、ほんとに私に遺言するつもりで、あれだけのことを言つたのだらう。寅彦は當時きつと頭のどこかの隅で、今にも自分が死にさうな豫感を、相當はつきり持つてゐたものに違ひない。少くとも私に遺言しなければならぬほど、本氣に、自分の氣の弱りを自覺してゐたのだらう。「こんな思ひをするほどなら、自分が死んだ方がよつぽどいい」などといふ弱い音は、不斷の寅彦なら、決して吐くはずがないのである。

しかし私はそれに氣がつかなかつた。それどころか寅彦の感傷を茶化す氣で、剽輕に、粗野に、その遺言を書くことを安請合してしまつた。寅彦は私の返事を受けとつて、あるひは遣る瀬のない寂しさに襲はれたのではなかつたのかとも思ふ。

さうはいふものの、寅彦自身でも、あるひはさうはつきりと自覺的に自分の死を豫感してゐたのではなかつたのかも知れない。十一月八日に會つた時にも、寅彦は私に「この病氣は長くかかるが、しかし必ず癒る」と繰り返して言つた。——もつともこれも、寅彦に自覺的・意識的には「癒る」とよりは考へやうはなかつたのかも知れないが、しかしさういふものを突き抜けた奥の方では、何か死の影のやうなものに絶えず脅やかされるのがやりきれないので、他人にも自分にも言ひ聞かせて納得させる氣で、「この病氣は長くかかるが、しかし必ず癒る」を繰り返してゐたものだ、解釋することも可能である。もしさうだとすれば、寅彦もまた私と同じやうに、感じ

てはゐるが、知らなかつたのである。

寅彦のことを考へると、よくこの問題が私の頭の中を去來する。さうしてかういふ場合、私はどうすれば一番よかつたかについて迷ふ。自覺されない、意識されない、我我の意識の闕の向う側で動いてゐるものは、恐らく夢のやうに無數である。その中からどれを正夢として採り上げればいいかは、恐らく普通の人間の思量を絶してゐる。ぎよつとしたことが、必ずしも正しかつたとは言へないに違ひないからである。しかし私の場合では、私のぎよつとしたことは、大抵ぎよつとするに値ひすることだつた。しかも私の思量は、これが重大なことであるとして、他のものを排除して、その一つのものを斷乎として採り上げることができなかつたのである。

## 寅彦と俳諧

寅日子が俳諧を始めたのはいつのことだったか、精確なことは分からない。「寅彦全集」をあけて見ると、大正十一年（一九二二）一月三十一日の日記に、「客去つて唯眺め居る炭火かな」といふ私の句に、寅日子が「麻布へ抜ける木枯の音」とつけたのがある。あるひはこれが一番早い時期のものかも知れないと思ふ。なんでもこれは寅日子が青山の私のうちへ訪ねて来たあと、私から寅日子に書いてやつた句で、私の青山南町のうちは谿<sup>たに</sup>一つ隔てて向うに麻布の三聯隊が見える位置にあつた。それだから寅日子は更に第三に自分で「氣になるは軍曹殿の鼻の疣」といふ句をつけてゐるのである。

それより前私は、阿部次郎、安倍能成、勝峯晉風、和辻哲郎などと一緒に太田水穂が主宰する『潮音』の芭蕉研究会に出席し、俳句だけでは芭蕉は分からない、どうしても俳諧を研究する必要があるといふので、時時向島まで出かけて行つて、幸田露伴先生に俳諧實作の手ほどきをしてもらひつつあつた。寅日子のこの附句から考へると、それは大正十年ごろのことではなかつたか

と思ふ。俳諧の實作の面白味を私がしきりに寅日子に述べ立てたので、寅日子が刺激され、それが先づかういふ形になつて現はれたものではないかと思ふ。

しかし私は大正十二年の初めにドイツに向けて出發することになつた。私は沼波瓊音の『芭蕉全集』を行李の底に入れて出發したが、しかし西洋と日本との間で附句を送り合ふ氣持にもなれず、またそれほどの餘裕もなかつたと見えて、パリで「ラジオで踊る三階の春」といふ短句を、オランダでは「風車つづきて雲に入る國」といふ短句をつくつたりしたが、それをあるひは寅日子のところへ書いて送つたかも知れない。しかしそのさきをつけてよこしてくれとは、どうも言つてやらなかつたやうである。それに長句を附け、また短句を附けて『新三つ物』と題したものが、大正十四年の九月の『澁柿』に載つてゐるが、これは私が日本に歸つて来てからのことで、寅日子が段段熱心に俳諧に牽かれるやうになつたのは、多分私が外遊から歸つたのちのことだつたのだらう。私は大正十三年の十月半ばに日本に歸り、翌大正十四年の四月初めには仙臺に越して行つたが、東京へはよく出て来て、出て来る度に寅日子には會つた。さうして時時俳諧をやつた。大正十五年の一月、二月、四月と跨つて『潮音』に寅日子と私との兩吟の『ロンド』が八つ『ディブテュホン』が一つ、『トルソ』といふ名前で一括されて出てゐるのも、多分私の上京を記念するものだつたと思ふ。もつとも附句はなかなか思ふやうには抄らないので、私が仙臺に歸つ

てからでも、手紙で附句のやりとりをした上で、纏めなければならぬ場合も屢あつた。『トルソ』といふ題は、それに費す時間の關係上、歌仙形式の三十六句で纏めるのが困難だつたので、三句で纏めたり、六句で纏めたり、十句で纏めたり、その時時の氣分次第でいろいろになつたが、結局それは歌仙の斷片にすぎないといふ意味を、洒落れて『トルソ』と名づけたままである。『ロンド』といふのは、發句から始めて脇・第三と十句目まで續けて行くうちに、いくらかつつ加減して、その十句目が前句に附くとともに、またうまく第一の發句に附くやうに工夫して附ける、従つて全體が環をなしてぐるぐる廻るやうにと心がけたので、『ロンド』と名づけたのである。例へば「夕立にあはれなりける圓太郎」といふ發句に「人待つ宵の濠端の闇」といふ脇をつけ、それに第三・第四と續けて附けて行つて、十句目に「はねしキネマの人を吐き出す」といふ句が来る。これは「あてもなく宿き廻る小さき町」といふ前句につけた句であるとともに、それが發句の「夕立にあはれなりける圓太郎」にもつくやうになつてゐるといふ類である。『ディブテュホン』だの『二枚屏風』もしくは『二枚折』だのといふのも、六句と六句とが對になるやうな仕立方をしたといふことを意味するものに過ぎない。

大正十五年七月の『澁柿』に載つた『二枚折』、九月の『二つ折』、十二月の『二枚屏風』を見ると、これらはすべて寅日子、東洋城の兩吟で、私は參加してゐない。これはあるひはこの時分

から寅日子の俳諧熱が更に昂じて、私の上京まで待つてゐられず、自分の氣の向いた時に、東洋城を相手にどんどん創作を進めていきたくなつた結果なのではないかと思ふ。歌仙形式の方面でも、大正十五年には兩吟の形で、随分たくさんものが發表されてゐる。

句の作りかた、自然なり人事なりの把握のしかた、把握したものを表現する表現のしかた、もしくは前句の受けとりかた、受けとつたものに應じる附け合ひ、さういふ點では寅日子はどつちかと言へば、私と肌が合ひ、東洋城とは合はないところがあつた。東洋城には東洋城の主張があり、趣味があり、癖があつて、それがとかく附句の上に強く現はれる。そのため三人でやる場合には、東洋城の附句に對して文句を言ふ場合が多く、文句を言はないまでも、これは困つたなど當惑して、附けあぐねる場合が多かつた。それだけ私は寅日子と兩吟をやりたがる傾向があつたし、恐らく寅日子にもさういふ傾向があつたことと思ふ。それでも寅日子は俳諧に熱中し出すと、そんな贅澤は言つてゐず、東洋城相手に兩吟で、しきりに俳諧に耽り始めるのである。

もつとも寅日子と私とは、どつちかと言へば肌が合つてゐるだけに、二人で俳諧をやつてゐると、同じ肌合の句、同じ調子の句が続いて、全體の感じが單調になりがちだつた。そこへ東洋城が入り込んで來ると、いはば不協和音が飛び込んで來ることになるので、それだけ句面に變化が生れ、寅日子と私とだけでやつてゐるよりも、はるかに面白い卷面まきづらにもなりうるのである。

寅日子は初めはいろんな不平を言つてゐたが、その點で段段に悟りをひらき、好んで東洋城を相手に兩吟を試みるやうになつたのみならず、かりに東洋城がどんなに自分の氣に入らない句を作らうと、決して不平を言つたり、不愉快がつたり、辟易したりしないで、反つて自分の句の力で相手の句を包み込み、相手の句に新しい魂を入れ、即ち自分の句を活かしつつ、同時に相手の句を活かさうといふ、丁度芭蕉が俳諧で考へてゐたらうと思はれるやうな立場に立つて、俳諧に携はらうとするのである。寅日子の附句は初めからうまかつたが、さういふ意味で寅日子の附句は目ざましく進歩して行つた。

元來寅彦といふ人は、自分の興味を持つものに對しては、一所懸命それについて勉強するともに、いち早くその核心をつかんでしまはなければ落ついてゐられないやうなところのあつた人だつた。寅日子が俳諧に興味を持ち出してからは、自分で句作するとともに、芭蕉が一座した歌仙を研究し、創作と讀書と雙方によつて動かされる自分自身の内部を精到に検討して、そこから結論を作り上げつつ、次から次へと俳諧の核心へ迫つて行く用意を怠らなかつた。感じと感じとで不即不離に繋がつて一歩一歩前進する蕉門の附合の味を、寅日子ほど微妙に捉へた上で、それがどんなに廣い適用範圍を持ちうるものであるかを、明快に闡明した者は、恐らく外にゐない。寅日子の『連句雜俎』は、俳諧の研究者にとつて必ず逸してはならない、第一流の研究である。

これは俳諧の學者のみならず、また俳諧の實作者のみならず、あらゆる藝術に携はる者の、是非一度は眼を通さなければならぬ、重要な研究である。

『連句雜俎』は、昭和六年三月から昭和六年十二月へかけて『澁柿』に連載された。これは前にも言つたやうに、俳諧の核心を把へた研究であるが、しかも一方ではこれは寅日子が、なぜ自分がこの藝術をこれほど愛好し、なぜ自分がこの藝術の制作にこれほど一所懸命になるかを、きはめて明快且つ適切に、告白し説明したものであつた。そこにこの研究の力と美しさとがあるのであるが、同時にこれは寅日子の決然たる「改宗」の宣言であると言つていいものである。これを書いてから寅日子は、更に熱心に俳諧を作り始めた。

私は俳諧を面白いものであるとは思つてゐても、寅日子の精進にはついてゆけないところがあつた。のみならず私が仙臺から東京に出て来る度に、私はうまいもの屋をあさりあるくことに忙がしいので、目をきめて寅日子や東洋城と俳諧をやらうとしても、寅日子のうちでほつと一息つくといふやうな恰好になつてしまふので、句作に一向熱心にならず、いつでも雑談をするか晝寝をするかで、たうとう寅日子から愛想をつかさね、君とはもう一緒に俳諧はやらないと宣告されてしまつた。それはあるひは『連句雜俎』が書かれた、昭和六年前後のことではなかつたかと思ふ。ともかく昭和六年十月の『澁柿』に拙てゐる私の『短夜の旅寐なりしが別れかな』に寅日子



が「蚊帳の釣手に濱の朝風」とつけた歌仙あたりを境にして、寅日子・東洋城・蓬里雨の三吟は跡を断つてゐるし、しかもこの發句は多分昭和二三年ごろの句だったはずだからである。昭和十一年十一月の『澁柿』には私の「ほのく」と明け行く閨の牡丹哉」に寅日子が「溶けて清水と消ゆる齒磨」とつけた未完の歌仙が載つてゐるが、これも恐らく昭和四五年のころ私の作つた句であり、且つ附句の下に記した（多分寅日子の）日附によると、十句目の私の「櫟林に狭くなる道」の下には昭和六年四月十三日とあり、それから八句目の東洋城の「藪からどこへ通ふ足長」の下には、昭和七年四月十三日とある。私の「櫟林」の句から東洋城の「藪からどこへ」まで丁度一年かかつてゐるのである。これは外に何か理由があつたからには違ひないが、たとひ理由があつたにもせよ、八句つくるのに一年もかかるとすれば、寅日子でなくてもいいかげんしびれをきらしてしまふはずである。

このことを考へると、私は未だに寅日子に悪いといふ氣がしてならない。それにしても寅日子の俳諧は、寅日子が『連句雑俎』に書いたことを實際に適用していつただけあつて、晩年ますます冴えたものになつたことは争はれない。芭蕉が凡兆や去來のやうな弟子を持つてゐたやうに、寅日子にもしもつとたくさんの弟子なり友人なりがあつて、それぞれ自分の持つてゐるものを十分に發揮しつつ、寅日子の指揮棒の下に管絃樂團を纏め上げるとしたら、きつと新しい見事な交

(二五・一〇・二三)

響樂がいくつもできあがつてゐたに違ひないのである。寅日子には、われ笛吹けども汝等踊らずの嘆があつたに違ひない。

## 寅彦と羽子板

寺田寅彦が死んだのは昭和十年十二月三十一日のことだった。決定版『漱石全集』の出だした年である。その十月四日に寅彦は、當時仙臺にゐた私のところへ、「今度の全集の書簡集には小生トットキの手紙を提供する、則天去私の教によるものなり、ミンナ則天去私を心掛けたし」と言つてよこした。

あとで届いたものを見ると、それは明治四十三年（一九一〇）一月十九日附けで、當時ベルリンに留學してゐた寅彦宛に書かれたもので、中には森田と私とが方方へ招待状を出して、漱石山房で新年會を催したことが出て居り、松根東洋城が一中節を歌つたり、森田の當時の妻君藤間勘次が踊を踊つたり、安倍能成が後架へはひつてさんざ反吐をはいたあとへ、お嬢さんが行つて臭い臭いと言つて飛び出して來たりすることまでも書いてあつて、なかなか面白いものだった。どうしてこれを「トットキ」なんぞにして置いたのだらうと不審に思つてゐると、最後に「又赤坂の三河屋を思ひ出した。あの藝者はどうなつたらう。我が變化する如く彼女も變るだらう」

といふ一節が出て來た。あ、これだつたのだなと氣がつくとともに、私はまづ微笑し、改めて嚴肅な氣持にならざるを得なかつた。

寅彦は自分が嘗てかういふ生活をしたといふことを、自分に對して許すことができないから「トットキ」にして置いたものに相違ないのである。しかし「則天去私」の立場に立てば、そんなことにこだはつてゐることはバカげたことだといふので、寅彦は敢てこれを發表する氣になつたのだらう。

明治三十八年十二月四日高濱盧子宛の漱石先生の手紙には、「僕先達て赤坂へ出張して寒月君と藝者をあげました。藝者がすきになるには餘程修業が入る。能よりもむづかしい」と書いてある。――寺田は別に冗談の言ひつくりをして騒ぐのでもなんでもなく、ラッパ節か何かを歌つてゐるだけなんだよと、先生は嘗て私に言つたことがある。寺田はあれで藝者を連れて羽子板を買いに行つたこともあるんだぜと、これも別の機會に先生から聞いた話である。――寅彦を誰が赤坂へつれて行つたかはわからない。しかし寅彦の赤坂通ひは、初めの奥さんと死に別れて三年、丁度二度目の奥さんと一戸を構へる以前の時分だつたのだから、恐らく淋しくて堪らなかつたせゐだらうと思ふ。

明治三十八年前後の漱石先生のノートの中には「藝者」といふ項目を掲げて、客と藝者との短

い對話を書きとめたらしいものが二箇所あり、別に「花月巻白いリボンのハイカラ頭、乗るは自  
 轉車ひくはヴィオリン、半可の英語でペラペラと、I am glad to see you」といふのと、「疊たゝい  
 てねえ、くどい様だがようきかしゃんせ、愠氣でいふのぢやなければ、一人でさしたる傘なら  
 ば、片袖濡れよう筈がない」といふのと、「鉦や太鼓でねエ迷子の迷子の三太郎と、どんどこん  
 のちやんちきりん、叩いて廻つて逢はれるものならば、わたしなんぞも鉦や太鼓で、どんどこん  
 んのちやんちきりんと呼いて廻つて逢ひたい人がある」といふのと三つの歌が書きとめられて  
 る。これは恐らく寅彦に連れられて行つた、三河屋での採集だつたのに相違ない。しかも「花月  
 巻」と「鉦や太鼓」との二つは、明治三十九年四月に發表された『坊つちやん』の中の、花晨亭  
 におけるうらなり、送別會に藝者が出て來て歌ふ歌になつてゐるのである。

寅彦はさういふことは私には一度も言はなかつた。恐らく誰にも言はなかつたらう。前掲の虚  
 子宛の手紙は、既に初版の『漱石全集』の時分から發表されてゐたが、それさへ寅彦は知らん顔  
 をしてゐた。「トットキ」の手紙が届いた翌月、十一月に私が上京して寅彦を見舞つた時、あれ  
 を「トットキ」にしてゐたことについて、一往寅彦をひやかしてやらうと思つてゐたが、しかし  
 會つて寅彦の顔を見たら、そんな氣持はどつかに吹つ飛んでしまつた。なんとなく私にはその顔  
 に「死相」が現はれてゐる氣がしたからである。

(二九・三・一)

## 「御 髭」

このあひだある人のところへ、寅彦をしのぶ會をするといふので招かれた。松根東洋城、安倍  
 能成、辨慶橋の清水の女將の歌女、私の四人だつた。

その時東洋城が持つて來たものに不思議なものがあつた。奉書を名刺の大きさに疊んで紅白の  
 水引をかけ、表に「御髭」と書き、裏に「昭和三年一月十日元服」と書いてある。東洋城が、こ  
 れを覚えてゐるか、私に言つた。さういはれば覚えてゐるぐらゐではない。その字は私の書  
 いた字である。奉書を疊んで水引をかけたのは、歌女だつた。

當時東洋城は『澁柿』を主宰し、寅彦と私とは、毎號交り番こに巻頭に一頁の隨筆を書いてゐ  
 た。私達は心安だてに東洋城に、東洋城の俳句が頑固すぎるし、弟子達にやかましすぎるのがい  
 けないなどと、機會ある度毎に言ひ言ひした。無論東洋城も負けてはゐなかつた。さういふこと  
 がいろいろあつた末私達は、君がそんな古風な髭なんぞ生やしてゐるからいけない、早く短く刈  
 り込んで新しくなり玉へなどとさへ言つた。東洋城はそれまでカイゼル流のピンとひねり上げた、

貴族風の髭を生やしてゐたのである。

漱石も昔はカイゼル髭をピンとひねり上げてゐた。それは『猫』にも書いてある。しかし漱石は修善寺大患後その髭を短く刈り込んでしまった。どういふ動機で漱石がさういふことをしたのか、私には分からない。しかし漱石の髭の變化は、漱石の人生觀、漱石の藝術觀の變化を象徴するものだつた。髭とともに漱石は更生したと言つていいのである。私はその時それを東洋城に言つた。

それが東洋城を動かしたのかどうか。またそれが一月十日のことだつたのかどうか。さういふ精確なことは覚えてゐない。第一それが昭和三年一月十日だつたといふことも、今度初めて知つたからである。恐らく東洋城が我々の意見を採用するまでには、相當の時日を必要としたことと思ふ。

ともかくその日に東洋城が、ぢや髭を刈りこんでくれと言つたので、當時篤茂登の女將だつた歌女を呼んで鋏を持つて來させ、まづ歌女に鼻の下の髭を刈り込ませ、私がピンとひねり上げた髭の右の先きを、寅彦が左の先きを、ぢよぢよと刈りとつた。——その髭を奉書に包んで水引をかけたのが「御髭」である。「元服」と書いたのは、これもふざけた書き方ではあるが、東洋城の俳句の前途がこれから開けて行くことを祝福する氣持を籠めたものに外ならなかつた。

それはいいが、驚いたのは、寅彦が東洋城の髭を刈りながら、ぶるぶる震へてゐたことだつた。それを見ると同時に私は寅彦から横つ面を張り飛ばされる氣がした。私は無神經に、のみかいい氣になつて、東洋城の髭をぢよぢよと刈り込んでしまつたのである。二十年來だか三十年來だか知らないが、東洋城が丹精して愛撫して來た髭を冗談半分に刈り込んでしまふといふことが、いかに東洋城にとつて重大なことでありうるかといふことなど、想像してみもしなかつた。しかし寅彦にはその東洋城の氣持が手に取るやうに頭にうつるとともに、さういふことを知つてゐながら強引に自分の意志を通すことが、何か赦すべからざる罪を犯してゐるやうに思はれたに違ひないのである。それでなければ寅彦が、あんな嚴肅な表情をして、あんなに全身ぶるぶる震へるはずがない。寅彦は別にその後なんにも言はなかつたが、しかし寅彦は嚴肅な氣持になるとともに、私のことを眞に「悪友」だと感じたかも知れない。

——勿論その招待の席では、私はそんなことは言はなかつた。ただそれが寅彦の一面を代表するものであるとだけ言つた。東洋城も同じことを言つた。能成はだまつてにやにやしてゐた。

## 松根東洋城のこと

「私が東洋城と知り合ひになつたのは、いつのことだつたか、はつきりとは覚えてゐない。ただ私が東洋城と知るやうになつたのは、漱石先生のところの木曜會だつたことは確かである。木曜會は明治三十九年（一九〇六）十月十一日から始められてゐる。知り合つたのがかりにその翌年からだつたとしても、今日まででも四十六年になる。

もつとも東洋城が木曜會でまづ親しくなつたのは、鈴木三重吉ではなかつたかと思ふ。當時三重吉は『千鳥』の作者として木曜會の花形だつたし、當時の三重吉の趣味と東洋城の趣味とは、重要な點で共通するところがあつたからである。現に三重吉の『千鳥』『山彦』その他の短篇を集めた『千代紙』が出版された時には、東洋城がその装幀を引き受けてゐる。勿論これは東洋城自身筆をとつたわけではなく、現在の入江侍従のお父さんの筆になつたものであるが、しかし意匠は東洋城の意匠だつたはずである。殊にその装幀の一部には、三重吉が東洋城に宛てた手紙の一部が用ひられ、それには「豊さままゐる」といふ三重吉の筆蹟が木版刷にして出てゐる。その

『千代紙』が出版されたのは、明治四十年（一九〇七）の四月のことである。

『千代紙』の校正は私が引き受けた。それらのことは、漱石先生の序文に書いてある。先生のこの序文は、書翰體で、それが全部巻紙を使つて木版摺にされて、折り疊んで巻頭に挿み込みにしてあつた。これは恐らく三重吉の發意だつたのだらうが、オリヂナルで面白い序文だつた。私はこれをひどく羨ましく感じ、おれもそのうち小説を書いて、先生からかういふ序文を書いてもらつて出版したいと考へたことを、今だに覚えてゐる。

東洋城は私よりも六つ上、三重吉は私よりも二つ年上だつた。従つて二人とも、私を相手にするよりも、二人だけで話し合つてゐる方が、話が合つたのだらう。よくは覚えてゐないが、恐らく私は三重吉を仲介として、東洋城と知り合ひになつたのに相違ない。紅筆で紅を使つて手紙を書いて、それをやりとりして喜ぶといふやうな趣味は、當時の私にはなかつたが、しかし既に大人だつた二人は、それに似たことをしたり言つたりして、共鳴し合つてゐたやうだつた。しかし二人の濃やかな友情はそんなに長くは續かなかつた。これは東洋城は生れつき貴族だつたし、三重吉は生れつき平民だつたし、お互に理解することのできないものが相手の中に次第に見出されるやうになつて來た結果だつたのだらう。のみならず三重吉は、當時の文壇の空氣に觸れるにつれて、自分の『千代紙』趣味だの「豊さままゐる」趣味だのから早く脱却しなくてはいけないと

感じるやうになつて來たのに反し、東洋城はいつまでもそれを守らうとする傾向があつた爲でもあつた。寺田寅彦が留學したのは明治四十二年（一九〇九）の三月のことだつたが、東洋城が小さな可愛い人形を寅彦に託して、船が地中海を通る時、これを海の中に放り込んでくれと頼んだ。これは自分が失戀した相手の女を、地中海に葬り去るといふ意味のものらしかつた。東洋城つて、なんて馬鹿野郎だらうと、三重吉が私に言つた。恐らくこの時分から既に、三重吉と東洋城とは、離れかけてゐたのだつたと思ふ。

その時分も私はそれほど東洋城と親しくなつてはゐなかつた。それだけに三重吉が東洋城のことを、なんて馬鹿野郎だらうと言へば、私はそれに同意して、東洋城はまつたく馬鹿野郎に違ひないと考へた。しかしそこが一面から言へば、東洋城のいいところだといふ風には、當時私は考へなかつたとしても、何か東洋城には愛すべきところがあると感じてゐたものか、三重吉が東洋城から離れるとともに、私は東洋城に段段親しくなつて行つた。これはあるひは私の漱石先生に對する感情と、東洋城の漱石に對する感情とに、特に共通するものがあつて、直接ではなく、間接に漱石先生を通して二人は結び合はされたものだつたのかも知れない。先生のところを飯を喰つたり、先生のところを泊つたり、先生だの奥さんだのを引つ張り出して飯を喰ひに行つたり、さういふ我儘勝手をして喜んでゐたのは、私と東洋城とが一番ひどかつたと言つていいに違ひないからである。

いからである。

さう言へば、私と東洋城とが共謀して先生を深川亭へ誘ひ出し柳橋の藝者を先生に見せようとしたことがあつた。東洋城は先に深川亭へ行つて用意萬端を整へてゐる。私は先生を迎ひに行つて深川亭へ案内するといふことにして、當日私は本郷森川町の下宿から早稲田南町の先生のところへ出かけて行つた。生憎その日は前日からの雪がぼつかり積もつてゐて、先生のところまで行くのに難儀した。のみならず行つてみると、寒がりやの先生は書齋の瓦斯ストーヴにかじりついて、がたがた慄へでもしてゐるやうに凍んでゐた。さあ行きませうと言つても、先生は億劫がつてなかなか立ち上がりさうにしない。さうしてなんだのかんだのと言ふ。仕方がないから深川亭へ電話をかけて、東洋城に連絡しようとするのだが、しかし雪の爲か何か、電話がどうしても通じない。たうとうやむやのうちに、深川亭へ行くのはおやめになつてしまつた。これは大正元年（一九一〇）十二月二十九日のことである。東洋城はじりじりしながら待惚けを喰つたわけであるが、しかしそのお蔭で東洋城は先生から、實に鄭重な謝罪状を受け取つてゐる。

それはともかく私は、東洋城の俳句にはあまり興味を持つてゐない。勿論東洋城は自信家である。私とその俳句にあまり興味を持つてゐないなんて言つたところで、ちつともびくびくする男ではない。東洋城は漱石先生から俳句の手ほどきをしてもらつてゐながら、のちになると、先生

の句は古い、先生の句は十八世紀だなどと言つて、さんざ先生を惱ました男である。それだけにこつちも悪口の言ひたい放題が言へるわけであるが、例へば昔東洋城が高濱虚子に代つて『國民新聞』の俳句の選者をしてゐた時分の句でも、私はあまり感心しなかつた。當時の東洋城の句には、艶なところ技巧の達者なところはあつたが、しかし厭味なところがあつた。妙に奥歯に物の挟まつたやうな物の言ひ方をするのである。漱石先生が東洋城の句をどう思つてゐたか、精しいことはわからない。しかし先生は専門家を尊重する人だつたから、自分は既に俳句からは遠ざかつてゐる、東洋城はずつと俳句に専心して來てゐる、従つて東洋城の言ふことは正しいのかも知れない、自分には納得のできない非難でも、しかし何しろ専門家の言ふことだから、とつくりと反省してみなければならぬといふ氣で、東洋城の句のよしあしはともかく、東洋城の言ふことは一往傾聴してゐたのだらうと思ふ。それが東洋城の自信を一層強めたのかも知れない。

先生の歿後、寺田寅彦と東洋城と私と、三人でしきりに俳諧を試みたことがあつた。寅彦は次第に俳諧に凝り出し、私達の顔を見るとすぐ歌仙を始めようと言ひ出すほどになつたが、そのうち私は仙臺に去り、仙臺から上京して一座することがしばらく續いたあとでは、寅彦とは逆に俳諧に對する熱が次第に醒めて、たうとう落伍してしまつた。寅彦は死ぬまで東洋城だけを相手に歌仙三昧に耽ることになつてしまつた。東洋城の附句には、變に持つて廻つたところがあり、か

たくなで頭の悪いところがあり、ピントの合はないところがあり、ちつとも感覺的でなく、新古今流に抽象的であり、従つて清新で自由な感じがない。それだけに私達は、東洋城の附句に辟易し、なんだのかだのと、よく東洋城に文句を言つたものである。しかし私が落伍し、寅彦が東洋城だけを相手にするやうになつてからは、寅彦は東洋城になんの文句も言はず、東洋城の附句ができれば、すぐそれをそのまま採り上げて、それにすぐ自分の附句を附けることにしたらしい。寅彦の言ふところによると、東洋城の附句がどんなに氣に入らなくても、自分は自分の附句でその附句を活かし、二句が列ぶと一つの美しい世界が纏まり上がるやうにする、さういふ覺悟で附句をすれば、反つて附句が面白くなつて來るのださうである。芭蕉もあるひはそんな氣持で俳諧を楽しんでゐたのではなかつたかと思ふ。

東洋城はこの點で、寅彦のやうにフレキシブルな頭を——その意味で太つ腹な包容性を持つてゐない。東洋城は一向きな男である。自分の當初に立てた道をまつすぐにあるいて、ちつとも傍目を振らない。それだけに東洋城は狭い。私の從兄で、昔砲兵工廠に勤めてゐた工學士の技師が、俳句の先生を紹介してくれといふので、私は東洋城に頼んで行つてもらふことにしたが、しかししばらくすると從兄は東洋城先生はどうもやかましくて困ると言ひ出した。東洋城は自分のいと信じるところを人に説くのはいいが、その説くところから一寸でも一分でも、ちよつとでもそ

れると、黙つて見てゐることができない。つまり自分があるくどほりに、弟子をあるかせないと気がすまないのである。これは東洋城が「殿様」で、従つて自分はこれを正しいと信じてゐるが、しかしその正しいと信じてゐるところが果して正しいかどうかと、自分で疑つてみたことが、これまで一度もなかつたせゐるではないかと思ふ。東洋城は俳句においては、自分は子規の弟子ではなく、漱石の弟子であると、公言してゐる。また東洋城は、芭蕉を尊敬し、自分は芭蕉の道であるといふのだと、自認してゐる。しかし漱石は無論のこと、芭蕉でも東洋城のやうな「殿様」ではない。さんざ迷ひ、疑ひ、悶へ、悩みしたあとで、やうやく自分の道を築き上げてゐるのである。その點で東洋城はもつともつと苦勞する必要、苦勞人になる必要があつたと思ふ。

さうはいふものの、東洋城は正直で純粹で眞面目である。明治三十九年（一九〇六）十月二十六日に漱石先生が三重吉に與へた手紙の中には、「松根はアレデ可愛らしい男ですよ。さうして貴族種だから上品なところがある。しかしアタマは餘りよくない。さうしてすぐむきになる。そこで四方太と合はない。僕は何とも思はない。あれがハイカラならとくにエラクなつてゐる。伯爵の伯父や叔母や、三井が親類でさうして三十圓の月給でキユキユしてゐるから妙だ。さうしてあの男は鷹揚である。人のうちへ來て坐り込んで飯時が來て飯を食ふに、恰も正當の事であるかの如き顔をして食ふ。『今日も時刻をハヅシテ御馳走ニナル』とか『どうも有難う御座います』とか

言つたことがない。自分のうちで飯をくつた様にしてゐるからいゝ」といふ一節がある。こここの「ハイカラ」といふのは輕薄才子といふか、世渡りが旨いといふか、さういふ意味を含んでゐる言葉である。勿論東洋城はその後式部官になつたり、北白川の御用掛になつたりしたこともあるが、しかし東洋城が「ハイカラ」でなかつた爲に、さうして東洋城一流の正直で純粹で眞面目だつた爲に、今では「三十圓の月給」もとれずに、陋巷で「キユキユ」してゐるのである。今度東洋城が藝術院の會員に選ばれたのは、その點で、友人としてありがたい氣がする。

(二八・一一・一一)



## 青春記

なんでも大正の初ごろだったので、四十年近い昔のことになるだらう。我我は廻り持ちでそれ  
 其の家庭に、毎月のやうに集つて會食した。我我といふのは、森田草平、阿部次郎、安倍能成、  
 柏木純一、私の五人である。

柏木が結婚して麻布一の橋の新居に我我を招待したことがある。あるひはこれがこの會食の發  
 端ではなかつたかと思ふ。鈴木三重吉はどういふのか、この會にはひつてはゐなかつた。三重吉  
 には酔ふととかく草平につつかかる癖があつた。あの二人はなるべく顔を合せない方がいいとい  
 ふやうなことだつたのかも知れない。

三田四國町の私の家で會をする事になつてゐた日に、その三重吉が偶然私を訪ねて來たこと  
 があつた。これは困つたなとは思つたが、しかしせつかくみんなで會食するときまつてゐる日に、  
 三重吉を歸すといふ法はない。私は三重吉を引き止めた。三重吉は喜んで参加すると言つた。し  
 かし段段酔が廻つて來るにつれて、三重吉はやつぱり刺刺トゲトゲしくなり、なんぞといふと森田につつ

かかつた。森田はこれを軽く受け流した。すると三重吉はこんどは私に向かつて、私の家の悪口  
 や庭の悪口を言ひ始めた。

私の借りてゐた家は、元妾宅に建てた家たとかいふことで、狭い家ではあつたが萬事が粹、づく  
 りにできてゐた。庭も狭い庭だつたが、泉水があつたり燈籠があつたりして、待合の面影があつ  
 た。三重吉はそれが氣に入らないといふのである。私は別にそれを好んだわけでもなかつたが、  
 三重吉の言ひ方が氣に入らなかつたので、三重吉の意見に反對した。外の連中も多く私の意見を  
 支持した。

すると三重吉は、三重吉の膳のそばにうろろしてゐた、うちの飼猫の首つ玉をつかむや否や、  
 うるさいと言つて、庭の泉水の中に叩き込んだ。この猫は可愛い仔猫だつたので、私は腹に据  
 ゑかね、三重吉を怒鳴りつけた。それが三重吉には淋しかつたのだらう、三重吉はぼろぼろ泣き  
 出した。私も三重吉にわびを言ひたい氣持になつた。

それからどういふ段取でさうなつたものか覚えてゐないが、森田が急に大聲をあげて泣き出し  
 た。これはあるひは猫で爆發した三重吉の癩癩かたかたが、改めてまた森田に向けられた結果だつたのか  
 も知れない。それともこれは三重吉とは何の關係もなく、もういいかげん酔つ拂つたので、森田  
 が自發的に酔ひ泣きし出したのかも知れない。ともかく今度は森田が泣き出した。

すると安倍が座敷の隅に置いてあつた、箆笥の上に登り上がった。安倍は箆笥の上で我我一座の者を見おろして洋服のままキチンと坐り、山上の垂訓をたれるのだと言つて、「子等よ子等よ」とかなんとか言ひ出した。酔つた安倍は亂に及んだ一座の空氣を取り鎮める目的でさうしたのだらうが、桐の箆笥は安倍の巨軀の下でミシミシ鳴つた。

阿部と柏木と私とはにやにやしてゐた。三重吉も森田もあつけにとられた形で、改めて酒を飲み出した。

——我我的會食は始終こんな形態をとつたわけではない。しかしかりにこんな形態の連続だつたとしても、我我的會食は常に楽しいものだつた。今思ひ出しても、この光景は實になつかしい。

三重吉はこの六月が十七回忌だつた。森田が死んでからでも五年たつてゐる。阿部と柏木とは仙臺に住んでゐるが、阿部は健康を害してゐて、恐らく十年以上東京に出て來ない。柏木は毎月一度は必ず上京するが、銀行の用が忙がしいので、ゆつくり一緒に飯を喰ふこともできない。

昔の仲間のうちで始終顔を合はせてゐられるのは、安倍だけである。

(二七・八・五)

## 寫眞

三重吉は子煩惱だつた。長女のすゞ子が年頃になると、髪を高島田か何かに結はせ、綺麗な著物を著せ、ちやんとお化粧させた上で、料理屋だの待合だのへつれて行つたりした。すゞ子ほどの美しい娘を持つてゐたら、私もあるひはそんな氣になつたのかも知れない。しかし、さうでない私には、子煩惱にもほどがあるといふ氣がしてゐた。

三重吉がなくなつて程経てから、私はすゞ子の口から、三重吉がすゞ子の寫眞を始終机の上に飾つてゐたといふ話を聞いた。——私はうちにゐて、始終眼の前を動いてゐるのに、どうして私の寫眞なんか飾つて置くのか、わけがわからなかつたと、すゞ子が言つた。親馬鹿だからさと、私はそれを軽くかたづけした。しかし肚の中で私は、それまでは少しも想像して見たことのないなかつた、まるで別なことを考へてゐた。それは三重吉がすゞ子を通して、死ぬまですゞ子の母を戀し續けてゐたに違ひないといふことだつた。

事情があつて三重吉は、すゞ子の母と別れた。あとで三重吉の後妻になつたお濱は、眞に獻身

的に三重吉に仕へ、また眞に獻身的にすゞ子姉弟を育て上げた。三重吉はお濱に感謝してゐた。しかしすゞ子が段段大きくなり生みの母親そつくり段段美しくなつて來ると、三重吉は恐らく絶えず別れた妻のことを思ひ出し、自分の非を悔い、相手に謝罪する氣持とともに、相手に懂がれる氣持をどうすることもできなかつたのではないかと思ふ。しかし自分の許を去つた女は、杳として消息を絶つてゐる。現在自分の許にゐる女は、自分にまめやかに仕へ、自分の子供を實子以上に懇ろに育て上げてくれた女である。かりに三重吉がどうかしたい氣になつたとしても、三重吉はただすゞ子に高島田に結はせてつれてあるき、あるひは寫眞をとらせて、それを机の上に飾り、日夜祕かにそれを眺め入るより外、どうしやうもなかつたのではないかと思はれる。さうなるともうすゞ子はすゞ子であつてすゞ子ではなく、すゞ子の寫眞はすゞ子の寫眞であつてすゞ子の寫眞ではなくなつてしまふのである。

すゞ子の母親は、たしか二十歳前後に三重吉のところへ來たはずである。三重吉はその當座高島田だの鬻だのを結はせて、よく連れてあるいてゐた。

## 死 顔

同じ東京に住んでゐながら、私はたうとう茅野の死目にも雅子さんの死目にも會へなかつた。勿論二人の死顔は見た。

茅野の死顔はどういふものか苦しうだつた。これは茅野の特徴をなしてゐた、鳥の眼のやうな眼が閉ぢられた爲に、眼窩が眉の下で急に落ちこみ、頭の方からさして來る光がそこに險しい陰をつくつてゐたせゐもあつたに違ひないが、それよりも茅野の口が半ばあいて、こけた頬が一層こけて見えた上に、あいた口そのものの表情が、何か叫びでもあげてゐるやうに感じられたせゐらしく思はれる。雅子さんの死顔は、それとはまるで感じの違ふものだつた。多分多緒子さんの心づくしなのだらう、雅子さんは洗つたあとの髪の毛のやうに、素直にさつぱりと髪をつかねた上に、うす化粧を施こされ、ほのかに頬紅さへさされ、いかにも平和で美しかつた。それはすべての煩惱から離脱した顔で、思はず合掌したくなるやうな美しさだつた。

私は茅野にも雅子さんにも、絶えて久しく會はなかつた。茅野が腦溢血で倒れたあと、小康を

得たところを見計らつて見舞に行つたが、これは三四年振のことだつたやうに思ふ。

私は茅野を興奮させることを恐れて、玄關先で茅野のその後の様子を聞いた。雅子さんは玄關の障子を小盾にとつて坐つて話をしたが、戦災に遭つて家を失ひ、自分は長いあひだ喘息に苦しんでゐるところへ持つて来て、茅野が急に倒れたりした爲だらう、めつきり年をとり、坐つたからだが急に小さなかたまりになつて、見るのも痛痛しいくらゐだつた。私はなるべく勇氣をつけるやうなことを言つて歸らうとすると、雅子さんは不意に、たつた一目でいいから會つていつてやつて下さいと言ひ出した。私はその言葉にぎよつとしたが、しかしさう言はれてみると、何か會つてゆかないのも悪い氣になつて、ついふらふらと病室にはひつて行つた。

しかし病室にはひつて行つて、私は急にこれはしまつたと思つた。茅野と私と眼を合はせるや否や、茅野の米嚙を傳ふ血管は見る見る怒張し、茅野の兩眼には一面にさつと涙が走り始めたからである。私はとつさに、茅野にはなんにも言はずに、玄關に飛び出してしまつた。茅野はそれを不思議に感じたに違ひないが、私はそれより外どうすることもできなかつた。さうして私は、それきり茅野とは眼を合はせなかつた。

茅野の野邊送の日は、雅子さんは喘息で夜の目も合はないくらゐ苦しんでゐた。横になると咳嗽が出るといふので雅子さんは夜晝蒲團の上に坐つて暮してゐたらしかつた。お目にかかりたい

が話をすると咳嗽が出るから失禮すると、多緒さんが傳へて来てくれたので、私は雅子さんにはお悔みを述べないまま、茅野の柩の前に坐つて、御焼香の客に挨拶したりしてゐた。しばらくすると、母がたつた一目お目にかかりたいといひますから、どうぞこちらへと、あらためて多緒子さんが私を呼びに来た。私は茅野の病臥してゐる時の雅子さんの言葉を思ひ出して、またぎよつとしたが、何喰はぬ顔をして、多緒子さんに案内され、隣の病室へはひつて行つた。

雅子さんは、この前會つた時よりもつと小さくなつたやうに感じられた。それでもひどく打ち拉がれた様子も見えないので、いくらかほつとした氣であると、雅子さんはやはり何か言はうとする。しかし口をきくと必ず咳嗽が出る。その鎮まるのを待つてゐると、また口をきき、また咳嗽が出るので、私はゐたたまれない氣になつて、あとのことは多緒子さん夫婦とも相談してちやんとしてゆきますから、心配しないでいらつしやいと言つたまま、早早もとの部屋へ引つ返した。引つ返して氣がつくと、これはどうも死んで行く人にも言ふやうな言葉である。とんでもないことを言つたものだ、餘計なことを言はなければよかつたと後悔したが、しかしさういふ意味で言つたのでないことは、少くとも雅子さんには通じてゐるはずだと、強ひて私は自分で自分の後悔を賺さうとした。しかし私の氣持は何か落つかなかつた。

そののち三四日で雅子さんはなくなつた。

なくなつてみると、また私は自分の言葉のことを考へて見ないわけにいかかつた。これはあるひは私の中の、私に知られてゐないあるはたらき、が、雅子さんの死を知つてゐて、私を出し抜いて、ああいふことを言はせたものではなかつたかとも思はれる。しかしそれは無論どうだかわからない。しかし例へば雅子さんが既にあの時ひそかに死を覺悟し、ひそかに死を冀つてゐたとすれば、雅子さんが、私のあの言葉を特別の意味に解釋し、それであとに残る者への憂慮をいくらかでもくつろげることができたのではないかと想像することは、十分可能である。私は私のあの不用意な言葉が、かうして雅子さんの大往生にいくらかでも役に立つたのだと考へて、せめてあの言葉はあの時言つて置いてよかつたのだといふことにして置きたい氣がする。

(二一・九・二六)

## 森田草平

多分をととのしたことだつた。森田が信州から出て来て、安倍と私と三人で一緒に飯をくつたことがある。その時森田が、おれはピースが日に三箱ないと足りないと言ふから、よくそんなに手に入るものだ、それぢやうちの人が大變だらうと言ふと、なに、なければ機嫌が悪いんだから、うちのやつはなんとかして来るよといふ返事だつた。それで共産主義もないぢやないかと、私はひやかした。

去年森田が共産黨に入黨した時、私は二三の新聞から、それに關する意見を求められた。森田が共産黨に入黨したといふことは、私には滑稽なこととしか考へられなかつたので、私はその旨を述べて、全部寄稿を斷つた。——それが森田に傳はつたのか、それとも前年の話をおぼえてゐたのか、森田は入黨後しばらくしてある雑誌に、おれが共産黨に入黨したと聞いたら、安倍や小宮は笑ふだらうが、しかし漱石先生はきつと笑はないに違ひない、といふ意味のことを書いた。死人には口がない。その死人の漱石先生を引合に出して、自分にいろんな箔をつけようとする

のは、さもしい簡である。しかし一面から考へると、森田の氣持には何か釋然としないものがあつて、森田は自分で自分に釋然とする爲に、せめて漱石先生でも引合に出さなければならなかつたのかも知れない。もしさうだとすれば、何かあはれでもあつた。

しかし一體に森田には、罪を他人に嫁して、自分はいい子になつてゐようとするところがあつた。その點で森田は女性的でもあつたし、嫉妬深くもあつた。他の美をなすことを好まないところがあつた。といふことは森田は己惚が強かつたといふことを意味する。漱石先生の『それから』は自分の『煤煙』の影響でできたのだと、森田は一時眞面目に考へてゐたのである。

イブセンのペール・ギユントは自分の女房を放り出して置いて、三十年だか四十年だか勝手な放浪生活をしてあるき、くたくたになつて郷里に歸つて來て、それまで一人を守つて自分を待つてゐた女房の腕に抱かれて死ぬが、森田はさういふ夢を一生持ち續けてゐたやうに思ふ。元來すべての男はあるひはさういふ得手勝手な夢を持つものなのかも知れない。しかし大抵な男は、それが得手勝手であることを反省して、それを夢として抱いてゐるだけである。しかし森田は現實にそれを實行しようとした。その點では森田は驚くべき夢想家だつたと言つていい。

私は森田とは近來うとうとしくなつてゐた。しかし新聞で森田の死を知つた時には、さすがにはつと吐胸をつかれた。これは二人の間に四十年の歴史があるせゐだらう。(二四・一二・一七)

### 『實説草平記』

内田百閒君の『實説草平記』では、森田の呼吸が感じられるほど、森田が活き活きと描き出されてゐる。しかもその森田は、いはば愛に包まれてゐるので、全體の感じが暖かである。これは内田君の傑作の一つではないかと思ふ。

内田君は人間として實に純粹なものを持つてゐる。ただ内田君の書くものや言ふことには、一種内田流の街まちひのやうなものがあつて、それがとかくお互の間に立つ傾向があるので、内田君の中の純粹なものがまつすぐに伸びて、こつちの胸に跳り込むことがない場合が、割に多い。ここではそれが影を潛めてゐるといふよりも、むしろそれが内田君の中の純粹なものを擔ひ出す方便になつてゐるので、特に我我は暖いものを感じとるのだらうと思ふ。もつともそれには森田草平といふ人間そのものが、内田君には丁度手頃な人間だつたといふことも、與かつて力があつたのかも知れない。

一體作家が誰かを描かうとする場合、作家がその誰かをぎゆつとつかんでゐるのでない限り、

描かれた者は必ず活躍することがない。しかし相手をぎゅつとつかむ爲には、作家は相手を愛するだけでなく、またある程度相手を見下ろすことができなくてはならない。内田君は漱石を比類のないくらい愛してゐたが、しかし内田君の描いた漱石が漱石としてあまり活躍してゐないのは、内田君が漱石を見下ろし、もしくは漱石から十分離れることができないからである。

その點で森田の場合はいふ違ふ。森田には善良なところと不善良なところと、兩方があつた。しかも森田はその善良を助長する努力や、その不善良を征服する努力を、特に試みようとはせず、むしろそれを得意にしてゐるやうな自然兒で、感情の赴くままに善良になつたり不善良になつたりしてゐた人間である。それだけに森田には、どこにも峻しいところがなく、従つて親しみ易く、また與し易いところがあつた。内田君から言へば森田は、いくらか玩具にしながらなほ且つ腹の底で愛してゐるのに、丁度似合ひな人間だつたのだと思ふ。

不善なところに著眼すると、森田ほど道理の通らない人間はなかつた。しかし善良なところに著眼すると、森田ほど愛すべき人間はなかつた。例へば森田からひどく不愉快な思ひをさせられることがあつたとしても、森田から離れて森田の善良な面だけを思ひ出したりしてゐると、森田の不善な面はいつのまにかリディキュラスなものになり、任舞にはその不愉快をつい笑つてすましてしまふやうなことさへ、屢出て來るのである。法政騒動では内田君は随分森田を憎んでゐ

たやうだつた。しかし今日となつては、それをいつまでも根に持つてゐる様子もなく、反つて森田の立場を辯護し、森田に對して森田の愛すべき思ひ出ばかりを抱いてゐるやうに見えるのは、内田君の森田に對する觀點が、森田の善良性の上に確立されてゐるせゐに違ひない。

私は森田の『煤烟』からは、随分藝術上の影響を受けた。その時期には私はまた、生活の上でも、森田から刺激を受けてゐる。しかし間もなく私は、森田の影響下から離れた。離れてからは森田と私とは、むしろ喧嘩をしいしいつきあつてゐたと言つた方がよかつた。しかし喧嘩はしても私は、森田の中に善良なものがあるといふことだけは、疑はなかつた。ただ森田の善良性をどこまで信じていいかに、私は迷はざるを得なかつた。善良だと思つてゐるといつのまにか善良でなくなつてゐるのである。さうしてそれが幾度も繰返されるのである。森田には一貫するものがないとしか、私には思はれなかつた。しかし内田君のものを讀むと、内田君はその點で迷つてゐるやうには、少しも見えない。それだからこそああいふ暖か味が、内田君の書くものの奥から滲み出て來るのだらう。私はこの機會にもう一度森田の善良性について反省してみようと思ふ。

## 誤傳の経路

森田草平がまだ法政大學に勤めてゐたころ、教員室で、夏目漱石は胃潰瘍で死んだといふことになつてはゐるが、實は肺病で死んだのである。しかしそれを言ふとお嬢さん方の縁談に差し障りがあるから、それで胃潰瘍で死んだといふことにしてあるのだと、一度ならず、たびたび言ひふらしてゐたといふことを、ついこのごろになつて耳にした。しかしこれは間違ひである。漱石がまさに胃潰瘍で死んだのであるといふことは、漱石の死體を解剖した長與又郎博士の報告書によつても明白である。

この解剖には私も立會つた。眞鍋嘉一郎君が主治醫だつたので、眞鍋君が長與博士と相談のうへ開腹して胃の腑を點檢したのであるが、胃壁の方向が腐蝕されて血管が露出してをり、ある個所では、それがほんの薄皮一枚だけになつてゐる部分さへあつた。眞鍋君がそこを指しながら、こんなになつてゐるんだから、今度の出血で亡くならなかつたとしても、先生はたうてい長くは生きてゐられなかつたんだよと、自分でも諦め、ひとにも諦めさせようともするかのやうに、

私に言つた。そのあとで漱石の頭が截り開かれて、脳髓が取り出された。これは特に長與博士の希望で、遺族の諒解を得て、手をつけられたものだつた。漱石の肺が悪くて死んだのだつたら、當然肺臓が點檢されるはずである。しかし解剖のメスは少しもそちらへ及ぶことはなかつた。それだけでも、森田の間違ひは、はつきり證明されてゐる。

もつとも漱石の兄さん二人は、若い時分肺病で死んでゐる。漱石の姪の一人も肺病で死んだ。漱石自身も大學卒業後一年して咯血したことがある。さういふ事實が森田の頭の中にあつて、先生は胃潰瘍で死んだとはいふが、實は肺病で死んだのではないかといふやうな想像が、ある時森田の頭の中に浮んだことがあるのかも知れない。のみならず明治二十七年の漱石の書簡の中には、自分が咯血した旨を友人に報告し、これまでの環境と遺傳と、どつちへ轉んでも外れつこのない自分のことだからといふやうな意味の文句があつて、それが編輯會議で問題になり、萬一お嬢さん方の縁談の妨げになつてはいけないといふので、遺傳だつたか環境だつたか體質だつたか、さういふ文字を伏字にしたことがある。それがまた森田の頭の片隅に残つてゐたかなにかで、お嬢さん方の縁談の差し障りになるといけなから、胃潰瘍で死んだといふことにしたのだと、歪んでいつたものではないかと思ふ。

森田の記憶には、とかくさういふところがあつた。自分の想像したものと、現實に體驗したも



のことが變に接合して、事實が歪んだまま、事實として頭に残るのである。もつともこれは森田一人のことではなく、だれでも知らず識らずのうちに、かういふ事實のトラへ方をする場合が多い。しかし人はさういふ場合、一度反省してみれば、少くともさういふ大きな誤傳を、自分から作り出すやうなことはなくてすむのである。

### うらなひ

吉右衛門は丁度五十日間歌舞伎座の樂屋に寢泊りした上、三月九日の朝、自分の家へ歸つて行くはずである。歌舞伎座の方でもいろいろ迷惑したらうと思ふ。しかし吉右衛門の方でも不便で窮屈で氣を遣ふことも多く、落つた氣持にはなれなかつたに違ひない。

なんでもある占者の説に、吉右衛門が今度建てた家へ先の家からいきなり越して行つたのがいけなかつた、それだから始終病氣になつたりなぞする、これは一度歌舞伎座の樂屋で生活し「方違へ」をした上で、新居に住まふことにすべきたとあつたので、吉右衛門はそれに従つたださうである。我我から考へると少し馬鹿馬鹿しい氣がするが、しかし自分が始終病氣になつたりなぞしてゐるところへさういふことを言はれると、誰でも氣にしないわけにはゆかないだらう。

昔私が仙臺に住んでゐた時分、森田草平から二三週間東京を離れたい、ついてはどうか近所の温泉宿か何かをとつてくれないかと言つて來たので、秋保といふ所の温泉宿を豫約して置いたことがある。それは森田が野上に對抗して、法政大學でこたごたが起つてゐた時のことだつた。森

田がやつて来て事情を訊いてみると、森田の旗色があまり芳しくないのは方角が悪いからで、「方違へ」の爲にこつちへやつて来たといふのである。なあんだ、まるで『源氏物語』の世の中みだいちやないかと、私はからかったが、森田は存外眞面目な表情をしてゐた。

それでも邊鄙な温泉宿にぼつねんと暮してゐるのは退屈だつたとみえて、森田は毎日のやうに仙臺へ出て来ては、私のところへ來たり、阿部次郎のところへ行つたり、昔自分が教へたことのある學生に案内させて方角見物して廻つたりしてゐた。それが幾日續いたかは、はつきりおぼえてゐない。ともかくしばらくたつたある日森田は使をよこして、當分ここを動かないことにしたから、例の學生をよこしてくれ、明日は鳥鍋の御馳走をするから、子供達も一緒によこしてくれと言つて來た。あとで聞けば東京の妻君から、「方違へ」に出かけた者が方角あるくと意味がなくなつてしまふ、うちにじつと蟄居してゐなくてはいけないと、嚴しい小言が來たのださうである。

吉右衛門は別にそんなことは言はれなかつたらしい。ただ夜の十時までとかに樂屋に歸るやうにとだけ言はれてゐたらしい。森田の妻君は自分の解釋を森田に押しつけたのかも知れない。それともこのごろの占者は、時勢に合はせてあまりやかましいことは言はなくなつたのかも知れない。それにしてもこれはどうも「下町趣味」とでもいふべきもののやうである。

ゲーテは小説の中で、子供が空を鷹が渡るところを見て、あれはきつと何かいいことのある前兆なのでせうと言ふと、教師がそれは君のとりのやう次第、やり方次第だと答へるところを書いてゐる。また別なところでは、人生は偶然と必然とででき上がつてゐる、その偶然の向きを換へ指導し利用することを心得てゐるものは理性である、その理性が確立してゐてこそ人間は初めての眞の人間になれるのだといふ意味のことを書いてゐる。

ゲーテは自分の妻君が死んでから間もなく湯治場に出かけようとした。フランクフルトを通り、フランクフルトに近いヴィースバーデンにするか、フランクフルトを通らないで行けるバーデンバーデンにするかが問題になつたが、結局バーデンバーデンときめて出かけることにした。ところがその途中で馬車が轉覆し、つれのマイエルが額を傷つけるといふ事故が勃發した。ゲーテはすぐさまヴィマルへ引き返し、湯治場へ行く計畫をすつかり取り止めにしてしまつたといふ話がある。

フランクフルトにはゲーテの戀人がゐた。バーデンバーデンへの旅はフランクフルトを通る旅ではなかつたとしても、この偶然をゲーテは何か悪いことの起る前兆と解釋し、その旅に上るときへ斷然斷念してしまふのである。これは自分の妻君の死後、人妻である自分の戀人と何等かの意味で會ひうる機會を作るといふことは、決して理性的なことではないと、ゲーテが考へたか

らに相違ない。

日本の占者も、なるほど理性的だと思へるほどの助言を與へることが出来るやうになつたら、人人も眞に救はれるやうになるだらうと思ふ。それよりもつとよいことは、みんながゲーテ流に理性的になることである。

(二九・三・五)

### チョッキのまぼろし

登張正實君とばりまさみがやつて来て、お父さんの竹風老の話などをしてゐるうちに、すっかり忘れてゐた昔のことを思ひ出した。それは森田草平、生田長江、阿部次郎、安倍能成、私などが竹風老たけかぜらを置きとして既に廢刊になつてゐた『帝國文學』を『赤門』といふ名前で再興しようと企畫したといふことである。我我は神田美土代町の青年會館に一、二度集つたやうに思ふ。

發頭人は誰だか忘れてしまつた。あるひは生田長江ではなかつたかと思ふ。生田はさういふことが好きだつた。生田が森田に賛成させ、森田が我我を仲間に引き入れたやうな記憶がある。なにしろそれは、その正月から『煤烟』を『朝日』に掲載し出して、森田はすばらしく有名になり、ある種の人達からは漱石以上とまで持ち上げられてゐた、明治四十二年(一九〇九)のことだつたのだから、森田の鼻息の荒い時だつた。しかしその企畫は竹風老がしりごみをしてしまつたので、結局は實現されずにすんだ。一方その年の十一月二十五日から漱石主宰のもとに、森田と私とが下働きとなつて、朝日文藝欄が發足した。

竹風老の記憶によると、翌年の正月だかに森田が竹風老のところへ最後の返事を聞きに行つたところ、竹風老はたうてい自信が持てず、むしろ教師になつて二高に赴任しようといふ氣になつてゐたので、上置になることをきつぱり斷つてしまつた。すると森田はそれを聞いて、これ以上輕蔑しやうはないと言つていいほど深刻な輕蔑の表情をして、ものも言はずさつさと歸つてしまつたのださうである。さういへば私は、何かさういふ報告を森田から聞いたやうにも記憶する。しかし森田はそれほど竹風老を輕蔑したやうなことは言はなかつたやうに思ふ。さう感じたのはむしろ竹風老の「脛に疵」があつたせゐに違ひない。第一その時森田が竹風老をそれほど輕蔑したとすれば、ずつと後年、森田が法政大學の文學部の實權を握つて野上を追ひ出した時、野上の代りに平田禿木を迎へ、内田百閒の代りに竹風老を迎へることはなかつたはずである。

もつとも當時の森田の天下は、光秀の三日天下で、間もなく實權は再び野上に歸り、森田は竹風老から送り出される身になつたのださうである。——野上・森田の確執の精確なところは、私は仙臺にゐたので、よくはわからない。ただ森田は野上から拾はれて法政の教授になつた男である。その點から言ふと、野上は飼犬から手を噛まれた形で、森田は分がわるい。勿論それにはいろいろ事情もあり、あるひは森田はかつぎ上げられて、心ならずも野上の敵になつてしまつたのかも知れないが、しかし森田には感情が高潮して來ると、とかく道理を通さうとする意志の鈍る

ところがあつたから、敵方に廻はされてゐるうちに、心から野上を憎むやうになつて、さまざまに言動したのかも知れない。

しかし森田は死ぬ前に、野上から借りてゐるチョッキがまだ返さずにある、あれを返さなくてはならないと、夢うつつのうちに幾度も繰り返して死んだのださうである。私はこの話を聞いて、森田の純情に撃たれる氣がした。森田は野上の情誼に對して、自分があんなことをしたのは、眞にすまないことをしたと感じ、死ぬ前に野上にあやまりたい氣がしてゐたに違ひない。それが「野上から借りてゐるチョッキ」のまぼろしとなつて、末期の森田に安き心を與へなかつたものに相違ないのである。——森田はすれつからしであるやうであつて、心には純粹なところがあつた。人のいいくせに、人がわるいことをもつて任じるところもあつた。竹風老が輕蔑の表情と感じたものは、むしろ失望・落膽の表情だつたのではないかと思ふ。

## 野上の死

二十三日の夜七時半ごろだつたと思ふ。岩波書店の長田君が電話で、野上が死んだといふことを知らせてくれた。野上とは五十年に近い知合である。とたんに自分の横腹に穴があいて、寒い風がすうすう通る気がした。

野上と私とが一高に入學したのは同年だつた。一高では今井政吉、青木嗣夫、堀田正昭などと一緒に、何號かの廻覽雑誌をつくつたこともある。大學にはひつて漱石先生のところへ行き出したのも、恐らくほとんど同時である。野上は英文學、私は獨文學、専門は違つてゐたが、しかし私は漱石先生の講義は缺かさず聴きに行つてゐたし、木曜の面會日には毎週のやうに先生のところで顔を合せてゐたのだから、同じ専門の誰彼よりも野上の方が、はるかに馴染が深かつた。

面會日の夜は、早稲田南町の先生のうちの書齋に、一時までも二時までも坐り込んだ。それから森田草平、鈴木三重吉、野上と私との四人づれで、議論をしながらぶらぶらあるいて、江戸川へ出、安藤坂を上り、柳町へ出て、當時森田が下宿してゐた、西片町の崖下の丸山福山町のうち

のそばの、屋臺のおでんやで酒を飲み、一渡り氣焰をあげたあとで、三重吉と野上とは巢鴨へ、私は森川町の下宿へ、森田はすぐそばの、元樋口一葉が住んでゐたといふうちへ、分れ分れに歸つて行くのを常例とした。野上によると、巢鴨まで歸りつくと、たいてい一番鶏が啼くといふことだつた。

おでんやにはいつもお神さんが一人で店番をしてゐた。この神さんは、色の少し蒼白い、しかし太り肉の、酌婦上りらしい女で、客扱ひがうまかつた。三重吉はこの神さんに興味を持つてゐたらしかつたが、ある夜遊人らしい男が屋臺の暗がり立つてゐたとかで、あの女にはうかつに手は出せないぞ氣をつけると、私に注意したことがある。これは恐らく三重吉が私にかこつけて、自分で自分に發した警告なのだらうと思ふ。

先生がなくなつてから、私は野上とあまり會ふ機會を持たなくなつた。そのうち私は仙臺に行つたので、その機會は更に少くなつた。法政で騒動が起り、野上と森田とが對立して揉み合つてゐた時には、私は森田側から話を聴くだけだつたので、自然森田の方に同情する傾向があつた。しかしあとで段段事情がわかつてみると、結局野上は飼犬に手を噛まれたかたちだつたので、私は改めて野上の方に同情した。森田は死ぬ前日だつたかに、野上に借りてゐたチョッキを返すのだとかなんだとか、わけの分らないことをしきりに口にしたといふが、森田もあるひは死ぬ前に

は野上に負目おひめを感じ、それを返して置きたいと思つてゐたのが、かういふ言葉になつて現はれたのではないかと思ふ。

暮の寛永寺で森田のお葬ひの時、森田は君にすまないことをしたといふので、あんなことを言つたのだよと、私が野上に言つたら、野上はなんにも言はずにただにやりとした。これであるひは二人の間には、和解が成り立つたのかも知れない。

それにしても最近引き續いて、森田が死に、野上が死に、前には三重吉が死に、寅彦が死に、漱石門下のおよそ同年配の者は、數へるほどしかゐなくなつた。この先きいつだれがまづ召集されるか、それは我我にはわからない。我我はただ神妙にそれを待つてゐるより仕方がないのである。

(二五・二・二四)

## 野上のこと

野上が死んだ。野上は運営委員として都民劇場組合出發の當初から組合のために盡力してくれた。一昨年こぞの二月十一日輕微な腦溢血で倒れ、それ以來用心して委員會にはほとんど出席しなかつたが、それでもブレインとしては、機會あるごとに相談に乗つてくれた。

腦溢血は妙に週期的に襲ひかかつて來るものだと言はれる。しかしその週期を越すと、あとはまたしばらく心配がないといふので、野上のうちでは今年の週期が無事に過ぎたのを、みんなして祝ふことにしてゐたのださうである。ところが野上は丁度そのころから少し風邪をひいた。當人もうちのものも、ほんのかりそめの風邪だと油斷してゐるうちに、二十三日の夕方、二聲三聲の鼾聲を残しただけで、あつてなくなつてしまつたのだといふ。

野上は大學を出てからすぐ法政に勤め、ずっと法政の爲に操を守り、終戦後は總長に推された。終戦後は根本的な學制改革があり、野上は戦災を受けた法政の復興に盡瘁じんすしなければならなかつた上に、私學聯盟だの大學設置委員會だの、その他それに似たいろんな仕事の爲に、からだか二

つあつても三つあつても足りない、急がしい思ひをしなければならなかつた。用心してゐたくても用心してゐられない場合も屢あつたに違ひない。野上は文字通り法政の爲に一身を捧げてしまつたのである。

かうして野上は法政の爲に働くかたはら、いろんな著述をしてゐる。嘗ては小説を書いたこともある。翻譯も随分してゐる。能の研究もたくさんあるし、能面の研究もかなりある。戦前イギリスまで出かけて行つて、能や能面について講演し、比類のないこの古典藝術を、それを専門に研究した日本人として、海外に紹介した功勞も没しがたい。

明治四十二年（一九〇九）三月十四日の日記に、夏目漱石は野上の謡を評して、「白川（きりせん）五位（ごい）驚の如き聲を出す」と書いてゐる。當時の野上はまつたくをかしな聲を出して謡をうたつてゐた。野上はしかし少しもひるまず、長い間かかつてその悪聲を鍛へ、その悪聲に磨きをかけ、見事にそれをサビのある聲に仕上げた。素人で野上ほどの味のある謡のうたへる者は、あまりなかつたと言つていい。それとは反對に野上は、學生の時分から器用に晝をかいてをり、のちには能の舞臺のスケッチをしきりに作つてゐたが、これは野上の謡ほど味のあるものではなかつた。しかし簡素で輕妙ではあつた。能が好きで、能に忠實だつた野上のことだから、もし戦災に罹つてゐなかつたとすれば、この種のスケッチは随分たくさん溜つてゐたはずである。適當な機會に適當な説

366728

明をつけてそれが展示されれば、能に興味のある人達には、恐らくいろいろ参考になることが多いただらうと思ふ。

(二五・三・八)

## 兒島のこと

兒島が死んだ。

兒島は別に淋しさうにも見えなかつたが、しかし兒島は實は淋しがりやで、人と會つて話をすることを好んだ。話をし出すと、よく時間だの空間だのを超越した。あんなに遊んでゐてよく勉強する時間があるものだと思ふこともあつたが、しかし兒島は平氣で夜更しをし、平氣で幾晩も徹夜してゐたださうである。それで別にまゐつてゐる様子もなかつたのだから、兒島の頭も身體も飛び切り丈夫にできてゐたものらしい。しかし實はそれがいけなかつた。健康に自信があり、無理が通せたからいけなかつた。

ドイツの美術史家クルト・グラアゼルが、何しろ兒島つて奴はなんでも讀んでゐるんだからかなはないといつたことがある。グラアゼルの恐れたことが別に兒島の名譽をなすものではないが、しかし兒島は専門の美術だけでなく、例へばドイツ文學關係のものでも、専門の私よりもよつほどたくさん讀んでゐた。癡性の兒島は、必要を感じると、糸をたくつて、どんなものにも眼を

通さなければゐられなかつたやうである。それはこのごろ兒島が『世界』に書いたり『藝術新潮』に書いたりしたものからでも、およそ想像することができるだらう。

しかしなんといつても兒島がこれまで何十年來四つに取つ組んで來たものは、レオナルド研究である。これは日本が世界に誇りうる、文化的な仕事の一つになるはずのものであつた。それが大塚保治先生還曆記念論文集の中の論文にほんのその片鱗を示しただけで、つひに完成されなかつたのは、返す返すも残念である。

それにしても兒島のレオナルドに関するノートは、恐らくたくさん残つてゐるに違ひない。兒島のもなくなつた今日、それは人形使ひのない人形のやうなものに過ぎないが、しかし専門の友人やお弟子たちの手でなんとか整理し出版してもらつて、兒島が築かうとしたピラミッドの、せめてもの面影をしるぶたよりとしたいと思ふ。



## 安倍のこと

ソクラテスは陣中でも往來でも、いつでもどこでも自由にものを考へることができたといふが、安倍にもまた若い時分からさういふところがあつた。昔修善寺で漱石先生が大病をした時、見舞に行つて安倍も私も同じ宿屋に泊つてゐたが、見舞客の出入が劇しく、周囲がひどくざわついてゐる中で、安倍が朝日文藝欄の爲の原稿を、二回分だか三回分だか、悠悠と書き上げたので驚いたことがある。今日でも私にはさういふ藝當はできない。といふことは、條件が揃つてゐるのではないと、私にはものが考へられないといふことである。

もつともこれは、一つは習慣である。また内部に溢れ出る泉があるかないかできまる問題でもある。私にそれができないと言つて、別に驚くにはあたらないかも知れない。漱石先生も、必要とあれば衆人稠座ちゆうざの中でも、結構原稿を書いてみせると言つたことがある。寺田寅彦は本郷から深川まで、水産講習所へ往復する電車の中で、カントの『純粹理性批判』を讀み上げた。湯川秀樹君は、いつでもどこでも考へたいと思ふ時に考へることができると言つてゐる。中谷宇吉郎

君はアメリカ旅行中の飛行機の中や汽車の中で『花水木』をかいた。結局これは自分の眼が視、耳が聴くものから煩はされることなしに、自分の欲するものにいつでも自分の心を集中することができる、意志の力があるかないかできまる問題でもあるやうである。しかし今日の安倍の場合、より多く、安倍の心が自由になつて、環境に支配されることがなく、反つて十分環境を支配することができるやうになつた結果であると思はれる。意志が自然になつたのである。認識が身になつたのである。

105 安倍のこと

利休は心の赴くところに従つて矩を踰へずと言つた孔子の言葉を、座右の銘にしてゐたのだといふ。今日の安倍の心の自由は、ほとんどこの境地に到達してゐると言つていい。例へば私は人に會つて話をする、すぐくたくたに疲れてしまふ。會議が二つ續いても、頭がぼうとなつて、活潑にものが考へられなくなる。しかるに安倍は、十人や二十人の客に會つても平氣である。會議が三つ續かうが、能や芝居が四つ續かうがびくともしない。これは勿論安倍が無比の健康に恵まれてゐるせゐでもあるが、しかしそれとは別に、安倍の心が自由で超脱的で、餘計なことに神経を使つたり拘泥したりせず、いつでもどこにゐても平常心を取り失はないでゐられるせゐであると思ふ。疲れると安倍はどこでも居睡いねいをする。しかしこれもまた安倍が心の赴くところに従ふので、安倍ほど自然に居睡いねいをしうる者は、恐らく、類がない。また居睡いねいをしながら、安倍ほど灸所

を取りはづさない者も、また類がないのである。さういふ安倍を見てみると、安倍には何か不思議な勘のやうなものがあつて、灸所と灸所でないところが前以つて嗅ぎ分けられ、安倍はその灸所でないところだけを縫つて居睡をするのではないかとさへ思はれて來るのである。

もつとも灸所と灸所でないものとを識別する——どういふ問題にぶつかつても、その中で一番大事なことはなんであるかを識別して、全力を集中してそれと取つ組み合ふといふのは、安倍のものの考へ方の特徴であり、安倍の生活はその修練の連続であると言つていいものだつた。それだけに安倍の灸所の攪み方は、早いし、鋭いし、正しいし、またその處理の仕方、必ずしも悉くとは言へないのかも知れないが、早いし、正しいし、適切である。裁斷流るるが如しといふ言葉があるが、安倍の裁斷はてきぱき、きびきびしてゐて氣持がいい。これも安倍の心が自由で私がなく、従つて右顧左盼する必要がないところから來るのだらうと思ふ。勿論人を相手にする場合には、その裁斷があまりてきぱきすぎ、きびきびすぎて、相手に氣の毒な氣がすることもなくはない。しかしそれはたいていさう思ふ方が氣が弱すぎるので、誠實で私のない安倍の裁斷は、決して間違つてはゐないのである。氣の弱い者はちよつとひるむやうな場合でも、安倍はただずばずばそれを言ふだけの話である。

安倍は愛憎の念が強いと言へる。しかし安倍の愛憎は、正邪・善惡・美醜の判斷のはつきりし

た基礎の上に立つてゐる。いたづらに感情的もしくは感覺的に愛憎するのではない。その點で安倍の愛憎は、いはば公けのもの、男らしいものである。しかしひつくるめて言へば、安倍の底を流れてゐるものは、無限の人間愛で、安倍はすべての人を抱擁し、すべての人に奉仕したい願ひを懷き、且つそれを實行してゐる。安倍の憎みは、實は相手に自分が愛するに値ひする者になつてもらひたいと祈る心の、變形なのである。

安倍が學習院の再建といふ大任を背負ひ込みながら、なほ且ついろんな仕事を引き受けさせられ、三人前も五人前も働いてゐるのも、結局は日本に奉仕し、ひいては世界に奉仕しようとする、安倍の人間愛に外ならなかつた。安倍は多くの點で私の及び難いものを持つてゐるが、私の一番及び難いと感じるのは、この點である。嘗て安倍が大臣をしてゐる時分、あまりに來客が多すぎ、そのため安倍が健康を害することを虞れたので、祕書官に命じて訪問客を調節させてはどうかと勧めたことがあつた。しかし安倍は決してそれをさせず、一一來客に會つてはその請願や陳情に耳を傾け、時の移ることも自分が疲れることも意に介しなかつた。ドイツ流に晝飯の時間を三時間とつて、その間に晝寝をしてはどうかとも言つて見たが、安倍はこれも聞き入れなかつた。その時私は、安倍の人間愛に比べれば、私の中にはむしろ厭人的なものが巢喰つてゐて、それが私に己れを空しうして人に奉仕すること、安倍の如くならしめないのではないかと、しみじみ反省

しなければならなかった。安倍が身を粉にして働いてゐるところをみると、今でもこの對照をつくづく感じざるを得ないのである。

(二六・四・五)

## 日本人の顔

昔西洋へ行つてゐて、往來などで知らない日本人に會つたりすると、妙に恥づかしい氣がしたものだつた。日本人は背が低く、からだ小さい。それはやむを得ないことだとしても、顔が平べつたく、眼が細長く、鼻が低く、頬骨だの顎骨だのが出つ張つてゐて、一體に顔の彫が浅く、まるで表情がない感じである。それが西洋人の顔を背景にするので、一層恥づかしい氣になるのである。しかし自分の方から他人がさう見える以上、他人の眼からは自分の顔も同じやうに見えるに違ひない。さう思ふと恥づかしさは倍になつた。

その後ブドフキンの『アジアの嵐』といふ映畫を見た時にも、同じやうな恥づかしさを感じた。あそこにはダットン人を中心として、いろんなアジア人の顔が出て来る。細かく觀察すれば、それそれ違つた特徴があるには違ひないが、しかしおよそにながめてその顔が無表情で、何を考へ何をたくらんでゐるか分からない。その意味で陰險で、野獸のやうに氣味の悪いところを持つてゐる點では、西洋の往來で會ふ知らない日本人の顔と、さしたる相違はないのである。それが大

群をなして突撃するのだから、これはまったく「アジアの嵐」だった。さういへばこの間の朝鮮の戦争では、北鮮軍は「人海戦術」とかいふものでアメリカ軍を悩ましたといふが、これも一種の「アジアの嵐」だったのだらう。

ところが終戦後アメリカ人その他の國の兵隊が大勢日本にやつて来て、それがぞろぞろ往來をあるいてゐるところにぶつかるやうになると、今度はさういふ兵隊たちの顔が、およそ無表情で、どつか野獸のやうな氣味の悪いところを持つてゐるやうに感じられ出した。無論彼らはりつばな體格を持つてゐる。眼も大きいし、鼻も高い。にもかかはらず顔全體の感じに、インテリジェンスの光りが、少しも輝き出てゐないのである。さうして、これなら日本の男や女の方が、まだりつばだといふ氣さへするのである。

これは私の身量肩からくるのかも知れない。日本人の體格も顔も次第によくなりつつあるとはいつても、日本人の教養も趣味もまだまだ低い。殊に女はアメリカの眞似ばかりしてゐて、髮の格好でも、顔の化粧でも、爪の手入れでも、唇の色どりでも、昔の日本の女たちよりもはるかに惡趣味なところを示してゐるのだから、かういふ日本人を背景とすれば、外國の兵隊たちが、それほど際立つて無表情に見えるはずはないからである。するとこれはどこからくるのか。これは彼等が兵隊であるといふことからくるのか。あるひはさうかも知れない。兵隊であることは、戦

争に備へることである。戦争を中心に訓練されるとすれば、自然人間の顔からインテリジェンスの光を失はせてしまふかもしれない。それとも兵隊には教養のない人達ばかりが集つてゐるからなのか。その點は私にはよくわからない。

ただ一つはつきりいへることは、心が高く美しくさへあれば、どんなに眼が細く鼻が低く頬骨や顎骨が出つ張つてゐても、その人の顔は、その人の心の輝きで、とくに美しく見えるといふことである。與謝野晶子の顔は、造作としていい造作ではなかつた。しかし内側から照らし出す光のために、その顔は特別な美しさに輝いてゐた。安倍能成の顔は、日本人としては彫の深い顔といふべきである。しかし造作は必ずしも結構な造作であるとはいへない。しかしこれもまた晶子の場合と同じやうに、安倍の心の高さが、安倍の人間に對する深い愛が、安倍の顔を高い感じのもの、懐かしい感じのものにしてゐる。私のお弟子に、むしろひどく醜い顔をしてゐた女があつた。それが、その醜い顔のままに驚ろくべく美しい光を放ちはじめたので、どうしたのかと不思議に思つてゐたら、卒然として死んでしまつたといふ例もある。

表情は心次第で活きもすれば死にもするものである。日本人の顔にかりに外面的に表情がないとしても、それは少しも憂うるにあたらぬ。

## 眼鏡

安倍がアメリカから歸つて來るといふので、羽田まで迎ひに行つた。

羽田の空港を見るのは今度が初めてである。外の空港を知らないから比較するわけには行かないが、どういふものか私には殺風景で、妙に荒れ果てた感じだつた。勿論そのうちにはここにも何か一種の情調が出て來るのかも知れない。しかし空港といふものは、あるひはどこでもこんなものなのではないかといふ氣もする。

それはともかく、安倍が焦茶色のソフトをかぶり、ボストン型の眼鏡をかけ、雙眼鏡のケースを肩にかけ、左手に小型のスーツケースを提げ、右手に眞つ赤な花束を捧げて、飛行機から下りて來たのには、驚いた。

安倍はこのごろ帽子といふものを被つたことがなかつた。さうして二月も三月も床屋に行かない白髪を、獅子のたてがみのやうに風に翻へしてゐるのが、私には好ましかつた。それが變につままれたソフトで隠されてゐるのである。

のみならず安倍は、上が一直線で下が椀形になつてゐる鼈甲縁べつかくの眼鏡をかけてゐる。中谷吉郎君が前にアメリカから歸つて來た時、妙に派手な洋服を着て、妙に派手な帽子をかぶつてゐたのを、何か中谷君らしくない、アメリカ歸りの若いハイカラを見るやうで、ちよつと馴染めなかつたことがあつた。安倍のこの眼鏡にも似た意味で私は馴染めなかつた。

眞つ赤な花束は、近づいて見ると、花だか葉だか分らない花で、葉柄にあたる邊から、雄蕊おしべだか雌蕊めしべだか知らないが、ともかく黄色い蕊がぬうつと出てゐる。これは安倍がハワイを立つ日にもらつたのださうである。我我日本人から見ると、どうしても自然の花とは思へない。まるで造花である。しかし馴染めないとは言つても、これは何も安倍の身についてゐるものではないから、帽子だの眼鏡だのほど氣にはならなかつた。

眼鏡のことをあとで安倍に聞くと、安倍が眼とすれすれに新聞を寄せて讀むところを見て、五十年振に會つた安倍の舊友が、サンフランシスコの眼醫師と眼鏡屋とへ連れて行き、この眼鏡を買つてくれたのださうである。それだから安倍は戦災以來の習慣を破つて、眼鏡をかけることにしたのでいふが、視力をいたはる爲には、眼鏡をかける必要があり、サンフランシスコで買へばボストン型であるのも當然なのかも知れない。これは止むを得ないことである。そのうちには段段こつちも馴染むに違ひない。

しかし更にあとで聴くと、この眼鏡をかけてみると、よく涙が出るし、どうかすると、一字書いた上に重ねて字を書くやうに、見當が狂ふこともあるのだといふ。安倍はこれを眼が眼鏡に馴染まないせゐであると解釋してゐるやうである。私もさうかと思つてゐたが、しかし考へ直してみると、これは眼鏡の度と眼の度とが合はないせゐに違ひない。もしさうだとすれば、反つて眼鏡は安倍の眼を悪くするばかりである。これはこのまま捨て置いてはいけないのではないかといふ氣がし出した。

安倍は今熱海で休養してゐる。歸つて來たら早速眼鏡屋へ行くやうに忠告しようと思ふ。

(二八・三・三)

## アンシウリウム

去年安倍がアメリカから歸つて來た時、葉っぱだけ花だかわからない、眞赤な花を持つて飛行機から下りて來た。花は一瓣で黄色い蕊も一本にゆうつと出てゐるだけで、形は水芭蕉の花に似たところがあるが、感じはまるで違つて、むしろ毒毒しくいかにも造花らしい感じのものだつた。これはなんといふ花なのかと訊いてみたが、しかし安倍は名前は知らないといつた。立つ日にハワイでもらつたのださうで、このまま花瓶に挿して置けば、一月くらゐはもつ花なのださうである。ハワイと聞けば、いかにもハワイらしい、熱帯の花だといふ氣がする。日本人から見ると、これは花ではないと、その存在を否定したくなるやうな花ではあるが、しかし花は葉っぱの變形であるという假説を立ててゐたゲーテからいへば、これはその假説を支持する有力な花であるらしくも思はれた。

それにしても私は、その花の名前が知りたかつた。安倍は名前を聞いたのだが、途中で忘れてしまつたのかも知れない。もしさうだとすれば、そのうち思ひ出す機會がないとは限らない。さ

う思つて私は、その後一二度安倍に、あれはなんといふ花かと訊いてみたが、その都度安倍は知らないと答へた。やむを得ず私は断念しなければならなかつた。

そのうち今年になつて長興のうちへ行つたら、長興がこの花をかけた畫があつたので、ちよつと驚いた。長興の畫には跌宕とか豪壯とか形容したい趣を持つたものもあるが、一面また妖怪的といふか、神話的といふか、さういふ不思議な味のあるものもある。この花の畫の味はむしろ後者に屬するもので、そこにはいかにもハワイらしいエキゾテイズムがあつた。面白いねと讚辭を呈したあとで、君、この花はなんといふ名前か知つてゐるのかい、と訊いたら、長興はアンシッリアムといふのさ、と無造作に答へて、エー・エヌ・テー・エッチ・ユー・アール・アイ・ユー・エムと綴るんだと綴りまで教へてくれた。一緒にゐた安倍は、さうか、アンシッリアムといふのかといつた。安倍はやつぱり名前を聞かなかつたのだらう。

歸つて来て井上十吉の『英和大辭典』をあけてみると、そのアンシッリアムはちやんと採録されてをり、「菖蒲屬(學名 Acorus)に類せる一屬」で俗にフラミンゴ・ブランドといふのだと、説明がつけてあつた。フラミンゴといふのは紅鶴と翻譯されて、今はどうだか知らないが、昔は上野の動物園にも飼養されてゐた鳥である。この花を見てフラミンゴを連想したのは面白いと思つた。フラミンゴにもなんとなく怪奇な趣きがあるからである。

その後岩波書店に行つてゐたら、ある重役のところへどつかから、この花が届けられた。その重役はこの花の名前を知らなかつた。ここぞとばかり私は、この花の名前を知るまでのいきさつを一席辯じた。

## モデルとなつて

安井君に肖像をかいでもらふことになつて、泊り込みでモデルの座につくことにした。毎日朝の九時から十二時まで三時間づつ、今日で丁度二十日續いてゐる。十五分か二十分置きに、安井君の手都合でちよつと休むのだが、それでも三時間となると、暑い日には、相當こたへる。どうかすると、氣が遠くなる氣がする。奥さんが食事の用意が出来たと呼びに来てくれて、初めてほつと救はれる。まだ奥さんの足音はしないのかと、聴耳を立てることさへある。

元來私は、自分の原稿がまだ完成しないうちに、人から見られるのが大嫌ひである。それだけに私は安井君の畫を、まだできあがらないうちに、決して見ようとは思はなかつた。のみならず畫かきが人の顔をかいてゐれば、その顔は日日變化するにきまつてゐる。それを一一覗き込んで、その度毎に悄氣たり好い氣になつたりして、相手にそれを言ふのでは、畫かきはうるさくて堪らないし、こつちも恐らくやり切れない。その點からも私は安井君が見ろといふまでは、決して畫を見まいと決心した。

それにしても私には、自分の顔が安井君にどう描き出されるか、それを見てみたい好奇心が動かないではなかつた。好奇心を離れても、一つの肖像畫がどういふ手續で段段完成されてゆくのか、特に安井君の製作過程がどういふ風に進められてゆくものか、それを事細かに知りたい探求心もまた、私の中では動いた。しかし畫架の裏側に坐つてゐる私には、刻刻進行する制作過程をつぶさに眺める便宜は、初めから奪はれてゐた。結局私はさういふ心の動きを押へじつと坐つてゐるより仕方がなかつた。

しかしそれだけに私は、安井君の眼と安井君の畫筆の動く位置とパレットでまぜる繪具の色とに注意して、安井君は今顔をかいてゐるなとか、今著物をかいてゐるなとかいいかげんに見當をつけ、安井君がそこに手間をかけてゐると、自分も安井君と一緒にゐると、そこで苦勞するといふやうな、妙な力癪を妙なところに入れる結果になつてしまつた。事實は安井君がどこで苦勞してゐるか、第一そこで苦勞してゐるかどうかさへ、はつきりとはわかつてはゐないのである。それなのに私は苦勞するのだから、私は一層息苦しくなるはずである。

それでは困るので、私は自分を靜物にする修行をし出した。嘘だかほんとだか知らないが、昔は宮様は二時間でも三時間でも、キチンと坐つて正面を向いたまま、少しも身動きしない稽古をなさつたのださうである。これも自分を一種の靜物にする修行である。しかし私のは單にさうい



ふのではなかつた。なんといふか、身體中の力を抜いてしまふとともに、心を遊ばせる。無念無想になる。安井君がどこを見ようがどこをかかうが、それをちつとも気にしない。もしくは安井君と一緒に苦しまうとしない、いはば安井君にかかれる桃や梨と、同じ心持にならうとする修行である。しかしこれは、なかなか容易な修行ではなかつた。安井君が筆のやうな眼をして、じろりと私の顔を見ると、私の無念無想は忽ちに破れ、私はすぐ安井君の畫筆の行く場所を、裏側から見當をつけなければならなかつた。やつと無念無想になりかけたと思ふと、今度は私が常に視線を注いでゐる、安井君の後ろに立てた屏風の松の樹の枝が沈んで、煤けた屏風の地色が浮き上がり、あぶなくとろとろとしようとする。それでも安井君は、君は動かないから感心だと褒めてくれた。いくらかその修行が物になつたのかとも思ふ。

しかし四、五日前安井君が、顔の寫生を一應すませて、著作だけに専心したことがあつた。すると私の心持は急に軽くなり、じつと坐つてゐることが、大して苦勞にならなくなつたところを見ると、やはり私の靜物修行は、なんの役にも立たなかつたもののやうである。自分のどこかに色氣があればこそ、顔を見られてゐる時には緊張し、著作を見られてゐる時には、心持がほつとするのであらう。それとも安井君の視線には特別強力な電流のやうなものがあつて、それが直接皮膚に觸れると、神経系統に強い刺激を與へるのかも知れない。事物の底に穿貫してゆく安井君の

眼力を考へると、安井君の視線にさういふものを假定してもいやうな氣もするが、しかしこれは結局私がモデルになることで解脱してゐないことを證明するより外の、何ものでもないに違ひない。

もしモデルがこんなにくたくたに疲れるものだつたら、モデル稼業は恐らく成立たないだらう。少くとも私には當分の間、モデル稼業は勤まらないやうである。

## 安井の畫室

私は八月十一日から九月一日まで二十二日間、安井の畫室で安井に肖像をかいてもらった。

安井の畫室は、もと栖鳳の畫室だつたのださうで、ダイナマイトで壊したといふ、大きな巖の塊りの上に立つてゐる。五十疊敷だといふが、天井が馬鹿に高い上に、別に十二疊の日本間が舞臺のやうにくつついてをり、樂屋にも使へさうなその隣は六疊のサンルームなので、恐ろしく広い。むしろ伽藍堂な感じがするくらいである。サンルームは、東からも南からも西からも光を受けるやうになつてゐるが、ここには特別な、紫外線を通す硝子が張つてある。

湯河原の町は山と山との間の谿谷を流れる谿川を挟んだ町である。宿屋はたいていその川に面して建てられてゐるので、例へば樂山莊のやうなのは別として、すぐ鼻の先に山があり、従つて一向見晴らしがなく、ひどく窮屈な感じを與へる。ただ安井の畫室は高臺で、川を縦に見下ろす位置にあり、北側と南側とが大きな硝子戸で張りつめてあるので、相當遠くまで見晴らしが利く上に、風が自在に吹き抜けて、爽やかなことこの上もない。殊に南側の廣窓の下には、幹が白く

それに黒い太い堅縞の通つてゐる櫺くまざが十數本、横に且つ段をなして列んでゐるのが、畫室の風景を一層爽やかなものにする。

安井は畫室の入口から一間ばかりのところに、津田の意匠になる、藍色のキャンパス地に木瓜ぼけの花か何かを模様之列べた二曲の屏風と、永徳風の、鷹の巢の中の雛を中心に、松の樹の枝の上に左右に一羽づつ親鳥を配した六曲の屏風とを置いて、日本間との區切をつけ、一方、無地のキャンパスで張つた、これはまた馬鹿に背の高い二曲と八曲との屏風を立てて、南側から來る光を遮り、さうして出來上がった二十疊内外の空間の、北側の廣窓に近いところに畫架を立てて仕事をしてゐる。

私がここに初めて案内された時は、安井は北側の硝子戸を明け放して、畫室から見える川と川の上流の橋と橋のかみの、著物の襟のやうに幾重にも重なりながら奥深くなつて行く山山をかいてゐたらしく、八號位のキャンパスが畫架に立ててあつた。それとは別に、白い屏風寄りに、テーブルの上に乾隆の鉢か何かに水蜜を五つばかり盛つたものが置いてあり、そのそばの畫架にも十號位のかきかけが立ててあつた。安井は自分の日課を午前と午後とはつきり分けて、午前  
は風景、午後は靜物と取つ組んでゐるらしかつた。

私の素描ソフスケッチは、私の著いた日から始まつた。しかし私が疲れてゐるだらうといふので、その日は

一時間か一時間半くらゐで切り上げることになった。しかしその翌日からは、毎日、午前九時から十二時まで三時間、モデルの座につくのが、私の日課になった。素描は始めた日を入れて三日続き、四日目からはカンブスに移つたが、カンブスは著物がかきたいから十五號にするといふことだつた。私が来たので安井の日課が變り、午前中は私の肖像、午後は三時すぎから日一杯靜物といふことになり、風景はしばらく仕舞ひ込まれた。

何分にも私は、モデルになるのは、初めてだつた。それだけにどうしてゐればいいのかの見當が、私にはまるでつかなくかつた。それでも私には、人から注目されることに堪へない、弱い神経しか持ち合せてゐない。相手が安井だから樂な氣持でゐられると思ひながら、その安井がじろりじろりとこつちを見る度に、とかく私は心の平靜をとりはづし勝だつた。しかしせつかく安井からかいてもらふのに、變にこちこちに堅くなつてゐるのは、厭である。私は、自分がかかれてゐるといふ氣持を捨てて、何か外のことに関心を集中しようとした。それには差し當り、自分の正面にある、桃山の屏風を眺めるより外はなかつた。私はその構圖を考へたり、色どりを考へたり、自然と型との關係を考へたりした。

しかしいくら屏風の畫に專念してゐても、不圖安井の視線を感じ出すと、もういけなかつた。

昔眞鍋嘉一郎が、夏目漱石の最後の胃潰瘍を診察する場面に行き合せたことがある。眞鍋は聽

診器を漱石の患部に當てて、あちらこちらと聽診して行くのであるが、その眞鍋の眼つきだの顔つきだの聽診器の動かし方だのを見てゐると、何か殺氣だつてゐて、丁度罪人の病氣が逃げて廻るのを、探偵の眞鍋が聽診器で追跡してゐるやうな、嚴しい場面を連想しないわけに行かなかつた。私はその時、なるほど眞鍋は名醫だなと感心した。安井の眼は、私にその時のことを思ひ出させるのである。さうして私は、自分がその時眞鍋の聽診器に追つかけて廻された病氣になつたやうな氣がして安き心もないのである。

125 安井の畫室

私は何も別に悪いことをしてゐるのではなかつた。安井も實はそんな怖い眼をしてゐるのではなかつた。それどころか安井は、大きいけれども、實に柔和な、穩やかな眼をしてゐるのである。それにもかかはらず私が、安井から睨まれると、自分を病氣みたいに感じて安き心もないのは、恐らく安井の現象の底の底までも徹しようとする氣魄に押されるせゐではないかと思はれる。安井がちらつちらつとこつちを見る度に、こつちは油斷も隙もならない氣になつて來るのは、安井が私の上に動く色だの光だのを捕まへるのに、油斷も隙もない張り詰めた氣持である、その氣持が自然にこつちに映つて來るせゐに違ひない。外の言葉で言へば、こと畫に關する限り、安井が自分自身の上に課する義務は、嚴肅をきはめたものだつた。それが他人に安井を、嚴肅をきはめたものと感じさせるのである。

芭蕉は「もの見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし」と言つてゐる。セザンヌは「ヴォラール君、色は逃げる」と言つたといふ。自分の心に閃めいたものは、閃めいた瞬間に取つて押へなければ、ぐづぐづしてゐるうちに消えてしまふものである。その意味で安井の對象を見る眼には、常に油斷がなく隙がなく、また一度捕まへたものを自然と比較して検討する上にも、注意が萬遍なく行きわたるので、かかれてゐて、兎角だらけ勝ちになるこつちの氣持が、それを怖く感じるのに違ひない。

デュフィはセザンヌのことを、「あんな冷酷なクラシック精神は嫌ひだ」と言つたさうである。セザンヌの精神を「冷酷なクラシック精神」と言ひうるなら、安井の精神もまた「冷酷なクラシック精神」と言つていいに違ひない。暢氣なデュフィから言へば、あるひは「冷酷」といふより言ひやうはないのかも知れないが、しかしこれは少し言ひすぎである。セザンヌは「冷酷」ではあつても「冷酷」ではない。同じやうに安井もまた「冷酷」ではあつても「冷酷」ではない。自分の全生命を打ち込んで對象を凝視する氣魄がなく、いい加減なところで切り上げて、それで有頂天になつてゐるのは、あるひは新しい流行であるのかも知れないが、しかしこれは決して藝道への本筋ではない。本筋はセザンヌの道、安井の道である。安井はセザンヌと同じ様に、デュフィから嫌はれるのかも知れない。しかしかりにデュフィから嫌はれたとしても、安井はちつとも

驚かないだらう。また少しも驚くにはあたらない。安井にとつて他人の言ふことなどどうでもいのである。安井は自分の上に重い義務を課するだけで、それを果たす道を、黙黙として一人で歩いてゐる。安井ほど孤高の精神に生きてゐる者はないと言つていい。

事實安井の畫をかくところを見てゐると、安井は随分苦しんでゐるやうに見える。しかし安井はいくら苦しんでも、一切泣き事を言はない。勿論私のやうなものをつかまへて、泣き事を言つても始まらないが、しかし安井は私だけではなく、誰に會つても、泣き事らしい泣き事を言つたことはない。安井にとつては、苦しむこともまた楽しみなのである。

私は畫架の裏側にゐて、畫面は全然見えないのだから、安井が今どこをどうかいてゐるか、正確には知るよしもなかつた。しかし安井の視線や安井の畫筆の動く位置、パレットの上でまぜ合はせる繪具の種類に注意してゐると、私には安井が今かいてゐる所はおよそどの邊で、安井が今苦しんでゐる所はおよそどの部分だらうといふことが、ほぼ見當がついた。安井は細い畫筆を短く持つて、毛彫でもするやうに、丁寧に色を塗る時がある。太い畫筆を使つて強い太い線を氣合を籠めてぐいと引く時がある。また中位の畫筆で點をうつやうに色を置いて行く時もある。布巾を使つて、たつた今引いた線や打つた點を綺麗に拭きとつて、またぐいと線を引いたり、ぼつぼつと點をうつたりする時もある。そのあとで安井は、眼を瞑つて仰向いて、顔の位置を元に戻し

てからばつと眼をあいて、じつと畫面を見詰めたり、あるひは椅子から立ち上がつて、二間さがり三間さがり、ある時は四間もその上もさがつて、仰向いたり俯向いたり、顔を右に向けたり左に向けたり、ためつすがめつ畫面に見入つたりする。これは恐らく、局部に囚はれて全體を忘れ易い寫生の仕事に、全體としての釣合を疎おろそかにしない爲の用意が主になつてゐるには違ひないが、しかしそれだけではなく、自分を自分の坐つてゐる場所からもぎ放して、別の囚はれない立場から、自分の畫と自分の畫のモデルとを比較し對照しつつ、自分の苦しんでゐる箇所箇所に新しい解決を見出さうとする目的からも來てゐると思はれる。

安井はしなやかで長い指を持つてゐる。特に安井の親指は、付け根の關節が太く出つ張つてゐて、そこから長い親指が反を打つて伸び出してゐるところに特徴がある。安井が畫面を離れて桃山の屏風の前に立ち、左手もしくは右手に畫筆を持ち、明いてゐる方の、その特徴のある指の手を、あるひは堅たにして鼻の筋に合はせ、あるひは横にして眼の下に置き、あるひは親指を反らせた儘の手を胸の邊に曲げて、じつと畫面を見詰めてゐるところは、無心で、楽しさうで、まるで三昧郷にはひつてゐる者の趣である。私はさういふ瞬間、いくらその顔をスケッチしスナップしたい衝動に驅られたかわからない。かうして安井はいくら苦しんでも、自分一人で苦しみ、自分一人でそれを始末して、楽しさうに先きへ先きへと進んで行くのである。第一安井ほど自己批評

が峻烈なら、また対象を見る眼が精刻なら、人に訴へるまでもなく、自分一人で始末をつける方が、どんなに適切な解決が得られるかわからない。自然の前に敬虔な安井には、當然自然がいい解決を啓示してくれるに違ひないからである。

九月一日の午後一時近くになつて、安井の寫生は一往完成した。安井のいつもの流儀で、寫生が一往完成すると、今度は藝術的な仕上げが始まるのだから、眞の完成はいつのことになるかわからない。しかしどんな畫になるか私には楽しみである。——ただ心配なのは、私はいろいろ工夫したにもかかはらず、私は絶えず安井の視線にこだはり、安井の畫筆にこだはり、安井の繪具にこだはつて心が散亂し、くたくたに疲れ、安井にかかれる桃や梨のやうに、つひに泰然としてゐることができなかつたといふことである。安井の眼にこの心の散亂が捕へられずゐるはずがない。それがありのままにかかるとすれば、私は少少困るのである。

## 顔と聲と

安井曾太郎に肖像畫をかいでもらつたことがある。湯河原の安井のうちへ泊りこんで、三七二十一日の間、朝の九時から十二時まで、毎日三時間づつモデルの座にすわつてゐるのは相當苦痛だつた。

安井は大きな目玉をしてゐる。しかしその目玉は不斷はきはめて柔和で「春風駘蕩」な目玉である。しかるに安井がいつたん畫筆をとつて畫架に向ひ、私の顔をじつと見すゑる段になると、安井の限は爛爛らんらんと燃え、獲物をねらふ隼の眼のやうに、きびしく、鋭く、氣魄のこもつたものになつて、その度毎に私は安井の眼で射すくめられる感じだつた。それがたとへ中休みはあつても、三時間もつづく、いつのまにか私の頭はぼうつとなり、何か夢うつつの境をさまよつてゐるやうな心持にならないわけにかなかつた。安井の細君が食事の用意ができたと知らせに来てくると、はじめて私はほつとして、正氣をとりもどすのである。

あとできくと、安井はモデルの座にすわつてゐる時の私の顔と、一緒に飯を食つてゐる時の私

の顔と、顔がまるで違ふので、どつちの顔をかいたらいのか、ずるぶん選擇に迷つたのださうである。さういへばモデルの座にすわつてゐる私の顔は、始終緊張して堅くなつてゐたに違ひないし、一緒に飯を食ふ時には、その緊張がとけて不斷のくつろいだ顔になつてゐたはずだから、安井が矛盾を感じたのも無理はない。安井は不自然な私の顔よりも自然な私の顔がかきたかつたのだらう。しかしモデルの座にすわつてゐる私の顔を相手にする以上、徹底的にリアリスティックにそれと取つ組むより仕方がなかつたのだらう。そのせむかなにか、でき上つた繪を見て、私はこれがほんとの自分の顔なのかと思はざるを得なかつた。

同じやうな經驗を、私はほかでもしてゐる。ラヂオで録音したあと、すぐそれを再現してみてもらふことがある。するといつでも私はこれがほんとの自分の聲かと、不審に思はなければならぬのである。これはモデルの座にすわつて安井からにらまれる場合と違つて、精神的にさう堅くなる理由はない。もちろんマイクロフォンや録音機の性能がいくら不十分であつたり、私自身も何らかの理由でいくら堅くなつてゐないとも限らない。それにしても、これが自分の聲かといふからざるを得ないのは、何か他に理由があるのに違ひないのである。

自分が自分の顔として、自分の聲として認識してゐるものと、他人が私の顔として、私の聲として認識してゐるものとの間には、相當の開きがあるのかもしれない。それには無論うぬぼれが

手傳つてゐるかもしれない。しかしそれだけではなく、たいていの主観と客観とは、すなはち内から見るのと外から見るのでは、相當違つて見えるのが當然で、かりに雙方違つてゐたとしても、それはどつちもほんとはであるといふべきである——眞の小宮はその二つのものの總合にあるといふべきであるのかも知れない。

(二七・一一・二六)

### 本多さんの思ひ出

本多光太郎さんが亡くなつた。

本多さんは私が仙臺の大學の教授だつた時分、二期だか三期だか、長いこと總長をしてゐたので知つてゐるが、しかし専門が違ふし、年も違ふので、それほど親しく接觸する機會はなかつた。それでも安井會太郎が本多さんの肖像をかくことになつて、二週間だか三週間だか本多さんのうちに泊り、毎日大學の總長室へ通ひ、そこで本多さんにポーズをとつてもらつた時には、本多さんのうちに食事に招待されたり、總長用の自動車でお嬢さんも一緒に岩沼の向うの阿武隈川岸にお花見に連れて行かれたりもした。

なんでも安井が初めて渡佛する時、本多さんと船が一緒だつたださうで、方方寄港先で上陸して見物してあるく際には、いつでも本多さんが團長役を勤めたのださうである。安井はそのことを私に言つて、本多さんをなつかしがつた。そのため私も、なんとなく本多さんがなつかしくなつた。

安井が本多さんの寫生をすませ、あとはうちへ歸つて藝術化するだけといふ段取になつた時、私は阿部次郎と木下奎太郎と三人で一夜安井送別の宴を張つた。その時たしか本多さんも一緒に招待したやうに思ふ。この記憶は少しあやふやであるが、ともかくその時どうかしたはずみで書畫帖を買つて來させ、それに奎太郎が、色硝子の鉢に入れた梨の實と、脇に置いた巻煙草の箱を寫生し、安井が同じく筆で本多さんのプロフィールをかき、本多さんがどうもその席でそれに讀をしたやうに思ふ。その書畫帖は今でも私の手許にある。本多さんもその帖にU字形の磁鐵の畫をかいてゐる。

その時私が驚いたのは、安井が本多さんのプロフィールをかく態度であつた。安井は筆に墨を含ませて、じつと書畫帖の紙面を見つめてゐるのであるが、しかし安井は五分たつても十分たつても、なかなか筆をおろさない。何か紙を相手に眞劍勝負をしてゐる感じだつた。そのうち位置がきまり、線がきまり、それとも氣合がかつたのか、安井が力を籠めて引いて行つた線は、簡素そのものではあつたが、しかし本多さんの特徴を實に見事に捉へた線だつた。私達はみんな賞讃した。

ただ本多さんは自分のカリケテュアをかかれたやうにでも思つて、あまり氣に入らなかつたのかも知れない。その肖像の横に「これは僕ですか」と一行に書き、その隣りに「曾だらう」と別

行に書いた。いふまでもなく「曾だらう」は「曾太郎」のモジリであり、シャレである。

寺田寅彦は大學を卒業したてに、先輩の本多さんと一緒に、研究室でいろんな實驗をしたが、本多さんの根氣のいいのに閉口してしまつたと言つたことがある。今日は日曜だからゆつくりして、展覽會へでも行つてみたいと思つてゐると、本多さんがやつて來て、さあこれから研究室へ行つて昨日の續きをやるんだと言ふ。さう言はれば行かないわけにはゆかないので、不承無承くつついて行つたが、始終さういふ調子なので、まったくやりきれない氣がしたのださうである。寅彦には天才的ところがあつただけに、仕事のし方もリヅミカルで、時々氣持を轉換しなければならなかつた。それに反して本多さんは、一つの仕事をやり出せば、あくまでもそれに喰ひさがつて、寝ても覺めてもそのことに集中してゐなければ氣がすまなかつたらしい。その點で本多さんは持續の、集中の、ねばりの天才であるといふべきだらう。

その點で安井は本多さんに似てゐる。従つて本多さんは、ほんの僅かばかりの線しか使はないで自分のプロフィールをかく爲に、あれほど自分の精神を集中し、一線一畫をいやしくもしまいとする安井の態度には、むしろ敬服するところがあつたのではないかと思ふ。もしさうだとすれば、あの「曾だらう」は本多さんの不服ではなく、満足の現はれたつたはずである。



## 陶然とした茂吉

茂吉君には久しく會はなかつた。三四年前三越から『心』の同人が招待を受けたことがあつた。戦争後その時初めて會つたぎりである。去年茂吉君の爲に有志が武藏野に集つた時には、當日具合が悪くなつて、茂吉君はたうとう出て來なかつた。

三越で會つた時には、茂吉君は白い顎髯を房房とはやしてゐたやうにも思ふ。しかしこれはあやふやである。一昨年文化勳章と一緒に頂戴し、また一緒に賜餐しきんの席につらなつた吉右衛門は、茂吉君のことをよぼよぼのお爺さんで、何を言ふのか言葉がまるでわからなかつたと言つてゐた。しかし私の中に鮮やかに残つてゐる茂吉君は、戦争前の、口髯だけしかはやしてゐない、元氣な茂吉君である。もつとも茂吉君にはずるぶん山形辯がまじつてゐたから、元氣な時分に會つても、吉右衛門には茂吉君の言ふことはよく通じなかつたに違ひない。

茂吉君は顔の皮膚の綺麗な人だつた。安倍によると、茂吉君の肌は、眞白でふはふはしてゐて、まるで女の肌のやうだつたといふが、顔の皮膚から推すと、なるほどさうだつたのだらうと思はれ

る。しかしそれが、蚤だの虱だの南京蟲だのが好んで茂吉君のところへたかつて來た、唯一の原因をなすものかどうか、私にはわからない。女の人と同衾してゐて、さういふものに茂吉君だけが喰はれたとすれば、茂吉君の肌には、何かさういふものを牽きつける、特別な香氣でも立つてゐたのかも知れない。

茂吉君は酒が好きだつた。茂吉君が酔ふと、その顔の皮膚が美しく染まつた。のみならず茂吉君は酔ふと眼を丸くしてポカンとした表情になつた。さうしてよく口をあけて舌をペロリペロリと出した。それが愛嬌があつて、いかにもなごやかだつた。酔ふとおしゃべりになつたり騒騒しくなつたりする人がよくあるが、しかし茂吉君は陶然としてしまひはするが、言語動作はきはめて自然だつた。

茂吉君は酔つてゐても時々さういふことをしたが、しらふで向き合つて話をしてゐる時には、よく眼をねむつてじつと考へ込む癖があつた。眠い時に起こされた人が、一度眼を半眼に開いて置いて、あとでまたそのまま閉ぢてしまふ。茂吉君が眼をねむる時には、よくさういふ表情をした。これは精神を集中して問題を検討したり整理したり、判断したり解決したりする爲に、できるだけ外からの刺激を遮らうとするのだが、思ふやうに遮れないこともあるせゐなのだらう。ソクラテスはどこをあるいてゐても、頭の中に重要な問題が浮かんで來ると、すぐそのまま立ち止

まつてしまひ、一往の解決がつくまではその場所を決して動かなかつたといふが、茂吉君が急に眼をねむると、私はよくソクラテスのことを思ひ出した。

茂吉君は、例へば寺田寅彦のやうに分かりの早い人ではなかつた。しかし分かつた以上は、その判断はてこでも動かさないとところがあつた。つまり茂吉君は自分で十分検討を重ね、自分で十分納得した上でないと、決して分かつたとは言はない人だつたのである。人と話をしながら時時眼をねむつて考へるといふことは、茂吉君のものの扱へ方が徹底的であつたことの、一つの前觸れであつたやうにも思ふ。

寅彦から勉強を引けばゼロにしかならないと、寅彦は言つてゐた。茂吉君の徹底する精神は、寅彦と同じやうに、茂吉君を恐るべき勉強家にした。同時にその勉強の一つ一つはすべて眞剣勝負の意氣込みを以つて行はれた。これは茂吉君の自己の愛惜、自己の生活の愛惜から來るが、しかし茂吉君ほど自己と自己の生活とを見事に生かし切つた人間は外にあまり類がないと言つていい。その意味では茂吉君は、茂吉君の立場から考へても、まさに功成り名遂げた人だつた。

### 「一生に一度」

二月二十五日は齋藤茂吉の一周忌で、茂太君から東京會館へ招待された。席上指名されて、私は妙なことをしやべつた。

これは一九二三年、大正十二年の話である。もう三十年も昔のことだから、細部にはあるひは記憶違ひがあるかも知れない。ともかくその夏に茂吉は、たしかミュンヘンから私をベルリンの下宿へ訪ねて来てくれた。我我は一緒にしばらく話をした上で、外に夕飯を喰ひに行き、そこでまた長いあひだ話をした。その中に茂吉がシンガポールで女を買つた時の話があつた。

——かういふ席上でさういふことをしやべるのはどうかとは思つたが、しかしこれはいかにも齋藤茂吉を見事に表現してゐるので、私はあへて披露する氣になつた。

女は自分をどつかのホテルへでもひつぱつて行くのかと思つてゐたら、さうではなく、暗い横町へはひつてある家の壁に凭りかかり、ここで用を足せといふのださうである。仕方がないからそこで言ふ通りにしてゐると、生憎そこへ巡查がやつて來た。二人は別れ別れに遁げ出し、やつ

と捕まらないですんだのださうである。

思ひもかけない話を聞いたので、私はちよつと驚いた。それで私は、僕にはどうも冒険的精神がないから、たうていそんな眞似はできない、君は医者だからさういふ度胸のいいことができるのかなと言つたら、いや、さういふわけではない。ただ洋行は一生に一度しかできないことである、一生に一度しか経験のできないことは、できるだけたくさんして置く氣で、こつちへ来る船の寄港地・寄港地でさういふ試みをして來たのだと、きはめて眞面目な眞剣な、ゆるみなぞ一つもない表情で、茂吉は私に答へた。

その言葉を聴き、その表情を視て、私は茂吉にある種の敬意を持たないわけに行かなかつた。

この言葉には、茂吉の生れ故郷の上ノ山の若い衆のほひがある。とともにこの言葉には、人生體驗に對して恐ろしく多欲だつた、ゲーテのほひがある。ここでは上ノ山の若い衆とゲーテとが重なり合つてゐると言つていいのである。

ゲーテはある小説の中で、留守中の新聞を、歸つて來てかたづけ、やうな氣で、自分の仕事に立ち向ふほど無意味なことはない、と言つてゐる。遁げ腰、もしくは中腰の、ふらふらした、魂のはひらない態度で事にあたるとすれば、體驗は決して體驗にならないといふ意味である。一生に一度しか経験のできないことだから、寄港地・寄港地の女を買つて行くといふ茂吉の態度は、

たんにそれだけを取り上げれば、まさに上ノ山の若い衆流であると言ふべきである。しかしこれは茂吉の生活に對する態度の一つの現はれにすぎないので、茂吉の全態度はすべてこれで貫ぬかれてをり、茂吉の偉大も、實にこの、一生に一度しか経験ができないといふ覺悟で、眞剣に對象と取つ組み合つたことから來てゐるのである。

本を讀むにしても、歌を作るにしても、ものを書くにしても、あるひは何ごとかを經驗するにしても、これが一生に一度しか経験のできないことだと考へて立ち向ふとすれば、それに打ち込む、打ち込み方が違ふ。茂吉は論戰などする場合には、随分ひどい言葉遣をして相手を叩きつけたが、これもまた茂吉が、全人格の全重量を擧げて對象に打ち込んでいつたことを示すもので、かりにそこに上ノ山の若い衆が交つてゐたとしても、人はむしろそれを微笑をもつてやり過ぎし、その事理と氣魄とに敬服したに違ひない。

——かういふ意味のことを言はうとしたがしかし短い時間で話をするのではあるし、たんに人達の氣を悪くするに留まつたのではないかと思ふ。

## 幸田露伴先生

露伴先生がなくなつて、日本の寶庫が一つ失はれた。土橋君の努力で『七部集評釋』と『音幻論』とは取りとめたが、しかしこれはその寶庫の恐らく何十分の一にすぎない。大勢の人が手分けをしてプランを立て、先生の持つてゐるものを引き出してゐたら、先生からはいくらでも引き出せたはずである。震災前私自身さういふプランを立てようとしたこともあつたが、留學や何かで實現しなかつた。

先生にとつて道樂と研究とは一つのものだつた。釣を始めても、將棋を始めても、球突を始めても、先生は必ずそれに關するあらゆる文獻を渉り、研究し工夫することを怠らなかつた。多欲でしかもその一一の欲を決して粗末に扱はなかつた先生は、かうしていつのまにか博識無比になつてゐた。しかも先生の本の讀み方はきはめて藝術的で、平面のものを引き起して立體にし、具體的に一度自分の眼の前に活躍させた上で、自分の頭の中に疊み込むのだから、手間はあつたかかかるかも知れないが、先生の知識は生きて動いてゐる知識だつた。先生の談話に精彩があつた

のは、一つはその爲である。

先生は美しいものに對する情熱をいつまでも失はないでゐた、純粹な人間だつた。先生は意氣に感じる人だつた。これはあるひは先生が生粹の江戸ツ子だつたせゐであるのかも知れないが、しかし先生には毫も輕佻な風がなく、反對に先生は重厚で深沈だつた。これが先生と硯友社派とを分ち、一方からいへば先生の今日をあらしめた大きな理由になつてゐるとも言へるだらう。それにしても先生は一體に、好ききらひが實にはつきりしてゐたやうである。しかしそれは先生の倫理感覺の鋭敏から來るので、先生からきらはれる者は必ず贗物であり誤魔化しであり、醜であり不正であつた。それでゐる先生がいつもあどつしりと腰をすゑてゐたのは、先生に遅しい意志があつたからだと思ふ。實際先生の意志の遅しさは、小説だの考證だのを突き抜けて、もつと何か巨大なものを求めてゐたやうに見える。

先生の後半生は結婚生活に恵まれなかつた。戦争がまた内外兩面にわたつて先生を惱ました。しかし一粒種の文子さんに護られ、武見國手と小林勇との心遣ひを受けて恐らく先生は平和に、満足して息を引き取られたことと思ふ。

## 幸田先生の思ひ出

仙臺に行く前、仙臺に行つてからも、戦争になるまでは、岩波の御馳走で、私達はよく先生と一緒に食事をした。さういふ機会に私達は先生から、どこの何がうまいとか、何をどうして喰へばうまいとか、あれは何と何をどうして作った料理であるとかといふ話を、よく聞いた。先生はさういふことを實によく知つてをり、話は微に入り細を穿つて徹底的だつた。先生はいつたつたか雑誌で『南坊録』に出てくる茶會の料理を批評し、伊賀の上野でやつた芭蕉の月見の宴の料理を批評したことがあつたと記憶するが、これは恐らく外の人の容易く眞似のできるものではなかつたと思はれる。私達も食物には興味を持ち、一一の皿について、なんのかの意見は言ふが、先生ほど徹底した知識は持つてゐなかつた。のみならず注意も届かないので、端から忘れてしまふのである。先生はさういふ料理の一一を、自分の舌で味ははれない計りに具體的に感覺し、それを綜合してその料理の風趣の特殊性を導き出して來ることに、妙を得てゐたやうに思ふ。

ブルクハルトはギリシャ市民の食生活を研究して、ギリシャ文化史の基礎工事の一つとした。

料理に限らず、家具でも遊戯でも、研究の方向次第では、立派な文化史の一節となることができ。先生は別にさういふ目的で料理に關する知識を豊富にしたわけではなかつたのかも知れないが、しかし先生の月見料理の研究や茶料理の研究は、利休の感覺や芭蕉の感覺を躍如とさせることによつて、おのづから利休や芭蕉のわびやさびの世界を例證してゐるのである。——同じやうなことが先生の將棋の研究についても言へる。たしか『將棋雜考』といふ題だつたと記憶するが、先生は現在の日本の將棋と現在の西洋のチェスとが、元來どこから來たものであるかを、一歩一歩その源を追求していつて、結局それが中央アジアへ來て消えてしまふといふことを發見した。結局その發祥地は中央アジアであると推定するより外はないといふのである。しかもその中央アジアは世界文化の發祥地として、世界の學者の注意を集め、數十年來屢歐米の探檢隊を引き寄せてゐる土地であつた。將棋の方面からだけでは無論ないに違ひないが、先生は將棋の方面からだけでなく既に明治の後期に中央アジアに注意を向けてゐるのである。

先生の興味の中心はあるひは中華の文化にあつたのかも知れない。しかし中華の文化を十分に把握する爲には印度の文化の把握が必要になつて來るし、印度の文化を十分に把握する爲には中央アジアの文化の把握が必要になつて來る。中央アジアの文化の研究が、先生においてどの程度に進んでゐるか、私はほとんど知るところがないが、しかし先生が中華の易の卦とアッシリヤの

楔形文字との關係に注目し、縦のものを横にして、楔形文字の読み方を易の卦の読み方にあてはめようと苦心してゐられたことは、私自身先生からぢかに聞いたところである。その後その研究がどうなつたかを私は聞き洩らしたが、しかし先生が學士院會員に推薦された直後、世界言語の起源（だつたと思ふ）といふやうな題で自分の研究を纏め、就任記念の論文にしようと思畫されたことがあつたのは、あるひはその問題の展開だつたのではなかつたかとも想像される。しかしそれはつひに發表されなかつた。従つてこの方面での先生の研究が、どういふ経路を通つてどの程度の形に纏まり上がつてゐたかを、想像する手懸がない。ただここではつきり言へさうに思ふことは、これは先生の『音幻論』とは別のものだつたに違ひないといふことである。もし『音幻論』が何等かの意味でこれと關係があるとすれば『音幻論』はその基礎工事の一部分をなすはずのものだつたのだらうと思ふ。

先生の全集は、現在の情勢では、當分發行の見込は立たないに違ひない。しかし今のうち十分諸般の準備さへ整へて置けば、發行が可能になつた際に、萬遺漏のない理想的な全集を作り上げることが出来る。既に土橋利彦君が、先生の生前からその仕事に當つてゐたといふが、かういふ世界文化的な資料は、ぜひちゃんと整理して置いてもらひたいものである。先生が建立しようとした巨大なピラミッドは、つひに完成しなかつたが、せめてその設計だけでも、もしくはその

設計に必要な部品だけでも、あとに残すことは全集編輯者の義務であると思ふ。

もう一つ土橋君に御願ひして置きたいことは、先生の手帳の整理である。先生の手帳がどの位あつて、それに先生がどういふことを書き込んでゐるか、私は少しも知らない。しかし先生が手帳を離さず座右に置いてゐて、人から聞いたこと、自分で視たことの中から、必要と認められるものを一一その中へ書き込んでゐたことは確かであつた。春日がまだ日本橋で營業してゐた時分、先生が料理に用ひた材料とその調理法について、女中が言つた言葉を、手帳を出して丹念に書きとめてゐたのを、私はまだ覚えてゐるやうに思ふ。先生の御宅で、何かの話の序に、月の中の兎が持つてゐる餅搗杵のやうな杵を、田舎では今でも使つてゐる所があるといふ話が出て、先生は手帳には書いてあるが、どこで見たのか忘れてしまつた。しかし自分も確かに見たことがあると、その説を肯はれたこともある。先生は研究心が旺盛だつたしきはめて注意深い人だつたから、先生は何事でも自分の納得の行くまで、トコトンの所まで究め悉さなければゐられなかつた。勿論先生がどこでどう納得したかに問題があるのかも知れないが、しかし手帳は先生のさういふ方面に觸れて先生の性格を鮮かに照らし出す一つの光になるはずである。

先生から一度鱸釣の話聞いたことがある。利根川に船を浮かべ蚊帳を吊つてその中に寝て未明に起き出て、釣を始めるといふ話は、一種の趣があつて面白かつた。その時の話だつたか、そ

れとも別の話だったかは忘れたが、なんでも川には暖い水と冷たい水とが場所を異にし層を異にして流れてゐるが、日によつてその位置が變化する。それを心得てゐないと鱸オヤギのありが分からなうといふことも聞いたやうに思ふ。もつとも鱸がその暖い流の中にあるのか、冷たい流の中にあるのか、その中間にあるのかは、聞いたけれども忘れてしまった。——これは多少でも釣に凝つたことのある人なら誰でも知つてゐることなのかも知れない。しかし先生がウォートンだかを讀んで、きらきら光る小さいスプーンの幾つかを、輪になつた金物の小さな臺か何かに植ゑつけ、水中で綸を引くと、そのスプーンが水中でくるくる廻る仕掛になつてゐる釣を作つて、それで鱸を釣つたといふ話になつて來ると、先生は本を讀んでいろんな釣方を知る計りでなく、その原理を攫つかんで、更にそれを別なものに應用する爲に、いろいろ工夫することがはつきりして、特に私には面白かつた。

先生から將棋の話も聞いたことがある。これもうろ覚えできまりが悪いが、それはなんでも大橋宗桂だつたか、誰だつたか、強敵を相手に將軍の前で御前將棋をさす話だつた。宗桂の妻君が嚴寒の夜のまだ明けきらないうちに、井戸端に立つて水垢離セツリをとり、所天セツトの勝利を祈つたのだつたが、その甲斐もなく所天はたうとうその勝負に負け、それが元で死んでしまふといふのである。先生はその時、カタストロフイーに導く將棋の手まで話してくれ、私には雙方の鎬を削る有様が

眼に視えるやうで、實にドラマティカルで面白かつた。——先生は古來から殘されてゐる有名な棋譜を一一研究し、をかしい所は丹念に自分で駒を置いて見て、これはどうしても間違ひだといふものを發見し、それを一一正誤した上で出版することになつてゐたといふが、先生はさういふ譜を讀むにも、相手の頭の動きから心持の動きにまで自分自身を移入し、まるで自分がその將棋をさしてでもゐるやうに打ち込んで、ドラマティカルな讀みやうをしてゐたやうである。ゲーテは學校で歴史を教はる時、それを一ドラマティカルなものにして受けとり、歴史の時間が來るのを楽しみにしてゐたといふが、先生の本の讀み方は單に棋譜に限らず、すべてドラマティカルだつたやうに見える。一方から言へば、それだから先生は一つのことを研究し出すと容易く外には移れないのである。

先生は、重くれたもの、ぬめるもの、拘泥するものを嫌ひ、すつきりしたもの、いさぎよいもの、洒脱なものを愛した。しかし先生の中には、重くれたもの、ぬめるもの、拘泥するものがないはなかつた。これはしかし、先生の研究心の旺盛な所、凝り性の所、何でも中途半端で妥協してゐられない、トコトンまで押して行かなければ納まらない所、さういふ先生の長所と表裏一體をなしてゐるものである。それが氣に入らないからと言つて、それはさう易易ヤクヤクと先生から截り放せるものでもなかつた。先生にその事はちやんと分つてゐたに違ひない。それでもなほ先生は、

それを重くれたもの、ぬめるもの、拘泥するものとして、無理にもそこから離脱したい念願を持つてゐたやうに見える。先生に「蝶蝶にわが俳諧の重たさよ」といふ句があるが、これは決して上乘の句とは言へないけれども、しかしさういふ先生の内面を覗き込ませるものとして、貴重な資料たるを失はないと思ふ。勿論先生には、すつきりしたものの、いさぎよいもの、洒脱なものが、多分にあつたのである。それにもかかはらず先生は自分の「重たさ」に愛想をつかし、自分を更にすつきりした、更にいさぎよい、更に洒脱な人間にしなければならなかつたのである。

先生の中にはいろんな點で對立する諸性質があつて、先生が意圖するやうにはそれが、なかなか一つのものに綜合されることがなかつたのではないかと思ふ。一方から言へば、そのことが先生を刺激して、先生を安易な生活に陥れなかつたには違ひないが、一方から言へばそのことが、絶えず先生を苦しめ、また先生を孤獨にしてゐるのではないかと思ふ。——戦争になつてから、私は先生にお目にかかる機会がなかつた。従つて私には、先生の内面の消息を窺ひ知る便りがなかつた。もつとも負けじ魂の強い先生は、そんなことは人に話すべき筋合のものではないと考へてゐたに違ひないのだから、お目にかかつたとしても、それを先生が、私達に洩さうはずもないのである。しかし先生によくお目にかかつてゐる時分から、私には、先生がなんとなく淋しさうに見えた。しかしそれは奥に一種の嶮<sup>は</sup>しさを貯へた淋しさだつた。それが私には、自分一人のこ

とは自分一人で始末すると、堅く自分自身に誓つた人の、淋しさ、嶮しさでもあるかのやうに感じられてゐたのである。

もつとも先生の淋しさは、一つは子飼のいい弟子が一人もゐなかつたところから來ると言へないこともないかも知れない。例へば紅葉には鏡花があり、風葉があり、秋聲があり、その他いろいろの弟子があつたが、先生にはさういふ弟子が一人もゐなかつた。あてもたいていは人生の片隅で、ぱつとしない存在を續けてゐるやうな人達ばかりである。これはどこから來るのか、よく私にはわからない。しかし先生には昔から、あまり甘い、艶っぽい、柔かい所がなかつた。従つて所謂軟派の文學青年を牽きつける力がなかつたかも知れない。同時に先生は研究心が旺盛で、何をかくにも自分の納得の行くまでは諸般の準備を整へたものに違ひないから、かりに先生に弟子入りしたとしても、多くの弟子は先生の流儀に馴染むことができなかったに違ひない。よしまた先生の流儀に馴染んだとして、その人はむしろその研究の方が面白くなつて、小説なぞ書く氣がなくなつたかとも考へられる。のみならず先生には、例へば紅葉のやうな親分肌の寛大な、弟子を叱りとばしもする代りには、弟子を随分甘やかしてもするといふやうなところが乏しく、己れを持つことが嚴なやうに、他人に要求する所も多かつたのではないかと思ふ。しかしそんなことよりも何よりも、先生の旺盛な研究心と、その研究心に纏はる先生の悩みとが、先生を孤獨



にし、先生を喰しくした結果、むしろ先生自身が先生の周囲に他人を寄せつけない垣根をつくつたといふことが、その最も重なる原因になつてゐるのではないかと思ふ。先生は弟子がなかつたから淋しいのではなく、淋しいから弟子がなかつたのではないかといふのである。

(一一・八・一〇)

### 幸田先生から聞いたこと

上野山下の三橋のあたりに縁日の夜店が出てゐた頃だつたといふから、随分昔のことである。ある日は先生が谷中に住んでゐた時分のことではないかと思ふ。

先生がある日その夜店を冷かして雑沓の中をあるいてゐると、向うから來てどんと衝き當つた者があつた。とたんに相手は、なにをまごまごしてゐやがる、氣をつけると、怒鳴りつけた。先生にはその無法が許せなかつたので、相手を怒鳴り返した。すると相手は握り拳を堅めて、先生にばんとくらはせた。それが痛い痛くないのと言つて、大變な目に遭つたが、それがどういふ手を使ったものか、先生にはわからなかつた。ところがずつと後になつて、先生が拳闘の本を讀んでゐると、その手が出て來た。ははあ、あいつのあの時使つた手は、このアッパーカットといふ手だつたんだなと、先生は初めて氣がついたといふのである。

これは先生の本の讀み方の特徴を、如實に示してゐる。先生はどんな本でどんなことを讀んでも、一往はそのことと自分の體驗とを照し合せ自分の體驗の裏打のあるものとなしものとなし

つきり區別した上で、自分の肚の中に仕舞ひ込むのである。一方先生は、自分の體驗したものを實にしつかりと把握し、また實に大事に自分の中に仕舞ひ込んで、いつでも取り出して自由に使えるやうに整理してゐるのである。もつとも上野山下の先生の體驗は、心肝に徹して、忘れようとしても忘れられない體驗だつたのには違ひない。

仙臺に赴任する前に先生に會つたら、君、ついでがあつたら宮古といふ所へ行つて見玉へ、日本の古い港町の面影が残つてゐて感じがいい、遊廓なども古い格子造りのうちが列んでゐる、ほやのうまい所でもある、と注意された。御一新の當時、榎本釜次郎が軍艦に乗つて函館の五稜廓へ立て籠りに行く途中、宮古みやこに寄港したことがあるといふやうなことを小耳に挟んでゐたからゐで、私には別に宮古に關する知識は少しもなかつた。それで私は、たださうですかと言つたぎり先生と別れた。

仙臺に行つてから十年もその上もたつてからだつたと思ふ。私は東北地方に残存してゐるお神樂を見て廻る仕事を思ひ立ち、宮古にも特殊なお神樂があるといふことを聞き込んだので、遠野だの盛岡だののお神樂を見に行くついでに、宮古にも寄つて行く計畫を立てた。宮古に廻るについて、先生の言葉が有力な動因になつてゐたことは、言ふまでもない。

しかし行つてみると、宮古には日本の古い港町の面影なぞ何にも残つてはゐなかつた。昔の品川あたりの遊廓のやうなものを想像してゐた私は、そんな格子戸造りの家が立ち列んでゐるところではなく、マッチ箱にペンキを塗つたやうなカフェーからは、大きなラップをつけた蓄音機が、『島の娘』か何かを鷺鳴り散してゐるやうな體たらくに、すっかり失望してしまつた。つまり宮古も文化の風に吹かれてすっかり變貌してゐたのである。

しかし宿屋では、豫期してゐた通りに、ほやが出た。仙臺でも魚屋が時々ほやを持つて來るやうだつたが、私はほやといふものを口にしたことがなかつた。宮古で口に入れるのが、初めての經驗だつた。

しかしほやといふものは、初めての人間には、ちつともうまくないものである。うまくないどころではない、一種異様な臭氣があつて、たうてい我慢できるものではない。シンガポールやコロムボで賞美されるドリアンといふ果物には、人糞の臭氣があつて、これを初めて味ふ人を辟易させるが、しかし喰ひ馴れるととてもやめられないくらゐにうまいものなのだといふ。ほやもまさにそれである。初心者にはこれは、なんとしても好きになれる食ひ物ではなかつた。

一緒に行つた若い二人の助手は、二人とも一口ほやを口にするや否や、わつと言つて外に吐き出しに行つた。私も吐き出したのは山山だつたが、先生の手前、また先生から注意されてあす

このほや、はうまいはずだと、助手達にさんざ吹聴した手前、正直にそれを吐き出してしまふわけにいかない気がしたので、瘠我慢して呑み込んだ。さうしてこの味がわからないやうぢや食通になれないんだなどと景氣のいいことを言ひながら、二口三口續けて喰つた。助手達はげらげら笑つた。私は胸がむかむかした。

ほやの味はともかく、先生はあるひは先生の二十代か三十代かの記憶で、宮古は今でも味のあつた港町だと思つてゐたのではないかと思ふ。のみならず私が先生から注意されてからでも、既に十年以上はたつてゐた。大正末から昭和へかけての十年の日本の變化は大變なものである。私は宮古から先生に繪葉書を出して、宮古には安カフエーが幾軒もあつて、到る所で蓄音機がガアガア言つてゐますと、報告した。しかしほやのことはなんにも書かなかつた。あとで上京して先生に會つた時、この一狀を報告したかどうかは、覚えてゐない。

(二五・六・四)

## 吉右衛門事件

これは三十年ばかり昔の話である。

ある日Oが来て、Kの妹のT子が不良少年につけまとはれて困つてゐる。なんとか始末してやつてくれないかと言つた。どうして私に始末ができるのかと訊くと、その不良は吉右衛門をよく知つてゐるから吉右衛門に紹介してやると言つてT子に近づき、その後いろんなことを言つてはやつて来るのだが、一向吉右衛門に紹介する氣配もない。その男が吉右衛門を知つてゐるといふのは嘘らしい。どうかその男に會つて事の實否を糺ただした上、嘘だとわかつたら、それを潮にその男を追つ拂つてもらひたいといふのである。

Kの吉右衛門最良なことは、無論私も前から承知してゐた。しかし妹のT子までがそんなに吉右衛門最良だつたのだとは、私はちつとも知らなかつた。そんならさうと早く言つてくれれば、私から紹介するのはなんでもないことだつたのとは思つたが、しかし純潔な處女の羞恥からさういふことは私には言ひ出しかねたのだらう。そのためさういふことになつたのだとすれば、ま

ことに氣の毒なので、私は即座に引き受けた。

しかしそのあとでOの言ふことを聞いて、こいつは大變なことを引き受けたものだ、急にたじろぎ出した。その不良はT子に何か凄いことを言つて脅迫してゐるらしいのである。Oは萬一のことでもあるといけないから、用心のため次の間には柔道の三段だか四段だか、ともかく有段者を三四人控へさせて置くから、いざといふ時には聲をかけてくれれば、それが飛び出して行つて取つて押へる、決して御迷惑はかけないといふのだが、しかし刃物三昧になりかねない不良を相手に話をするのは、かりに危害がこつちに降りかかることがないにしても、少少迷惑だつた。私は氣が重くなつた。しかし一旦引き受けて置いて、刃物が出て來たので急に心變りするものも、これまた少少みともない。その時はまたその時のことだとあきらめて、ともかく定められた日時にKのうちへ行き、その男に會つて話をしてみようかと約束したので、Oは喜んで歸つて行つた。

しかし私はあんまりいい心持はしなかつた。その時分のことだから、その不良がピストルを持つてゐようとは思はなかつた。しかし恐らく刃物はいつでも懷に忍ばせてゐるに違ひない。話の成行次第でその男が急にいきり立ち、刃物で斬りつけて來たらどうすればいいか。柔道三段が三四人次の間に控へてゐるからと言つて、斬りつけて來たつとつさにその男をとつて押へてくれるのでなければ、私はどつかに手傷を負はなければならぬに違ひない。柔道も撃劍もやつたことの

ない私は、斬り込んで來る相手から身をかはしかはしして、助け船が出て來るまでの時を稼ぐといふやうな、器用なまねはできないのである。さう思ふと、次の間に控へてゐるといふ柔道有段者の存在意味は段段になくなつて行つて、私はたつた一人で、私よりははるかに強い無法者に立ち向はなければならなくなつたやうな、心細さを感じ出した。

それでも私はともかく、定められた日時にKのうちへ出かけた。

Kのうちには既にOが來てゐて、そこで面會するはずになつてゐる座敷に私を通し、相手はここに坐らせる、護衛はあすこの部屋に隠れてゐるなどと、この座敷の地理を精確に説明した上で、少しここで待つてゐてくれ、相手をすぐここへよこすやうに取計らふからと言つて、引き取つた。私はぼつんと一人八疊の座敷の眞ん中に坐つてゐた。次の間の襖から隙見ができるやうにでもなつてゐるのかと思つて、注意して見たが、さういふことはしない方針らしく、どの襖の合せ目も、キチンと重なつてゐるやうだつた。その代り次の間は實にシンとしてゐた。三四人も人がゐるとはたうてい想像できなかつた。人人は、すはと言へばすぐ飛び出して來られるやうに、心氣を凝らして待機してゐるのだらう。さうすれば何も隙見などをしてゐる必要はないはずである。ただ、これは私の氣のせむかも知れないが、座敷の空氣になんとか殺氣立つたものが感じられた。

私は徐ろに左手を懐ろに入れて、割に厚手の革の二つ折の紙入を取り上げ、毛のシャツの上から心臓部に當て、それをしつかり左の手の平一杯で押へた。かうして置けば、まづ一撃で心臓を刺し通される心配はない。いくら相手が兇暴でも、これしきのことでは一人の命を犠牲にしようとするほど無法であるとも考へられないが、萬一それほど無法だつたとしても、ここさへ一往護つて置けば、そのうちには次の間の人達が、必ずその無法者を取つて押へてくれるに違ひないといふのが、私の計算だつた。

そんなことを考へてゐるうちに、相手の男がOに案内されて、私の前へ來た。途端に私は左肩をぐいと引き、右の肩と右の膝とをその男の方に向けて、前に乗り出すやうな姿勢をとつた。これは私がうちで考へた姿勢ではなかつたが、心臓を保護したいと思つてゐた氣持が自働的に私にかういふ姿勢をとらせたものらしかつた。私はまあよかつたと思ひながら、初めて相手を見た。

相手は二十三四の青年で、そんな不良と言はれるやうな、險惡な相貌をしてゐる男でもなんでもなかつた。むしろ私の前に出ておどおどしてゐる、善良な所のある人間だつた。——もつともこれはあるひは座敷の空氣だの、私の姿勢だのから、ただならぬ氣配を感じた結果、平素とは違つた表情がこの男の顔に出たものかも知れない。それはいづれにしても、これなら何も心配することは無いといふ氣が、私にはし出した。

私はしばらく相手の顔を見て黙つてゐたが、いつまで黙つてゐても仕方がないので、僕は吉右衛門と親しくしてゐる人間である、君は吉右衛門を知つてゐるといふが、ほんとかと、相手に質問した。

すると相手はぶるぶる慄へ出した。さうして慄へながら、知りませんと正直に答へた。私はほつとした。と同時に私はこの青年に、ある好意を持ち出した。T子やKがおびえてゐるほど、この青年は不良ではない。T子がおびえてゐるのは、T子が初めこの青年をあまりに信じすぎたところから來るのに違ひない。Kは恐らく直接にこの青年には會つてゐないのだらう。妹の眼と妹の心臓とを通してのみしか、この青年を見たり感じたりしてゐないのだらう。さう考へると、私はこの青年の誤解されてゐるのが、少し可哀想でもあつた。

T子さんは純眞だから、君が會はせてやるといふのを眞にうけて、吉右衛門に會ふのを楽しみにしてゐる。君はそれを多さにしてT子さんに近づかうとしてゐるのかも知れない。しかしT子さんは吉右衛門に會ひたいので、君に會ひたいのではない。T子さんは、君が會はせる會はせると言つて、一向吉右衛門に會はせないで、今ではむしろ君に會ふのを厭がつてゐる。しかも君には事實はT子さんを吉右衛門に會はせる資格はないのだから、この際君はT子さんと接觸することをやめてもらひたい。その代り、といふのはをかしいが、君が今後このうちに決して出入り

しないといふ約束をしてくれるやうだつたら、兄さんに頼んで、いくらかもらつて上げてもいい。  
——そんな意味のことを私は話した。相手は一ハハイと言つて、私の言ふことを聞いた。

それで私は別室でKに會つて、あの男は今後このうちに出入しないといふから、この際五百圓出してやつてくれないかと言つた。Kはそんなにやる必要があるのかといふやうな顔をしたが、しかしまあ黙つて出してやつてくれ玉へと言つて、私はその男にそれを渡した。吉右衛門を知つてゐるなどと嘘をついたのは悪いとしても、かりにこの男がT子を純眞な氣持で愛してゐて、何等かの方法でT子に接近したいと思つてゐた矢先、T子が吉右衛門に會ひたい會ひたいといふもので、不圖した出來心からさういふ嘘をつき、それによつてT子の歡心を得ようとしたのだとすれば、その嘘はそれほど憎むべき嘘でもないと思はれたからである。

その後その男は、私に約束した通り、びたりとT子の所へは來なくなつたといふことである。私にはKが純眞であり、T子が純眞であり、相手の男にも純眞なところがあつた爲に、反つてかういふ騒ぎが起つたのだと思はれない。

それにしても吉右衛門がだしに使はれて、かういふ事件が全國にいろんな喜劇だの悲劇だのを惹き起してゐるのかも知れないのだといふことを考へると、何だか少し怖ろしい氣がし出した。當の吉右衛門は、さういふことがあつたのだといふことさへ知らないのである。従つて吉右衛門

はそのことに對して責任の持ちやうがないのである。しかもさういふことがかりに屢吉右衛門の名を用ひて惹き起されるとすれば、どうしやうもないだけそれだけ、餘計怖ろしい氣がするのである。

## 新しい『紙治』

これは二十年くらゐ昔の話である。

——ある日私はKといふ同僚からSといふ藝者についてどう思ふかと訊かれた。私はSの姉のGといふ藝者のことは割によく知つてゐたが、Sにはたまにしか會つてゐないので、格別の知識は持つてゐなかつた。しかしSには好意を持つてゐたので、あの女のことには僕よくは知らない。しかしあの女が誠實な女であるといふことだけは、僕保證することができる。あの女は男をだます女ではない、男からたまされる女である、と私は答へた。さうかと言つてKはその場を去つた。

その後私は、KがSに大變執心で、始終料理屋だの待合だのに入り浸つてゐるといふ噂を聞いた。その前にSは、別の同僚のFがつけ廻してゐるとか、Fのものになつてゐるとか、さういふ噂を立てられてゐた女だつた。あてになるやうであてにならない、またあてにならないやうであてになるのが、噂である。どつちの噂もどの程度の眞實に觸れてゐるのか分らないが、ともかくKとFとが鞆當きよあてを始めなければいいかと、私は考へた。しかし私には別に好奇心もな

つたので、その結果がどうなつたかについては、誰かに聞き糺してみようともしなかつた。

そのうちKがやつて来て、實はFさんから呼びつけられて、ひどく叱られましたと報告した。どうも人の女をとるなんてえのはけしからん、これは小宮なんかさういふことをしてみせるのがいけないんで、禮儀にはづれてゐると、Fは言つたのださうである。Fとさういふことで一度も交渉のなかつた私としては、引合に出されて迷惑千萬だつた。Fと私とは顔寄せの大きな宴會か何かでない限り、一度も一緒にさういふ場所に入出したことはなかつたのである。のみならず自分がどの藝者かに興味を持つたからと言つて、その藝者の廻りに輪をかけた上で、この輪の中に誰も足を入れてはいけないなどといふのは、野暮どころか無知の骨頂こつちやうである。FとSとのこれまでの關係はどうだつたのかは知らないが、君とSとができた以上、Fは明白に失格したんだから、君は大手を振つてSと親しくなり玉へと、私はKにけしかけた。

しかしKとSが親密の度を加へて行くにつれて、私は段段心配になり出した。家庭の折合もよくなるに違ひないし、からだにも障るに違ひないし、學問の妨げにもならないとは限らない。いいかげんにし玉へと言ひたいのはやまやまだつたが、しかしKも今に自分で氣がついて、自分で調節する氣になるのに違ひない。さういふ潮時を見計らつて何かいふのでなければ、反つて逆効果を惹き起すばかりである。さう考へて、私は黙つてゐた。

そのうちKの妻君が死んだ。妻君が死ぬとともに、Kは更にSと深くなつて行つた。

Kの妻君はKの生家に近い色町で、藝者に出てゐた女なのださうである。Kがなんでもかんでもあの女でなければならぬといふので、初めは絶対反対だつた父親もたうとう折れて結婚させることにしたのだといふが、Kは大きな米穀問屋に生れて我儘氣儘に育てられたらしいので、あるひはそんなこともあつたのかも知れない。ただ私はその妻君とは、ほとんど顔を合せたことがなかつた。従つて私はその妻君がどんな人間であるのか、全然知らなかつた。

噂によると、妻君はKとSとの仲を苦に病んで、薬を飲んで死んだのださうである。それを聞いた時、私はKに會つて實否を糺した上で、自分の考へる所を開陳しようかとも思つたが、しかしもうすんだことではあるし、頼まれもしないのに他人の祕密に觸れるのも、少し出過ぎた嫌ひもあるし、第一毒を仰いだといふことも、その原因がKとSとの深い仲にあつたのだといふことも、すべて噂に過ぎないのかも知れないのだから、私は知らん顔をして様子を見ることにした。

しかし若しそれが事實だつたとすれば、私は妻君の運命に同情するに堪へなかつた。一度さういふ勤めをしたことのある人間は、大抵はさういふことにひどく敏感なものである。氣にし出すと、頭の中に自分の視聽みきしたあらゆる場合の幻像が浮かんで来て、それがいろいろに組み合わせられ、それが直ちにKとなりSとなつて、妻君を責め苛んだに違ひない。Kの妻君がその幻像に

悩まされた結果、かりに毒を仰ぐ氣になつたとしても、それは少しも不思議ではないだらう。さう思ふと私は、妻君の心の痛みを自分の胸にぢかに感じる氣さへすることもあつた。

そのうちKは入院することになつた。Kは前から胸に病を持つてゐたのが、入院して療治してもらはなければならぬほど、急に悪くなつたのである。それに對して、妻君の罰が當つたのだといふ者もあつた。罰が當つたのかどうかは、私には分からない。しかし妻君の死はKの心に激しい衝撃を與へたに違ひない。もしまたその死因が噂通りだつたとすれば、その衝撃は一層激しかつたに違ひないし、それまでの家庭生活でもKの精神を擦り減らすものだつたに違ひない。それがやりきれないので、始終Sに逢ふことになつてゐたとすれば、これはまたKの肉體と精神とを擦り減らさずには措かなかつたらう。Kの健康が急に害はれたのも、きはめて自然のことだつたと言つていい。

入院したKはいつまでも退院を許されなかつた。當然Sは座敷著姿で、Kの所へ見舞に來たりすることになつた。少し具合がいいと、Kはこのこ待合だの料理屋へ出かけて行きさへもした。それがいつまでも續くので、自然醫局の問題になり出した。あんな生活をしてゐるのでは、折角治りかけてゐる病氣も、すぐぶり返してしまふ。あの關係を一往切つてもらふのでなければ、たうてい責任を持つてKを引き受けることができないといふ、強硬な意見まで出て來た。



ある日Kが使をよこしたので病院に行つて見ると、Kは醫局の意見のあらましを説明した上で、どうかSに會つて因果を含めて、自分との仲を切るやうに取計らつてくれと言ふ。しかし私は言下にそれを斷つた。そんな話は、他人が仲にはひると、必ずうまく行かない。仲にはひつた者がひつこみがつかないやうなことも生れて来る。これは君がSを呼んでよく話し合つた上のことにすべきだといふのが、私の意見だつた。

しかしKはなかなか初一念を翻さなかつた。實をいふと、私がSとかういふ仲になつたのも、實はあなたの證言があつたからである。その意味で、あなたは二人の爲には結びの神だと言つていい。今二人が切れなければならぬ事情ができた際、二人の縁を切つてくれるものも、従つてあなたより外にはないのだとまで、Kは言ひ出した。つまり私がKに、Sは男からたまされても男をだます女ではないと嘗て言つたことがある、その一言でKはSを自分の相手にする決意を堅めたのだから、その跡始末も私にしろといふのである。

私の何氣なく言つたことがそれほど二人の——むしろ三人の運命に強い影響を持つたのかと思ふと、空怖しい氣にもなつたが、しかしさうまで言はれてそれを引き受けないのも、少し義理が悪い。のみならず常人同士は元元別れたくないのに別れなければならぬのだから、二人で話合なんかできるものではないのかも知れない。さう思つて私は、結局その役目を引き受けた。

Sは忠實な女だから、事を分けて話をすれば、それがどんなに自分にとつてつらいことだらうと、必ず引き受けてくれるに違ひないといふ氣持が、私の肚の底にあつたせゐでもあつた。

二三日たつて私はSに會つた。さうしてKの健康のこと、醫局の意見のこと、その他を精しく話した上、どうかこの際Kの爲だと思つて、思ひ切つて身をひいてくれないかと頼んだ。Sは私の最後の言葉を聞くとひとしく、わつと言つて突つ伏したまま、いつまでも泣き止まなかつた。私はSがいぢらしくなり、抱き起してハンケチで涙を拭いてやりたい氣持にさへなつたが、しかしここで無闇に同情してゐては、せつかくの役目が勤まらない。それでSが一しきり泣き止むまで待つてゐて、また諄諄と、さうするより外Kを助ける道はないことを、説き明した。

それがどの位の時間を要したかは、分からない。ともかく最後にSは、よく分かりました、それではKさんにお目にかかることは、今後思ひ切ることにいたしますと答へた。さういふ返事をさせることは、決して嬉しいことではなかつたが、しかしありがたいことではあつた。

翌日私はKを訪ねて、Sが承知した旨を報告した。しかるにそれから二週間ばかりたつと、またSが病院に行き出したといふ噂が、私の耳にはひつて來た。

あんなにきつぱり私に約束して置きながら、また行き出したのかと思ふと、ひどく齒痒い氣が

したが、しかしそれがまた人情の弱さでもあるので、已むを得ないことなのだらうとも思ひ直した。しかし一方では私は、引つ込みがつかなくなつてしまつたのである。しかしSを呼んで聴き糺すのも可哀想だし、Kに苦情を持ち込むのも未練がましい。これは黙つて引つ込んでゐるより仕様がなかと考へたので、私はSにもKにも會はうとしなかつた。

その後Sの姉のGに會つた時、偶然の機會から、その間の事情がはつきりした。これはSが悪いのではなかつた。悪いと言へば、Kが悪いのだつた。私と約束した日以来、Sはそれを嚴格に守つて、病院に近よらなかつた。するとそのうちKから度度呼び出しの電話がかかつて來た。あんまり幾度もかかるので、已むを得ず病院に行くと、KはSになぜ來ないのだと詰つた。Sは私に約束したのだし、その約束は結局あなたから頼まれた結果なのだから、それで來なかつたのだと答へた。これは理の當然なのだから、Kも返す言葉がなかつたのに違ひない。それでも二人でいろいろあだかうだと言つてゐるうちに、たうとうKは、お前は小宮の言ふことは聴いて、おれの言ふことは聴かないのかと、Sに詰め寄つたのださうである。さう言はれればいくらSだつて、Kの言ふことを聴くより仕方がない。それ以來Sはまた續けて病院に行くやうになつたのだといふのである。

これで私の顔は丸つぶれになつた。しかし私にはKの氣持もSの氣持も手にとるやうに分かる

ので、格別腹も立たなかつた。といふよりも二人が、弟や妹のやうに、何か可愛い氣がした。私はこの戯曲で『紙治』の中のおさんの役と孫右衛門の役と、二役を一人で勤めてゐるやうな氣さへした。

その後Kは一時退院を許されて、Sと一緒に世帯を持つたが、またすぐ悪くなつて入院した。今度の家は病院から割に近い所にあつたので、Sは毎日三度三度の食事をうちで作つては、それを病院に運んだ。

それほどSが丹精した甲斐もなく、Kは戦争があまり熾烈にならないうちに死んでしまつた。Sのその病院に通ふ道が、丁度私のうちの門の前を通ることになつてゐたので、夏の朝など私が早く起きて門内の松原を散歩してゐる時に、Sが髪をひつつめに結び、洗ひ晒しの浴衣を着て、お重を提げて門の前を通つて行く姿をよく見かけた。熾烈にはなつてゐなかつたとは言つても、戦争中のことである。Sは三度三度に栄養食をつくるのに、さぞ苦勞したことだらうと思ふ。

Sは私のうちの門の前を通る時には、必ず眼を伏せて通つた。私もSの顔を見るのが氣の毒なので、その時刻にはなるべくそこいらでうろろしてゐないやうに心がけ出した。同時に私は、さうしてなりふりを構はず一所懸命にKの爲に盡してゐるSに、心からの感謝を贈る氣持にならざるを得なかつた。

Kが死んでから、もうかれこれ十年になるだらう。Kのことを思ひ出すと、必ずSのことを思ひ出す。Sのことを思ひ出すと、眼の前に浮かんで来るのは、例へば晴著姿のSではなく、必ず髪をひつつめに結つて、洗ひ晒しの浴衣を着たSの姿である。それはまさに忠實そのものの姿だった。Sはその後再婚したとかいふが、幸福に暮してゐるかどうか。Sには私は、あの別れ話の日以來、Kのお葬ひの日に一度會つたぎりである。

### 『忠臣藏』の臺詞

昔、私が大學を出たての時分のことだから、四十年近い昔の話である。私は若い外人學生のEと知合になつた。Eはロシアの生れで、ベルリンの東洋語學校を卒業して、東京の大學の國文學科に入學してゐるといふことだった。

日本に來て日本語を勉強した上で日本文學を研究する爲には、どうしても日本の家に住んで日本の女中を使つて日本流の生活をしなければならぬといふので、Eは彌生町に二階二間・下四間のしやれた日本家を借り、日本の女中を使ひ、時時は日本服を着たりして生活してゐた。もつとも食事は女中に指圖して洋食をつくらせてゐたやうだった。

Eのお父さんはミリオネアだといふことだった。なんでもペテルブルクの有名な食料品店で、個人で日本橋の三越くらゐなうちを所有してゐて、そこへ行けば世界中のどんな珍しい食料品でもあり、例へば日本の柿のやうなものさへその店には列んでゐるといふことだった。さう言へばEのうちの名前は、トルストイの『アンナ・カレニナ』の中にも出て来る。そこへ新しい牡蠣

がついたとかなんとかいふのである。

Eは森田草平の妻君のところへ行つて、踊の稽古をし出した。森田の妻君は藤間流の名取だった。私はいいかげんでやめるのだらうと思つてゐたら、Eはなかなか熱心で、毎週きまつた時間にきちんきちんと稽古を受けるのみならず、仕舞には女の著物・襦袢・帯・その他一切の必要用品を揃へた上、島田の鬘までも造らせて、それでお浴ひに出るといふ凝りやうだった。Eは外人としては小柄の方で、色も白かつたから、和服の紋附・袴でりうときまると、それが大變によく似合つた。しかし鬘をかぶつて女装すると、いやに大女になつてしまふので、あまり見いい風態ではなかつた。それでも當人は大真面目で、口三味線か何かで、女装で稽古をして見せることもあつた。Eは先代の羽左衛門が最眞で、よく辨天小僧の假色をつかひ、一度辨天小僧がやつて見たいなどとも言つてゐた。

Eは一二年東京にゐるうちに、實に日本語がうまくなつた。Eは下谷だの柳橋だのへ出かけて行つては、藝者を相手に洒落をとばした。さういふところでは、どこでもEは大もてだつた。

Eは彌生町に家を持つ前には、湯島かどこかに間借りをしてゐたといふことだつた。その主人はどこかの新聞社に勤めてゐるのだといふことも聞いた。Eがそのうちで自分用として使つてゐた女中が、現在の女中で、つまりEは、その女中をつれて彌生町に一戸を構へたわけだつたの

である。

ある日Eが私のところへやつて来て、君に頼みたいことがある、どうか是非助力してもらひたいと、眞顔になつて言ひ出した。實は自分は前にゐたうちの妻君と關係がある。自分はこれまで彼女の爲に度度金を出してやつてもゐれば、贈物を贈つてもゐる。それはいいが、彼女は近ごろになつて、自分と夫婦になりたいと言ひ出した。ついでには郷里の役場へ行つて現在の亭主のところから籍を抜いて來たい。それにはいろいろ金がかかるから、この際五千圓出してもらひたい。五千圓出してくれさへすれば、綺麗に籍を抜いて來て、あなたと天下晴れて夫婦になることができると言ふのだが、五千圓は大金である。大金でもそれがほんとなら勿論出してもいい。しかし自分にはどうもほんとは思はれないふしがある。君、當人に會つて、それがほんとだかうそだかを見極めた上で、もしうそだとわかつたら、なんとか始末をつけてくれないかといふのである。四十年前の五千圓は、事實大金だつた。しかし私にはその女の言ふことが、ほんとだかうそだかを突きとめる自信がなかつた。それで私は法科の友人でIといふのを頼んで、一切をその男に任せることにした。Eはそれを諒承して喜んで歸り、翌日だつたかにIはEのところへ乗り込んで行つた。Iはその女を彌生町へ呼び寄せて、彌生町で話合を試みようといふのである。Iは通人を以て任じてゐた上に、法律のことに精しいのだから、いざといふ時には相手を取つて押へ、

有無を言はず問題を片づけてくれることができると、私は期待した。

しかしIはEのうちに乗り込んだきり一向歸つて來なかつた。さうして時時私のところへやつて來ては、二人のこれまでのいきさつを話して行くのではあつたが、しかし當人の感情が眞實であるのかないのかといふ、かんじん肝腎の問題となると、Iの調査は少しも進捗しんちよくの跡を示してゐなかつた。女がEから金を巻き上げる爲に、そんな筋書を書いたものに違ひないといふ嫌疑は濃厚ではあつても、Iはただそれを言ふだけで、その廻りをどうどう廻りしてゐるのに過ぎない。所謂キメ手は、もしくはキメ手の手がかりになりさうなものは、一つも捕つかへられてゐないのである。

Eはあるひはそれがじれつたかつたのかも知れない。私のところへやつて來て、Iさんもいいが、毎晩鯛チリかなんかをつくらせては酒ばかり飲んでゐる。それは別に困りもしないが、しかし困るのは酒を飲んだあとの尿のお蔭で、便所が恐しく臭いことである。これはたうていやりきれない。Iさんはやめて、君が直接に衝に當つてくれないかと、言ひ出した。それはまつたく迷惑だつたに違ひない。のみならず自分が相手の爲に働いてやるといふことを恩に著せて、相手のうちに泊り込むのみならず、毎晩チリで酒をたらふく飲むなどといふのは、悪趣味である。一往Iから話を聞いた上で、自信はないが、なんとか自分でやつて見ることにするから、少し待つてゐてくれと言つて、私はEを歸した。

Iに會つてEの言葉を傳へると、Iは憤慨しだした。自分があすこに泊り込んでゐるのは、情報を得る爲である。その爲には僕は非常な危険を冒して、あすこの女中を手に入れたりさへしてゐる。それにもかかはらずEがそんなことをいふのは、實にけしからんといふのである。非常な危険を冒して女中を手に入れたなどといふのは、馬鹿げてゐる。それで結果が上げればまだしもであるが、一向結果は上がつてゐないのだから、更に馬鹿げてゐる。それで私は、これからさきは僕が引き受けるから、君は手を引いてくれ、さうしていついかに相手の女を彌生町に呼んで置いてくれと、Iに頼んだ。Iは承知して歸つて行つた。Iの言ふところによると、相手の女といふのはとてもいい女なのださうである。かういふことさへなければ、自分が相手になりたいく、らゐだと、Iは言つた。馬鹿もいいかげんにしろと、私は言つた。

Iと同じやうに、私もEが女からだまされてゐるのに相違ないと、想像してゐた。しかし女がもしなんと言つても、私はEさんを愛してゐるのだから、どうか一緒にしてもらひたいと言ひ張つたら、どうしたものだらう。それなら亭主を呼び出すより外はない。しかしさうなつて亭主が怒り出し、新聞に出すとも言つて嚇かして來るとすれば、Eは困つてしまふだらう。私は内心びくびくしながら、その日にEのところへ出かけて行つた。女はもう來てゐるといふことだつたが、私は先づ二階のEの書齋へ上がつて行つた。

Eはひどく心配さうな顔をしてゐる。私はまったく自信はなかつたが、しかしあまり氣の毒なので、まあどうにかなるから心配しないがいい。しかしことによると五百圓くらの金はやる必要があるかも知れない。どうかそれだけ包んで置いてくれ玉へと言つて、私は下へ降りて行つた。

女は茶の間の長火鉢の横に坐つてゐた。見ると豊麗な肉體を持つた、清長タイプの美人である。Eが好きなのも無理はなかつたし、Iが相手にしたいと言つたのも尤もだと思はれた。しかしそんなことを考へてゐる場合ではないので、私は黙つて長火鉢の前へ坐つて、早速用談にとりかかつた。しかし女は別れるなどは決して言はなかつた。自分はEさんを愛してゐる、どうか友達甲斐に骨を折つて、是非一緒にしてくれと言つて、さめざめと泣き出しさへするのである。これには私は困つた。仕方がないから、女の泣きやむまで私は黙つて待つてゐた。

すると女は立ち上がつて、隣の部屋にはひつて行つた。何をしに行つたのかと思つてゐるうち、女は歸つて来て、私の心はこれです、これをEさんに差し上げて下さいと言つて、自分の髪の毛をぶつりと切つた束を、私の前に疊の上に押しやつて、またわつと泣き出した。一瞬私はどうしていいかわからなくなつた。

とたんに私の頭に閃めいたのは、『忠臣藏』のおかやの臺詞だつた。おかるが身賣をして祇園に行くについて、おかやが「髪は切つてもものびるもの」決して指を切つたり爪をはがしたりして客

に渡すものではないと、注意する臺詞である。それを思ひつくと、私は急に元氣になり、にやにやしながら、Eに渡すには渡しますが、しかし『忠臣藏』に「髪は切つてもものびるもの」といふ臺詞があります。どうせ眞實を見せて下さるのなら、もつときつとした證據を見せて下さいと言つた。女はなんにも言はなかつた。また身動きもしなかつた。

私は二階へ上がつて行つてEに五百圓の紙包を出してもらひ、下へ降りて、どうかこの問題はこれでかたづけさせて下さいと言つて、それを女の前に差し出した。女はなんにも言はなかつた。私はまた二階へ上がつて行つてEに、これでかたづいた、安心してまへと報告した。私が歸る時には、女はもうゐなかつた。さうしてそれきり女は彌生町へ來なくなつた。

女は恐らくEを愛してゐるといふ一本槍で戦ふつもりで、最後の手段として髪を切ることをたくらんでゐたのだらう。しかし私がいつまでも愚圖愚圖してゐるので、最後の手段をとるべき時機が來たのだと考へ、一間にはひつて髪を切つて來たのだらう。ところが實はそれがいけなかつた。動いたので隙ができた。髪さへ切らなかつたら、私もおかやの臺詞を思ひ出すこともなく、従つて私はいつまでも途方にくれてゐなければならなかつたに違ひない。眞實と虚偽との岐れ路が自然に導かれてはつきりして來たのだと思ふと、この女の心理の動きは面白い。

Eは今アメリカに住んでゐる。四十年も昔のことを、果してEが今だにおぼえてゐるかどうか。

無論私はEに精しいことは話さなかつたから、もしこれを読むことがあつたら、あるひは驚くかも知れないと思ふ。

それにしても昔の女は、随分單純なところがあつた。

(二五・九・二三)

## アメリカと日本

アメリカの病院ではこのごろお産がすむと、二、三日ですぐ産婦を起してしまふ方針をとつてゐるのださうである。産兒を育てるのにも専ら母乳を用ひさせる。やむを得ず牛乳やミルクで育てる場合でも、産婦は必ず産兒を自分で抱いて、自分でそれを産兒に飲ませなければならぬ。時間も三時間とか四時間とか間隔をおいて規則正しく授乳させるといふのではなく、乳兒が欲しがりさへすればいつでも授乳させることになつてゐるのだといふ。

かういふ方針の變化がどこから來てゐるものか、私にはよくわからない。しかし少くともこれは、在來の日本のやり方である。子供に自分達のことをパパ・ママと呼ばせない家庭では、たいしてい今日でもこのやり方を用ひてゐる。それをアメリカが眞似たかどうかは、確かな證據がないから斷言しかねるが、しかし理論的にも實際的にもこのやり方がいいといふことになつたからこそ、アメリカではこの改革が行はれつつあるのだらう。

元來アメリカでは親子の結びつきが、日本ほど密接ではない。殊に夫婦が社會組織の單位とな

り、家庭の中心となつて、家庭内のすべての出来事は夫婦の意志によつてのみ決定されるという制度が確立してゐる國では、その中心である夫婦の、両親も子供も、ある場合には頭からその意志を無視されるのも、當然のことといはなければならぬ。ただそこに人情といふ潤滑油があつて、適宜にその間の摩擦を調節するから、たいていはお互が他人よりもつと冷たい關係にならないですむのである。

アメリカでは親子の關係が現在どう進展してゐるか、私には具體的なことは分らない。しかし現在のアメリカでは夫婦關係が、對等から對立へと進んで行く傾向が著しいといふから、親子の關係もあるひは好ましからざる關係の方へと——すなはち人情が段段薄れて行く方へと——進展しつつあるのではないかと思はれる。もしさうだとすれば、この育児の方針の變化は、人情をいくらかでも濃厚にする目的を持つてゐるさうな氣がする。乳房を吸ふといふこと、もしくは乳房を中心とする親子の接觸は、きはめて小さなことのやうではあるが、しかし實は母と子との關係を切つても切れない人情でつなく、大きな要素になつてゐるはずだからである。

日本の兵隊は戰場で、必ず母の名を口にして死んでいつたといふその心理を知つてゐたから、軍部は「軍國の母」といふ言葉を作り上げて母に働らきかけ、輕輕しく人命をすてて來るやうにと、母に子供を激勵させた。その子供に對する母の愛と母に對する子供の愛とは、無論外にもい

ろいろ理由はありうるが、その最も大きな理由となるものは、乳房によつて結ばれた雙方の關係から來るはずである。アメリカの日本研究は、そこまで日本人を追究して、現在動きつつあるアメリカの趨勢に、遠大な對策を講じようとしてゐるのかも知れないのである。

新憲法によつて日本には家がなくなつて、夫婦が家庭の中心となつた。その夫婦は對等の權利を持つことになつてゐる。それは結構である。しかしその結果日本も段段アメリカの跡を追つて、夫婦が對立し親子が對立し、人情の潤滑油も何もなくなくなり、家庭がただ食つて寝るだけの場所になり、一つの屋根の下に住む人間の心がてんでにばらばらになつてしまふ、といふことに萬一なるとすれば、それはまことに心細いことである。

かりにアメリカがその點で日本の眞似をしてゐるとする。日本はすべてにアメリカの眞似をしてゐる。今また日本がアメリカの新しい育児法を學ぶとすれば、日本とアメリカとは、丁度一廻り違ふことになる。ただ年齢の一廻りは十二年の相違に過ぎないが、この一廻りは五十年の相違だか百年の相違だかわからない。日本はこれから夫婦だの親子だのが對等となつた上で對立し、お互にさんざ苦しんだ揚句でなければ、また元の所へ歸る氣になれないに違ひないからである。



## ふところ手

ラヂオの報告によると、アメリカの都市ではパンを一きれ一きれに切り、そのままパン焼器にかけられるやうにして各戸に配達するのださうである。そのパン焼器を見ると、一度に二きれづつかかるやうになつてをり、電流の加減をすれば、ほんのり焼けたのとよく焼けたのと、ふたとほりに焼けるやうになつてをり、しかも注文通りに焼けるとそのパンは、ひとりでにひよこりと飛び上がるやうになつてゐる。便利なものである。

アメリカの兵隊の携帶食糧けいたいじよくりやうといふのをもらつたことがある。これにはいろんな種類があつて、一一別なカンにはひつてをり、肉もあれば野菜もあり、ビスケットもあればクラッカアもある。食鹽もジャムも、チョコレートも砂糖も、あらゆるものがそろつてゐて、それが皆相當うまいのである。これはこつちの味覺が戦争のおかげで低下してしまつたせゐるかも知れないが、それにしてもこれだけあれば、恐らく誰でも一往は楽しく食事することができると違ひない。アメリカでは獨身だの新婚の夫婦だのは、カフェ・テリアのやうなものを利用しなければ、かういふ携帶食糧

糧を利用して、毎日何時間かの時間と努力とを節約してゐることだらうと思ふ。これもまた、便利なことである。

もちろん便利であるといふことは、たいてい金のかかることである。今日の日本人は大部分は、一きれ一きれのパンを買ふ餘裕はあつても、パン焼器を買ふ餘裕や、ましてかういふ携帶食糧で三度三度を賄ふ餘裕など全然持つてゐないと言つていい。それどころか今日の日本の富は、アメリカでは五人に一臺とか十人に一臺とかの割で自動車が行きわたつてゐるといふのに、電車に乗りバスに乗り汽車に乗るのでさへ、時刻によつては、命がけで乗らなければならない状態にあるのである。今日の日本人は、いくら便利なものがあつても、それが相當金のかかるものである限り、それを利用することができず、従つてしないでいい餘計な苦勞をしなければならない。これも無謀な戦争を始めたおかげである。

185 ふところ手  
しかし便利であるといふことも、よしあしであると言へる。便利はある意味で、人を怠け者にするものだからである。便利であることの極致は、人が懐手をしてゐさへすれば、なんでもこつちの注文するものが、向うからひとりでふところの中に飛び込んで來るといふ點にあるとも言へるからである。ブリュウゲルの畫に、腸詰だの焼鳥だのが天から降つて來たり地から生えたり、酒が泉となつてわき出たりしてゐる中で、人間は寝ころんでそれを飲み食ひしてゐる『歡樂郷』

と題する畫があつた。それは單に口腹の欲を充たすことだけを念願とする、十七世紀の庶民の夢を描いたものに過ぎないのかも知れないが、しかし便利はとかく人を誘つて、かういふ夢だけを實現させたがる傾向があるやうに思ふ。それだけでは、便利も意味がない。便利に意味のあるのは、便利になつて節約された時間と精力とが、文化的な創造的な仕事に集中される場合である。ただ文化的な創造的な仕事そのものには、便利といふ言葉はないとも言へる。懷手をしてゐても、注文するものはひとりでも向うから懷に飛び込んで來ないのである。むだでもなんでも、自分で苦勞し、自分で工夫し、自分の道をきり拓いて、自分の注文するものを手に入れるより方法はないのである。

もちろん學問の世界でも藝術の世界でも、修行に、便利がある程度は物を言ふ。しかしその程度を越せば、それから先き物を言ふのは、素質と努力とである。ここでは自動車がないこと、携帯食糧がないことを、必ずしも歎くにはあたらない。

## ドイツ人

私がベルリンへ行つたのは、一九二三年——ドイツが第一次大戦に敗れて四五年たち、マルクの暴落でドイツが塗炭の苦しみに落ちてゐる最中だつた。食料品店のショウキンドウに列んだ旨さうな海老をガラス越しにいつまでもじつと眺めてゐる労働者がゐたり、往來に撒き散した南京豆の殻を一一ひつくり返して見れば残つた中味の缺らを口に持つていく紳士風の男がゐたり、外をあるくと吐胸を突かれる光景に、私は到る所で出會はなければならなかつた。

しかし一度ベルリンを出て、例へばドレスデンへ行き、ドレスデンからゼクジツシエ・シユヴイツなどの田舎をあるき、道で出會ふ農夫の顔を見たり話し合つたりしてみると、これはベルリンの住民とはまるで違ひ、善良で明朗で健康で、どこに戦争の痛手を受けてゐるのかわからないくらゐ、泰然と生きて來てゐる感じだつた。ハイデルベルクに腰を据ゑてゐた友人の所からも、その後同じやうな印象を報告して來た。いくらベルリンが疲弊し困憊して墮落してゐるとしても、ドイツに地方があり農夫がゐる限り、これが活光源となつて、ドイツは必ず立ち上がるに違ひな

いと、私はドイツの再興を疑はなかつた。

豫想の通りドイツは再興した。しかしそのドイツは誤れる指導者たちの爲に、更にみじめに叩きつけられた。

第一次大戦でドイツは敗れたとは言つても、敵に自國を荒されたわけではなかつた。第二次大戦では他國を随分荒ししたが、しかし敵から徹底的に自國を荒しつくされた。絨毯爆撃は、ドイツの眼ぼしい都市といふ都市を、字義通り總まくりにまくり上げて、あとに一物も残らないやうに殲滅してしまつた。今度は恐らく首都も地方もなく、全ドイツが戦争の痛手を深刻に體驗してゐるに違ひない。私がゼクジッシェ・シュヴァイツで會つた農夫のやうなものは、今日のドイツにはもう一人もゐないのではないかと思ふ。

さうは言ひながらも私には、今でも不思議に、ゼクジッシェ・シュヴァイツの道で、私に櫻ん坊を賣つてくれた農夫や、トイフェルスヘエへの道を教へてくれた農夫の、善良そのもののやうな顔つきや、生活力に充ちたからだつきが思ひ出されるとともに、今日でもなほドイツにはさういふ頼もしい農夫がたくさんゐて、それが再びドイツ再興の礎になるのだといふ氣がしてならないのである。

これに比べて日本の農夫はどうしてあんなに、肉體的にも精神的にも、不健康で不明朗な感じ

がするのだらう。これはあるひは「死なぬやうに生きぬやうに」取り扱へと下役に教へた徳川の百姓政策が、かういふ農夫を作り上げたものかも知れない。しかし『ジムブリツイシムス』などを讀んで見ても、ドイツでも少くとも十七世紀の末ごろまでは、農夫は人間の扱ひはされてゐなかつたはずである。日本の農夫とドイツの農夫とは、もともと持つて生れたものが違ふのか。それとも日本とドイツとは文化浸潤の程度に非常な相違があるのか。しかし私がゼクジッシェ・シュヴァイツの道で會つた農夫は、文化的に言つて、日本の農夫と別に相違がありさうにも感じられないのである。

するとこれは、あるひはひとの持つてゐるものはみんな良く見える、私のインフェリオリティ・コムプレクスから來るのか。

## 軍樂隊

岩波現代叢書の『アインシュタイン』を読んでみると、アインシュタインが十歳ぐらゐの時分、ドイツのミュンヘンでは「町町を、音楽に興奮的な強制的なリズムと音調を與へるところの、ドイツ軍隊の特有な編隊がドロドロいふ太鼓と甲高い横笛をならしながら行進してゆき、舗道や窓ガラスが馬の蹄のためにガタガタなりだすと、子供たちは夢中になつて、この行進に加はり、兵隊たちと歩調をあはせよう」とし、親達は子供に「お前だつていつか大きくなつたら、この行列に加はつて行進できるんだよ」と言つて聽かせるのを常としてゐたといふ記述があつた。普佛戦争がすんで二十年近くたつた時分のことである。

私がベルリンに滞在してゐたのは第一次世界大戦がすんで四五年たつた時分のことだつたが、そのベルリンの町町をミュンヘンの場合と同じやうに、一中隊ばかりの歩兵が、樂器の編成は多少違ふが、同じ軍樂隊を先に立てて、歩調を揃へてあるき廻つてゐるところによく出會つた。それは騎馬の編隊だつたこともあつたやうに思ふ。ただいつでも驚いたことは、その編隊のあとに

續くベルリン市民の、非常に多かつたことである。アインシュタインの當時はミュンヘンでは子供達だけがあとに續いてゐたといふが、ベルリンでは紳士も學生も御用聞も商人も乳母車を押し、てゐる中年の女も、市民のあらゆる階級の者がぞろぞろとあとに續いて、歩調を合せて楽しさうに行進し、その數はどうかすると兵隊の數よりも多いことさへあつた。勿論彼らはいい加減あるけば自分の目的地へそれて行くのだつたらうが、しかしどうしてこんなに猫も杓子もあとをつけるのか、私には不思議でならなかつた。

ドイツ人は音楽が好きだからかういふ機會にも自然あとにくつついてあるのかとも思つたが、しかしアインシュタインのこの話を聽いてみると、これはあるひは普佛戦争以來のことで、勝利に誇るプロイセンの軍國主義が考へ出した、一種の示威運動のやうなものではなかつたのかとも思はれ出した。アインシュタインの當時はベルリンでも子供達だけがあとに續いてゐたとしても、三十年からたてばその子供はみんな大人になつてゐるはずである。子供の時に叩き込まれた印象と習慣とは、大人になつてもなかなか取り去られることはあるまい。

191 軍樂隊  
アインシュタインはそれを見て「僕は大きくなつたら、こんな可哀さうな人人の一人になるのはいやだ」と、いつも両親に言つてゐたといふが、しかし恐らく大部分の子供は、外見上の華やかさ勇ましき規則正しさに眩惑されて、その核心にある「可哀さうな」ものを感じることができ